北辰會雜誌

第參拾七號

第四高等學校北辰會

明治參拾七年四月十日發行

（非賣品）

北辰會雜誌第參拾七號目次

論說

日露開戰ニ就テ北辰校學生諸子ニ告ク　吉村但豊

是の如く我考ふ　赤城縞花

學生の品位　鴨水

道德雜感　龍山敏庵

青年の境遇を論して其決意を促す　綠灣

雜錄

聖アウグスチヌス　森内政昌

歷史的諺　浦井恒堂

越中の名勝　林忘我

定性分析法　龜川生

文苑

能登半島　半脫

春の夕　古川如翠

故郷の四季　大谷南海子

弦の響　水衣

蘆の湖のほとり　山崎麓

夕づゝき　水衣

破簑　住の江

袖の涙　外圃

荒鷲　秋風、外圃、

和歌　風草、半脫、

あき其月、

紫會の一人、

俳句

西湖遊草跋　紫雲、外圃、

書盡忠報國榻本後　KN生、

漢詩　四高俳句會

雜報　村上函峰

同

敏庵

報國義會。武道記事（柔道大會、劍道大會）、第十一回秋季陸上大運動會記。學窓漫言。猛省を促す。吐月峯。一筆啓上。寮報（第二回鐵脚隊遠足記事、自修餘錄）

論說

日露開戰ニ就テ北辰校學生諸子ニ告ク

吉村但豊

日露開戰ノ主旨ハ詔勅ニ明示セラレタルカ如ク我ハ妥協ニ由テ時局ヲ解決シ以テ平和ヲ恒久ニ維持セムコトヲ期シ半歲ノ久シキニ亙リ屢次折衝ヲ重ネシニ拘ハラス彼ハ曠日彌久徒ニ時局ヲ遷延セシメ陽ニ平和ヲ唱道シ陰ニ軍備ヲ增大シ以テ我ヲ屈從セシメントセシニ起因セルモノニシテ其ノ正邪曲直ノ孰レニ在ル乎辯ヲ俟タスシテ瞭カナリ惟フニ天ハ正ニ福シテ邪ニ禍シ人ハ直ニ與シテ曲ニ背ク是レ今回ノ開戰ニ關シ我國カ歐米文明諸國ノ同情ヲ博シタル所以ニシテ又仁川旅順ノ海戰ニ於テ立ロニ大捷ヲ得タル所以ナルヘシ

古語ニ云ハスヤ天ノ時ハ地ノ利ニ如カス地ノ利ハ人ノ和ニ如カスト我大日本帝國ハ上ニ叡聖文武ナル天子ヲ戴キ海陸軍人ハ勇武ニ一般人民ハ忠實ニ上下老少同心協力以テ事ニ當ルモノニシテ所謂人ノ和ニ於テハ天下無比ト謂フヘク加フルニ地ノ利天ノ時一トシテ備ハラサルナケレハ百戰百勝多クノ歲月ヲ費ヤサスシテ平和ヲ克復シ得ヘキハ敢テ疑ヲ容ルヘキニアラサルナリ

平和克復ノ後我帝國ノ位置形勢ハ如何ニ推遷スヘキ乎蓋シ世界一等國中大ニ其ノ位置ヲ高メ其ノ

責任愈々重大ト爲ルヘケレハ内ハ益々社會ノ文明ヲ推進シ東洋諸國ヲ誘掖指導シ外ハ愈々國家ノ利權ヲ擴張シ西洋先進國ト對峙提携シ以テ世界永遠ノ平和安寧ヲ維持セサルヘカラス若シモ戰時ニ於テハ能ク勝ヲ制スルアルモ戰勝ノ後他ニ一籌ヲ輸スルカ如キコトアラハ啻ニ社會ノ文明ヲ推進シ國家ノ利權ヲ擴張スルコト能ハサルノミナラス反テ諸外國ノ侮辱ヲ蒙ムルコトナシト謂フヘカラス又今回ノ戰爭ハ政府ノ戰爭ニアラスシテ國民ノ戰爭ナリ一時軍事的ノ戰爭ニアラスシテ永遠國交的ノ戰爭ナリ而シテ我大和民族ノ正氣ヲ大ニ世界ニ發展スルノ好機ナリ我國民タル者其ノ責任ノ重且大ナルコトヲ骨ニ刻ミ肝ニ銘シテ大ニ發憤興起スル所ナカルヘカラサルナリ

然リ而シテ此ノ重大ナル責任ヲ負擔スヘキハ如何ナル人ナル乎其ノ初ニ當テハ現ニ世ニ立チ事ヲ執レルノ人ナルヘキハ言ヲ俟タスト雖モ之ヲ繼承スヘキ者ハ現ニ高等教育ヲ受ケツヽアル所ノ學生ノ外ニアラサルナリ果シテ然リトセハ我北辰校ノ學生諸子カ近キ將來ニ於テ爲スヘキノ業務ハ廣大無邊際限アルヘカラス諸子能ク心力ヲ盡クシテ之ニ當レハ如何ナル偉勳大功モ贏得サルコトナカルヘシ諸子ハ此ノ盛時ニ生レテ高等ノ教育ヲ受ク實ニ多望多幸ノ人ト謂ハサルヲ得ス試ミニ問フ諸子ハ如何ナル覺悟ヲ以テ此ノ重大ナル責任ニ當ラントスル乎察スルニ諸子ハ既ニ心中窃ニ大ニ期スル所アルナルヘシト雖モ單ニ將來ヲ夢ミルノミニテハ未タ以テ足レリトスヘカラス現任ニ於テ業ニ既ニ此ノ責任ヲ負ヘルモノナルコトヲ忘ルヘカラサルナリ

何ヲカ現在ニ於ル責任ト謂フ他ナシ諸子カ日夜從事シツヽアル所ノ身心ノ鍛錬研修是レナリ思フニ此ノ鍛錬ト云ヒ研修ト云フ事ハ諸子カ疾クニ熟知スル所ニシテ今更事新ラシク之ヲ口ニスルノ必要ヲ見サルカ如シサレトモ試ミニ之ヲ從來ノ狀況ニ顧ミルトキハ亦大ニ憂フヘキモノアルニ非ル乎身體ノ鍛錬ハ皆常ニ之ヲ口ニス然レトモ其ノ實際ヲ視レハ武術ニ於ルモ運動ニ於ルモ萎靡不振ノ色アルニ非サル乎智織ノ研鑽ハ日夜勤メテ怠ラサルカ如シ然レトモ單ニ日課ニ跼蹐トシテ自發的ニ之ヲ研磨スル者尠ナキニ非ル乎道德ノ修養ハ之ヲ稱道セサル者ナシ然レトモ各々内ニ顧ミテ秋毫モ恥ツルナキ者多シト謂フヲ得ヘキ乎蓋シ諸子カ將來世ニ立チ事ニ當ルノ日ニ於テ社會國家ニ勳功ヲ立テント欲セハ宜シク今日ニ於テ堅實强固ナル基礎ヲ築カサルヘカラスサレハ諸子ハ決シテ現時ノ狀態ニ安ンスヘキニ非サルナリ

今ヲ距ルコト十年前我帝國清國ト事アリ戰捷ノ結果遼東半島ヲ得タリシモ三國ノ干涉ニ由テ之ヲ還付スルヤ我國民ハ上下一般ニ臥薪嘗膽ヲ唱ヘ確乎動カスヘカラサル所ノ精神ヲ發揮セシニ似タリキ然リト雖モ冷熱ノ變化ノ速カナルハ我國民ノ短所ニヤ歲月ヲ經ルニ隨テ漸クニ平和ニ慣レ當時ノ精神自ラ銷沈シ淫靡ノ俗奢侈ノ風日ニ增長シ引テ學生社會モ之カ感化ヲ受ケ月ニ墮落ノ淵ニ陷ルニ至レリ此ノ時ニ於テ日露ノ間ニ戰ヲ開ク此レ果シテ悅フ可キカ憂フ可キカ抑〻戰ナルモノハ決シテ悅フヘキノ事ニアラス然レトモ我國ノ現狀ニ就テ之ヲ觀ルニ精神ノ興奮ニ風俗ノ改善ニ最モ的切ナル藥石ト爲リテ較大ナル効用ヲ顯ハスヘキハ亦疑ヲ容ルヘキニ非サルナリ

我愛敬スル所ノ學生諸子願クハ此回ノ開戰ヲ機トシ所謂心機ヲ一轉シ更ニ大ニ發憤興起シテ身心ヲ鍛錬研修シ以テ天下ノ大人物タランコトヲ期スヘシ蓋シ軍人ノ强敵ニ於ルカ如ク堅忍不拔ノ氣象ヲ以テ學問ニ當レハ其ノ難關ヲ破ルコト決シテ難キニ非ス而シテ一トタヒ此ノ難關ヲ破ルノ後

各〻專間ノ職務ニ從事シ耐久持重孜々トシテ怠ラサレハ遂ニ大功偉勳ヲ立テ以テ國家社會ヲシテ永遠ノ平和安寧ヲ保タシムルヲ得ヘシ余ハ諸子ノ此ノ戰捷ノ報告ニ接スルヲ待ツコト恰モ日露戰爭ノ捷報ニ於ルカ如キモノアルナリ

是の如く我考ふ

赤城縞花

一

舊歲の迷想は既に破られ、新年の希望は吾人の前途に輝かずや。一歲また一歲、碌々として爲す無きは正に吾人の一大耻辱也。然り吾人には吾人の採る可き道ありて存し。從て論ず可き題目あり、歌ふ可き題目あるに非ずや。

二

日月一轉また一轉、世は舊を送りて新を迎ふ。內にありては、滿堂の和氣靄然として掬す可く、椒酒を酌める者は陶然として春襟を暢達す、外にありては、衣冠を正うしたる長幼の士庶往來交錯して互に相慶賀す。思ふに吾人は幸にして堯民鼓腹の樂を享くる者なる乎。然り斯の如くむば、吾人は眞に太平の民ならむ、然れどもこれ唯社會の半面に於ける情態のみ、若し夫れ他の半面を觀察するに至りては、吾人孰んぞ太平の民たるを謳歌し得むや。

予新春第一日、賀客に次いで知己の門に禮し、途に某街を過る、人々欣々然として慶賀に忙しきは此處に於ても異る事無し、然れどもたゞ一の予をして驚かしめたる者ありき。何ぞや。絹帽を戴き燕尾服に身を裝ひ、車を走らせたる美髯の紳士か、金光燦爛たる戎服を着け、意氣揚々として銀鞍に跨れる偉丈夫か。あらず、あらず。唯一個の賤女のみ、然り唯一個の賤女のみ。綺羅錦繡の賀客道に絡繹する中に一賤女を見る、既に異樣の光景たり、更に彼女が人の軒下や塵溜を漁りて、幾何かの糧を求めむとせるを見るに至りては、予豈に萬感の胸に溢るゝ無かなむや。

新春を迎へて喜び狂ふ者あり、車を飛ばして權門に叩頭する者ある世には、昨日も今日も人の軒下を徘徊して、年と共に貧窮に陷り行く彼女の如き者ある也。豈に悲しまざる可けむや。然るに冷血漢は曰く、斯かる悲境に陷りたるは彼女自身の愚の致す所、豈に人を怨まむやと、然り或は然らむ。然れども彼女を生める社會は己の務を忘れ、其責を獨り彼女にのみ歸し、之を一笑に附し去りて可ならむや。果して社會其自身は彼女を迫害せざりしか、果して彼女を追放せざりしか、冷血漢希くは沈思せよ。然れども假りに彼の輩に百步を讓り千步を讓りて、彼女に就て云々せざるとするも、彼女が背にしたる幼兒は、何の罪ありて繦褸の中に踞まらざる可からざるか、更に、何の罪ありて塵芥中の殘肴を味はざる可からざるか。神の如き淸きもの聖なるものは、彼等幼兒の中に求めて得らる可し、然れども、罪の如きに至りては、秋毫の末と雖も、豈に之を求め得可けむや。嗚呼夫れ斯の如くむば當世何ぞ太平ならむや、幸福ならむや。また更に斯の如くむば、新年何が故に芽出度く、新年何が故に祝せざる可からざるか、冷血漢更に考一考せよ。

三、

予嘗て平民新聞によりて、世田ヶ谷の繿縷市の記事を讀む。其處に賣らるゝ所のものは、繿縷六分と荒物三分と、他にれでん濁酒等にして、此等の品物は一として滿足に其形躰を具ふる物無けれども、近鄕近在の老幼は爭ひて此處に集り、汚穢極まる繿縷屑物を購ふを無上の樂となし、一年中の賑を極むといふ。其文中最も予をして感せしめたるものを左に記さむ。

宅には九文七分の足袋の右があるから左を買ひたしと選り分て居る老媼あれば、コールテン鼻緒表付の左はあれど右がなければ似たものを下さいと、古下駄を探す年增あり、殊に目立てるは、青赤黃白黑樣々の混合せる糸屑の而かも五寸と續けるはなきを、二貫乃至三貫目一把にして十二三錢なり、此屑の束把を右に左と擔ぎ廻る妙齡の婦人幾百人なるを知らず、如何にするにやと聞けば、冬の夜長に开を繫ぎ合せて蒲團に織るなりとぞ、又方一寸にも足らぬ布片の屑、繃帶の樣なる穢なき細長の布片を一貫五百目二貫目と纏めて負ひ返る者も幾十人ありけん、是は孰れも河向ひの稻毛の人々にて雪の日雨の夜の內職に此布片を草鞋や草履の爪先と踵に作り込むなり

用なしとて捨てられたる物も、一度屑屋の手を經て此の市に來るや、忽ち變じて有用の具となる也。豈に驚く可きに非ずや。

また之を聞く、客冬我邦の所謂上流社界の婦人間に、春粧の具として最も流行を極めたるは、ブローチ(襟留)にして、某侯爵夫人は之に金剛石二十個を嵌入せしめて價三千八百圓を拋ち、某伯爵夫人は爲めに五千二百圓を、また某伯爵夫人は爲めに三千六百圓を投じたりと。天下豈に之に過ぐる贅澤あらむや。

繿縷市に集る者多くはこれ正直勤勉の人、而かも片足の下駄を失ひて片足の下駄を求めざる可からず、糸屑を購ひて寒夜を凌ぐ蒲團を作らざる可からざるが如き憐なる者也。然るにかの所謂貴婦人の徒は如何。彼等平生逸樂に耽り碌々として爲す無きも、一度欲すれば千金のブローチ立所に其身を飾る、殆んど不可思議也。流行を追ふを以て、己が盡さざる可からざる義務なるが如く考ふる、現代の所謂貴婦人に取りては、唯一個のブローチと雖も、之を缺ぐは一大耻辱ならむ。然れども之が爲めに數千金を投せずとも、侯伯爵夫人たる資格に於て何の缺ぐる所かあらむ。而して之れ獨り某々貴婦人にのみ止まらず、世の所謂上流社界に在る者、滔々として皆斯の如き也。嗚呼彼等にして其胸裡の何處にか猶其良心を保たば、かの繿縷市に集る人々に對して、毫も耻づる所無きを得るか。

そも彼等は何か故に爾かく富み、彼等は何か故に爾かく貧しきか。富む者必ずしも正直ならず勤勉ならず、貧しき者必ずしも不正ならず怠惰ならざる也。而して現代の趨勢を見るに、富む者は益々富み、貧しき者は益々貧しきに至らむとす。これ果して喜ぶ可き現象ならむや。而して單に之を富者の側より見るに、富者が自己の財を限り無く增殖するは、一見甚だ喜ぶ可きが如きも、己が富の增加するは則ち他の富の之に從ひて減少するを意味するものにして、貧民の增加は遂に社會の秩序を紊り、從つて富者其自身の危殆を來す可けれは、貧者の增加を防ぐは、蓋し富者が自家の防衛を爲すに當る。喜ぶ可き富者に取りて既に斯の如し、況んや貧者其自身に取りては、

貧の益々甚しからむ事は到底忍ぶ可からざる所也。世の識者深く此處に慮る所あれ。

四

萬籟死し暗香浮動する所にて、是の如く我考ふ。

學生の品位

鴨水

市井謠つて曰く、「書生々々と輕蔑するな、今の大臣もとは書生」、げに青年は國家の元氣なり、第二の國民なり、古、敵國を陷れんとして、先づ其の青年を墮落せしめよと叫びたる、なにがしの名將を待たずして、青年の元氣、青年の氣格の、其の國家に及ぼす影響の絶大なるは、何人も首肯せざるべからざる事實なりとす、彼の「白髮何の榮ぞ、紅顏何の咎ぞ」と絶叫して、吾人青春の爲めに、万丈の氣焰を吐きたる吾が若きピットを始めとして、年尙ほ壯に達せずして能く驚天動地の偉業を成し、社會と人生とに多大の貢献を爲し得たる者、史上其の例に乏しからず、啻に此の著大の特例を引用するまでも無く、青年の氣風の其の時勢に及ぼす影響の蔽ふべからざるは、社會萬人の等しく認むる所、「白髮何の榮ぞ」とは必ずしもピットを俟つて始めて發し得べき快語にあらざるを知るべし。

青年は飽くまでも、意氣豪放ならざるべからず、快活鐵宕ならざるべからず、優柔不斷は青年の敵也、文弱淫逸は青年の惡魔也。

夫れ然り、然りと雖も、是に一の思考を要すべき問題あり、意氣豪放ならざるべからずとは、所謂東洋的豪傑を氣取りて、小節に拘泥せざるべしとの意にあらず、快活鐵宕ならざるべからずとは、謹愼遠慮無かるべしとの意にあらず、優美温雅と、優柔不斷とは自から別物也、温厚淸淑と文弱淫逸とは、其の間多大の差あつて存するは兒童走卒尙ほよく之を認めん。

翻つて思ふ、現時吾が邦の學生青年者流の狀態果して如何、吾人は彼等を目して、意氣消沈せりとは言はず、文弱淫逸なりとは誣ひずたゞ惜しむ、彼等の意氣や、或は彼の衣は骭に至り底の笑ふべき空元氣にあらざる無きか、彼等の鉄宕不羈は、或は放逸無賴のそれにあらざるか。

世は日に月に駸々として文明の域に進みつゝあり、少くとも吾人は時々刻々理想の境に進みつゝある也、曾て、鉄拳を振つて自己の權利を主張したりといへる、蠻人の昔を夢みる者はげに憐むべきかな。啻に現時の青年學生が、野蠻の舊夢に耽る者尠からざるのみならず、所謂當代上流の士として、國政に任じ、社會の上位を占むる輩が、尙ほ未だ、破壞時代の夢より醒めずして、其の議會の席に於て、其の安樂の席上に於て、頻々として、識者の苦笑を買ふべき、不作法、無鉄砲なる活劇を演じて顧みざるは、吾人の屢〻耳にする所、長大息に堪へざる也。

願はくば過去をして過去を葬らしめよ、當時の所謂紳士は度し難し彼等は所謂朽木の餘のみ、糞土の墻のみ、吾人齒牙にかけずして可なり、唯怖る、現時の青年學生が、或は厭ふべき彼等の覆徹を踏みて、此の笑ふべき滑稽劇を再びせんことを。

德富蘇峰氏曾て誌して曰く、

「明治三十年の春、記者の英國に在るや、偶々議會の傍觀に赴きぬ、當時恰もクリート島の基督教徒が、希臘王國の後援を賴みとし、土耳古に向て反旗を飜へし、而して歐洲列强の艦隊は、其一点の星火が歐洲の大火災とならんことを慮り、之を封鎖し、之を砲擊したるが爲めに、英國の在野黨が、大に英國政府の外交政略を非難せし、其の討論の際なりき、滿場塡塞、議員は溢れて傍觀席を占めたるものすらありき、在野黨の領袖株の一人、サー、ロバート、リード氏は、滔々現政府の措置を攻擊し、英國女皇政府の艦隊は、回教徒を幇護せんがために、基督教徒の血を流すを辭せずと斷言したるや、海軍大臣ゴスシエン氏は、手を戟にして對立し其の言の不當なるを反駁しぬ、而してリード氏は更に起立して、自から其の言の不穩なりしを謝しぬ、記者は之を見て、英國議會の實に紳士の集合体なるを賞讃せんと欲するも能はざりき。

夫れ情熱し氣昂る、何人たりとも其の舌を控制する能はざる瞬間あらむ、而も其の然るや、何人たりとも、其失言を謝するを耻とせず、而して滿場亦之を容認して、至當の事となし、毫も意に介するものなきが如し、之を我が帝國議會の賣言葉に買言葉と比較すれば、吾人は實に其の額上に冷汗の湧き出づるを禁ずる能はず」

全國民の智識と品格とを代表せる、我が帝國議會の狀態已に此の如し、以て其餘を推すに足らん、此の惡弊を一洗して、吾が國民の品格に一新紀元を作るべきは、實に吾曹青年學生の責務也、而も其の中往々にして、此の惡弊の余唾を嘗めて得々たる者を見るに於ては實に憂慮措く能はざるものあり、彼の代議士の不作法、破廉耻を笑ふこと勿れ、吾人は時として、彼等青年學生の中に、禮義の何たるを解せず、品位の何たるを思はざる破廉耻漢を見ること少からず、教室に、道路に、停車場に、公會場に、醜態百出、恬として耻ぢざる者多し、社會も亦彼等の學生たるの故を以て、其不作法、無禮義を容認せんとするが如き傾向あるは何ぞや、吾人はかゝる惡風の青年學生間に、今尙ほ混々流行せるを見て、衷心杞憂に堪へざる也。

「書生々々と輕蔑するな、今の大臣もとは書生」、詐かるゝ勿れ、學生は必ずしも、未來の大臣大將たるが故に貴きにあらず、學生は宜しく學生其者として貴かるべし、當代社會の防腐劑となり、當代氣風の皷吹者となつて、こゝに始めて學生の面目あり、學生の品位立つ磊落の名の下に、自己の無作法、無禮義を蔽はんとするが如き、キザなる滑稽を止めよ、狂犬は撲殺せざるべからず、無賴の奴輩は放逐せざるべからず。

スマイルス曰く、人生の榮冠は品性也と、少しく見る所あり、品格論を草す。(三十七年二月)

道德雜感

龍山敏庵

今や日露の干戈相交ゆるのとき國民は如何なる覺悟をなすべきか、外敵固より恐るべし、されど之とともに內治を注目せざれは如何に戰勝の榮を得るも自ら倒るゝの悲運に遭遇すべし、熟〻現時の日本を觀察するに、光輝燦々人をして眩惑せしめ、物質的文明は日進月步の勢を以て進み、歐米諸國と肩を並ぶるに至りぬ、然るに飜て精神的文明を見れは果して奈何、試みに靑史を繙け

は德川三百年の太平忽焉として破れ、王政復古の御世となり、髮はきられ、刀は取られ、和服は洋服と變じ、足駄は靴と改まりぬ、是につれて從來德育を支配せし武士道は舊思想として排せられ、西洋の風潮忽ち我道德界に亂入し來り、殆んど之が爲め我道德界も席卷せられんとせり、換言すれは全く舊來の道德主義と新來の道德主義とが互に相混亂して世人をして其是非を判定し得べからしめたり、之を混沌時代と名けんか、現時我國の德育界ほど混亂せるものなかるべし、未だ其標準の何たるやを辨へず、甲論乙駁其歸する處を知らず、かくの如くにして日月を空過せんか、邦家の前途は實に憂ふべきものなくんはあらず、數へ來れは今や明治は三十七の年を重ぬ、三十七は短は短なりと雖も既に小昔なり未ゞ整正を見るを得ざるは何たる迂ぞや、されど一方より盛に德育養成、教育法改正などの議出づるに至りしは吾人の大に喜ぶ所なり、是れぞ我國德育の整正時代に行かんとする前兆なるか、須らく世の識者の力により之を成さざるべからざるなり」

現時の物質的文明は實に立派に裝飾せられたり、されど其反面の德育的文明は實に憐むべき境に呻吟しつゝあるなり、既に物質的文明が國家に必要なるとともに精神的文明も之と相並んで進まざるべからず、世人往々文明てふ字は唯物質的文明をのみ意味するものと考ふれど是れ大なる誤にて兩者の相俟ちて發達するに非れは文明と稱する能はざるなり、所謂車の兩輪、鳥の兩翼の如く備はらざるを得ざるなり、然るに我國德育が何を以て物質的文明とともに進まざりしか、固より其原因は多くあるべしと雖も其主なるものは維新てふものが我國固有の武士道を破り、而して新思想を捕へ來らんとするも未だ之を眞に咀嚼する能はず、爲めに未だ何れともつかぬ情態が卽ち現時の我國道德界なりといふべし、現時の吾等先輩たる人は混亂時代の中に養成せられし人故、未だ德育に意を用ふるの難かりしは吾人の諒察する所なり、然るに憐むべし、此秩序井然たる世に生を受くる吾人青年徒に先輩の轍を覆まんとす、何たる愚ぞや、たよそ如何なる事を論ずるにも時代といふものが最も肝要にして注意すべきことなり、元來我邦人は摸擬的精神に富み未だ創作的精神を有せざるは世人の通評なり、洋人我を諷して猿的動物といふ、是れ或は適評ならん、固より摸擬も時によりて可なり、されど味噌も糞もともになめては宜しからず、故に德育を擇ぶにも長所を取りて短所を捨つべきは當然のことにして東西兩洋の文明を參酌して、以て我君子國に適せる德育を定めざるべからず、然らば吾人は果して如何なる道德を擇ふべきか、吾人は斷言す、今後の道德は飽くまで國家的道德ならざるべからず、卽ち今日の日本に適切なる道德を養成せざるべからず、日本には日本の特質あり、國粹あり、何ぞ西洋の糟を丸のみにして得々たるを得ん、外國は外國なり、豈我國粹を害すべけんや、又道德を擇ぶには國家の時代てふものを考へざるべからず、德川時代の武士道は誠に嘉すべし、されど之を其儘今日用ゐんとするは五十歩百歩の誤りなり、故に道德の標準を定めんには先づ我國特有の道德を保持し、其短に對して西洋の長を參考して之を補はざるべからず、東洋倫理のみをたさめ若くは西洋倫理のみ究めて以て我國道德を定めんとするは樹によりて魚を求むる類、其誤れるや吾人の言を俟たざる所なり、

又吾人が道德を修むる上に於ては消極積極二方面あることを忘るべからず、是れ世人往々誤解する患あるを以て聊か之を述べんとす、凡そ道德は己れ一人にて起り得べきものにあらず、必ず相

對的のものなり、試みに問はん、吾人果して如何なる處にか住む、曰く、吾人は此社會に住む、又曰く、吾人は此日本に住むと、果して然らは從て社會國家に對して其義務を負はざるべからず、是に於てか知む、吾人は一個の人間として各自の道德を修め、更に進んで其國家社會に對しての道德を修めざるべからざるを、是れ卽ち道德界に消極と積極との二方面ある所以なり、此二者にしてともに全からずんは未だ眞の人といふべからざるなり、固より此二方面たるや、瞭然たる差異あるに非ず、其幾分は共通なる点を見出さん、其別を立てて解くは特性をあらはさんが爲めなり、然らは消極的道德とは何ぞや、之を換言すれは所謂「勿れ主義」ともいふべきものにして禁止の意あるもの、彼耶蘇の十誡、釋尊の十戒等は皆此種に屬するものなり、つぎに積極的道德とは何ぞや、是れ自由發展の行爲をいふものにして奬勵の意を寓するものなり試みに古人の行爲を照し來らは或は山に隱れ、野に遊び、悠々自適、自ら耕し自ら食ひ、他人に對して害を加へず、其心は鏡の如く淸きもの所謂山中獨善の人は、是れ固より消極的道德をば完全に盡せしものなれど、未だ其身の國家社會に對する義務を全ふせざるを以て未だ人道を盡せしといふを得ず、所謂消極的道德を知りて積極的道德を知らざるものといふべし、此等の人は其時代には必要なりしならん、されど現時の如き國家社會の關係の下に立つものは唯此消極的道德のみにては滿足するを得ず、卽ち勿れ〳〵といふのみにては足らず、必ずやかくせよといふ積極的道德を要す、故に吾人は先づ消極的道德を修め、然る後他人の權利を妨げざる範圍に於て十分に發展せざるべからず、かくの如くして初めて道德の完全を期すべきなり、世人往々私德のみ行はるれは以て德者となす、是れ或は德川三百年の德者たりしやも知れず、されど明治の日本に於ては決してかゝる德者は眞の德者に非らず、必ず此兩極を修めざるべからず、彼古の竹林の七賢人や、ショーペンハウエル、ニイチエの如き人は吾人は倫理的方面に於ては必ず學ぶべき人にあらず、かゝるものを排し、力の及はん限り國家社會の義務を盡さざるべからず、

聞說近時倫理社會には過去の敎育法の非なるを知り、大に德育に重きを置かんとするの士多くあらはるゝに至りしは國家の瑞兆か、殊に文部當局の士は之を實行せんとせらるゝは大に吾人が意を得たるものなり、吾人固より淺學菲才、未だ乳臭の嫌あるものと雖も、將來大に此德育問題に向て究むる所あらんとす、幸に識者の指導高評を得は幸何ぞ之に若かん、

青年の境遇を論じて其決意を促す

緑灣

一

余は此に不肖の身と淺薄なる觀識とを以て廣く我國青年の境遇を論ぜんとす、事余りに大にして之を論結せんと自ら顧みて恐縮に堪へざる處、然も諸兄に向つて決意を促がすにいたりては實に密に赤面する所ありと雖、卑見を陳述して諸兄の一讀を煩さんとす、其れ拙なき文、滿ざるの意は之を深く尤め給ふ事なく、唯意の奈邊に存するかを察知せられん事を望む。

余は本問題を眞面目、且つ丁重の態度を以て論ぜんとするに先だち、此に一言せざるべからず、

其は余が此の論を草するや、徒らに論を好み、文を弄ばんとするにあらずして聊か誠心誠意を以て解釋し日頃胸中に持せし所なるか故に、讀者諸兄に於ても其心せられん事は、實に切望に堪へざる所なり。

若し其れ人間問題を度外し、人生の意味を知らんとせず、人間の目的義務等に何等の興味解釋をも持たずして、富貴逸樂若くは小名譽を追求するの諸兄に到りては余は豫め謝し置くざるべからず、其は此論たるや、諸兄と主義目的を異にし、讀み來りて何の得る所なき無意味の文字たるを免れずして、徒らに諸兄を煩さん事を知ればなり。人間問題を眞面目に考察し、人生の目的義務を解釋したるの諸兄にして、彼の天人論に說く如く人類は向上にあり、個人は人類に向つて相關連して此の目的を共達すべきもの、猶進みては人類向上のために己れ犧牲たるを厭はざる主義實行者たる諸兄には、余は强ひて一讀を乞ひ敢て一考を煩はさんとす、希くば論者の不肖を見ずして論の是非を判決し、若し是となさば着實實踐の途につかれん事を望む。

二

余は今本問題を便宜上左の三條に分ちて論ぜんとす、

一、時代及び社會、
二、家庭、
三、指導者、

一、時代及び社會。歷史か吾人に語る跡を顧みて時代及び社會が如何に當時の人心に影響せしかを見れば實に今日を知り未來を卜するに足らん、乞ふ暫く過去の著しき時代及び社會につきて語らしめよ。

ガンヂス河畔に一時の文華を發ちし三千年前の印度は如何、彼のアールヤ民族か草叢深き中央亞細亞より出でゝ一度此地を征服して以來、彼等か建設せし幾多の王國は相軋轢して、干戈堪ゆるなき有樣なりき、然も自然か與へし土地の豐饒は彼等をして、奢侈逸樂に飽くを得せしめたるか、其結果として印度の文化は黯澹たる雲霧の覆ふ所とせり、飄逸なる神話も彼等の耳を傾けしむるに足らす、幽玄なる哲理も彼等を默想せしむる能はざりき、思へ道德之糜爛し、宗教は腐敗せし此時に大聖釋迦は生れ、此社會に出で來りたるなりき。

見渡す限り廣漠たる一大平原分れて數多の國を形成し、甲は乙を合せ丙は丁を軋り、世に一の光明なく群雄日に力を延べんとして、平和の溫情は人心に其影を認めず、義は利のために覆はれたる春秋戰國時代は、實に大君子孔子を產出しぬ。

燦然たる華麗赫きしバビロン帝國は亡び優雅文飾を極めし希臘は衰へ、至尊の號を得たるシーザーの武力は地中海岸の地に沿ねく、其配下の苛配に腦みしパレスタインの地の當時の有樣を思へ、司政者は正しきを忘れ同胞の情誼は利のために拋たれ、モーゼか文も彼等に光明のあるを認めしむるを得ざりし二千年の古を思へ、これ此時は神子キリストが出顯せし時にてありたるなり。

土地の何處を問ふを己めよ、時の如何云をふ勿れ、偉人豪傑が顯はれし時と社會とは、實にこれ彼等偉人豪傑を作りたるものなりき、我國南北朝には楠正成を生み戰國時代に秀吉を出だし、歐

洲中世にはルーサーを作り佛國革命には奈翁を產し　米國獨立にはワシントンを顯はしぬ、思ひ回らせバ彼等は皆時勢の產物に外ならざるかり。乞ふ余か時勢產物の意味を誤解し給ふ勿れ、余は世の多くの者の如く時勢の產物を輕視するものにあらずして、反つて天授の恩惠物と考ふるものなればなり。然るに世の多くの者時勢產物とし云へば輕蔑的態度を以て聞き捨てんとす、余は彼等の意を察するに苦しむ、余は彼等を以て時勢の產物の欠くべからざる事を知らざる者と斷ずるに躊躇せず、嗚呼是何たるの愚ぞ、吾人若し此產物を得ざる時は如何、冬來りて雪降らず春を迎へて花咲らす鳥啼かず夏來りて野は綠せず秋を待ちて黃金の色を見ざる時は如何、一言にして盡す吾人若し時勢の產物なかりせば唯知る一の亡あるのみを。

前述の如く偉人豪傑は事實に於て正義光明平和の風蕩然として地を掃ひし社會に出で來れり、而して余は此事實を解釋して、社會が偶然彼等の出顯を見しにあらずして社會夫自身が其社會に相當する人傑を作りしものなりと信ず。

二、家庭。偉人豪傑の傳記を繙きて吾人は、彼等が其家庭に負ふ所多大なりしを見る、キリストは如何なる家庭に人となりしゝ母マリアは神の子として彼を養育しヨセフはキリストの命を全からしめんとて埃太に赴きぬ、夜に乘じて彼は故鄕を逃れ出でぬ、思ひ見よ今日唯一兒のために已か家財住馴れし地を見捨て能ふもの幾人あるやを、然も劍を以つて迫り來りたらばいざ知らず唯ヨセフは夢に於てキリストの殺害せられん事を見て其夜直ちに旅裝して出で行きしにあらずや、嗚呼誰か其の愛の切なるを思はざるものぞ、彼キリストは十二才にしてエルサレムの宮に行きて祭司を驚かせしにあらずや、然り天資賢明なりしは論ずるの要なきも祭司の問に向つて答ふる其大体の素養に到りては母マリアに負ふ所實に少小にあらざりしなり、麻耶か失せし後淨飯は釋迦か爲に如何に心を碎きしぞ、徵氏は何故に其住家を轉せしぞ、フランクリンは母より何を得しぞ、言ふ勿れ彼等は失ふべき遺產を受けざりき、彼等は嫌ふべき惡むべき忌まわしき邪曲の聲は聞く事を得ざりき、苟家庭に於ての不和の如きは彼等の夢想だに出來ざる所なりき、

上述の家庭論を要するに彼等偉人の顯はれし社會の腐敗糜爛せるに反して其家庭は實に淸く美はしく穩かなるものにてありたるを知る、

三、指導者。古來大人物と稱せらるゝ何人を見るも彼等を敎へ彼等を導く指導者なきはあらざりき。釋迦は苦行林の五比丘を師としキリストはモーゼが文なる神の聲卽神を師としたり、然かも彼等の理想を畫き之に忠實に直行するには驚くほど熱心なりき。釋迦か十九歲にして老病死より深く人間問題に疑惑を懷くや彼は五年余の苦行難行を厭はざりき、而して彼五比丘に從ふや專精彼等か勤行に習ひぬ。更にキリストを見よ彼かエルサレムの宮に止まりて祭司と問答し父母彼を尋ねて宮に到り大に配慮せし事を告ぐるや彼答て曰く「何故われを尋るや我は我父の事を務べきを知ざる乎」(路二、四九)と彼は十二歲にして既に父の事を務むるに萬事を忘れたるなりき。

夫れ、指導者は彼の理想より定めらるべくキリストに近よらんも釋迦たらんも孔子たらんも、要は吾人の自由にあるなり、眞面目なる兄等よ兄等既に偉人豪傑の數多の事跡に詳なるべけれバ余輩の拙なる筆を以つて長々しく記す必要なかるべし、唯、彼等か如何なる理想を懷きたるゝ、如何

に理想と忠實なりしかを心せられん事を望む。

要するに腐敗せる社會にありて清き家庭に育ち大なる理想を懷き專心其の理想に忠實なる者は常に人傑として顯はれ居るを知る。

三

余は己に社會家庭指導者の人間に於ける關係を論せり、更に例を擧げて其關係影響作用等を論ぜんとす。米種か繁熟せんに苗代田野農夫を要するか如く、人間か發達し向上せんには又家庭社會指導者を要す、余は今此の兩者を相比較せんに米種を幼兒とし苗代を家庭とし社會を田野となさんとす、夫先天的米種に多少の優劣あるは恰も人間か先天的に優劣あるに異ならず、然れども如何と其の米種は優りたらんも之を培養する苗代不良ならんには到底完全なる成長をなし能はざるか如く、人間に於ても家庭は實に之に類す、之に反して多少其種は劣れるも良き苗代に蒔かれたるものか種優りて惡しき苗代に落ちたるよりも、猶より多く成長するは事實なるべし、而して苗代に於て如何に美はしく生ひ立ちしものと雖之を植ゑる田野宜しきを得ず砂上芝生たらんにも到底收獲を見る能はざるか如く、如何に人は家庭に於て圓滿に育ちしものと雖、社會に肥料なき時は遂に充分の果を結ぶを得ざるべし、而して苗代田野良しきを得るとも此を耕作する農夫良しきを得ざる時は亦多くの收獲を得能はざるか如く、人も種良く家庭よく猶社會は如何に多量の肥料を有すと雖、其指導者宜しきを得さる時は同樣に滿足なる成功なきのみあらず、却つて多量の肥料のため腐敗の境に陷るに到るべし。

余は單純なる事柄をくど〳〵しく書き立てたり、最早此上に多く諸兄を煩はさざるべし、之を要するに余は米種苗代よりも田野を重ト田野よりも更に農夫を尊ふ、然り而して此の三者は常に相關連して離つべからざるを知る。

四

余は前提の如きものを長々しく書き連らねたるか、今や飜つて本論に入り我國現時の青年の境遇を論ぜ更に進みて決意を促さんとす、而して現時の青年の境遇を知らんが爲め社會家庭指導者に就て觀察せむとす。

一、社會。我國現時の社會は如何と云はば誰か之を斷するに苦しまむ、曰く腐敗糜亂敗德墮落等所有醜文字は此社會の常に冠せらるる所のものなり。某博士は公會に於て「我國の社會は眞に社會を形成し居るや否や」と語れりと聞く、余は此社會の眞に社會を形成し居るや否やは知らざれども事實は事實として認めざるべからず、然り事實に於て社會は腐敗せり、如何程迄に腐敗せるか、然り現時に於て人道は宗教家と教育家とに限り適用せられて、其他は道德の如何人道の如何を問はざる如きまでに腐敗せり、而して此社會は吾人を圍繞し吾人は此間に成長せざるべからざるなり。余は此狀態を目擊して嗚呼過去幾多の人傑か顯はれし社會もかくありしかと聯想せざる事なし、又思ふ社會の腐敗と偉人と、世の亂れと英雄とは正比例するにあらずやと、若し然らば現時我邦青年は果して不幸なるか將幸福なるか。

二、家庭。我國家庭につきても有識ある士は之を結論するに苦しまざるべし、即ち我家庭には崇

高なる精神と偉大なる抱負とあるあし、唯清き家庭にありても義理と正直との外には出でざるなり、然れどもこれ甚だしく尤むべきにあらず何とあれば我國民れ祖先には義理と正直との外更に高き所を知らざりしが故なり、故に我家庭を一言にして云へは義理者正直者を作りて、決して偉大なる人傑を作る所にあらざるなり、是れ二千五百年の歴史に摸範的人傑あらざるにて知るべし。然れども上述の如きは我家庭の美なる方面の唯一面の觀察あり、飜つて廣く現時家庭の全部を見よ、吾人は此の苗代より何の良き苗をも豫望せざるの已むを得ざるを悲しむ、故に余は重ねて云はむ我國家庭は偉大なる崇高なる人傑を作るの苗代にあらずと、吾人青年は此苗代に育ちつゝあり吾人も亦義理正直者にて終らざるべからざるか。

三、指導者。余は我國青年の境遇の主部分なる社會と家庭とに就て極て異論せり、此觀察よりして薄弱なる意志の青年の運命を見た時は實に不幸と云はざるべからず、何となれは家庭は亂れ社會は腐敗せり彼は何處に寄り何の助にて身を全ふするを待るか、若し夫れ良農來りて彼等を指導し彼等を守るにあらざれば奈落の底に沈溺するは火を見るより明かあり、故に我國青年に最も欠けたる物は外國語の不熟にあらず智識の不足にあらずして彼等を保護し彼等を指導する良農あり偉人なり人傑なり、然るに彼等か指導者を求むるに於ても亦大なる不幸にあるなり、昨日迄良師よ善敎師よと慕ひし人は今日は獄裡の人となり、昨年まで君子よ摸すべき先輩よと仰きし人は聞けば敗德不倫の人なりとの、此に於て燃るが如き青年の熱血、向上の偉大ある精神は大打擊を蒙り血は冷へ大抱負は消沈し、覺つて曰く長き夢なりき人は如斯もの世も如此ものと、是れ近きに指導者を求め、低きに良農を尋ねたるの例あり、然れども是責むるに足らざるなり何となれば彼は家庭にて高き處を敎へられさりしかためなり、何人よりも偉大なる人傑を紹介されさりしか故のみ。

然れども大事業を成さんとするものは大指導者を要す、吾人特更近くに之を求めて欺かるゝの要なし目を上けて見よ心を開きて視よ、吾人を導き吾人を守り吾人に力を與ふる大指導者あるを氣附かさるか、彼を指導者とするは實に易々たる事にして彼は吾人を欺かさるなり昨日と今日とにて變化あるなく一生を通ドて變化あるあし、而して此の大指導者は實在し常に吾人の身邊にありて指導す、而して彼は人間の摸範、大事業者の上の大事業者、大理想家の上の大理想家、彼を師として倦むことなく彼に仕へて厭ふ所なく彼に導かれて誤ることなし、實に現今青年の指導者は彼の他にあらさるなり、大野心家よ大事業者よ兄等か師は唯彼あるのみ、「求めよ然らば與へられ叩けよさらば開かれん」。

前述せし如き我國青年の境遇は如何なる事を意味せられつゝあるか、余は信ず現今青年の境遇は薄弱なるものには極惡の魔窟にして大志大望ある青年には此上なき良戰場なるべしと。唯余が遺憾に堪へざる所は吾人か苗代に於て完全なる發達をなし得さりし事なり、然れども憂ふる勿れ、田野は此不完全を補ふだけの肥料を有し且つ此の沃野に出でゝ用意周到到らざる所なく守り養ふ良農あるにあらずや、唯此間に於て分るゝ所は青年の意志のみ抱負のみ。

知らずや讀者は已に偉人豪傑の境遇を見たり、彼等は遇然の出產物にあらずして激戰奮鬪の結果なる事をも知れり、而して其戰場に勝ちしものは成功し敗れしものは墮落する事をも見たり、且又眞に國家を愛し社會を思ふの士は進むで國家社會の需要に當らざるべからず、國家社會の需要欠乏物は人傑なり、人傑は國を憂へ人を愛するの士の坐すべきの席なり、然も此名譽あるの大席は空位にして此の位の下にあるの社會は人の來りて其位に即のれん事を待ちつゝあり。

社會の意味を解したる青年よ、今や余は身を顧ずして諸兄に決意を促さんとす。夫れ昨日まで醜惡糜亂なりと見たるの社會は今は此上なき良野となりたり、昨日まで氣附ざりし家庭の最大缺乏は今は吾人を奮起せしむるの良藥となりたり、吾は吾にて起らざるべからざるやと明らめし吾人は完全なる大指導者ある事を知れり、加ふるに吾人は人類向上のため奮進國家社會に盡さんは常に願ふ所たるも明なり。然るに世の青年中此最大名譽なる空位に上らんとせずして見惡しき迄に醜態を演して小なる名譽を得んとするを見る、壯語するにもあらで眞に歎ずへきにあらずや、然れども大野心家よ、大事業家よ、起てよ、起ちて奮鬪せよ、兄等の目指せる席は爵位ある椅子にあらずして社會の無上の名譽席なり且最大成功の道なり、需要に於ても名譽に於ても成功に於ても最大上位ある此の空座は大勇あり大望ある兄等を待つて外なきなり。

思へば五十年の人生夢にあらず空にあらず端座默想にあらず深山幽谷の眞如の月見にあらず、まして俗說の浮世にはあらざるなり、實に此の五十年は奮戰なり實在なり向上なり、醒めよ起てよ、吾人は最早無意識に此の人生を過す能はず、起ちて進まん社會の最大空位に向つて、是れ人生絕大の事業絕大の快樂ならずや。

而して思を靜め頭を回せば諸侯を說き陳蔡の野に餓死せんとするをも厭はずして孔子は成功せり、金殿玉樓榮華逸樂の身を素衣跣足にし八十年を遊化度生に尽して釋迦は業を成せり、更に基督に到りては血を十字架に流すの悲慘を厭はざりき、如此は大勇大志大望ある者の銘して忘る可からざる所なり。

友も汝自らの中にありと知れ
敵も汝自らの中にありと知れ
（ギーター六の五）

雜錄

聖アウグスチヌス

森內政昌

肉と靈とにより成れる不思議なる生物は人間である、肉あるが故に、渠れは煩惱の苦む所となり、業欲の驅る所となりて。永くサムサラの苦界に輾轉呻吟するを免れない、然れとも亦渠れは靈を有するのである、靈あるが故に渠れは又よくかゝる煩惱の桎梏を離脫し、天上の光明界に再生し、永生の悅樂を享有し得るのである、換言すれば人間は肉につくと同時に靈につけるものである、魔の子であると同時に神の子である、若し人間にして全く魔の子たるものとせは、渠れは所謂本能の滿足を恣にし、疚しきなく悔ゆるなく、從つて苦惱もなく煩悶もなく、渠れの生涯は牛馬豚犬のそれと更に擇ぶ所がない、又全く神の子なりとすれば、既に理想の生活に達せるものにして、理想に對する希求を有せず、光明に對する憧憬を有せず、從つて苦鬪たり鼓力ある眞面目なる人生の生活は同じく失はるゝであらふ、然るに人間は神の子にして而かも魔の子である、肉につけると同時に靈につけるものである、燃もるが如き欲情は、渠れを驅りて墜落の深淵に導くのであるが、而かもかゝる欲情の羈絆を斷じて、平安と光明とを希求するの苦提心も亦渠れの中心に燃へつゝあるのである、是に於て乎心の中に爭鬪は起り苦悶は生ずる、這般の心的爭鬪は幾多の偉人の經歷せる所のものであつて、その爭鬪の激烈の度如何は、正にその人の心の中に存在する前の二要素の孑循の度如何に比例する、一方に激しき欲情を有しなから而かもその煩惱を斷せんとあせる人は、常に苦しき心の爭鬪を經驗せねばならぬ、或はかゝる心的爭鬪は、その人の一生涯繼續し而かも解脫の域に達し能はざる、憐れむべき人もある、咀はれたる人とは、蓋しかゝる人を謂ふのであらふ、ショウペンハウエルの如きは正にかゝる咀はれたる人の一人である、渠れ嘗つてランセィの像を見、長大息して『これ恩寵の然らしむる所、又如何ともするなし』(Ach! Das ist die Sache der Gnade!) と叫んだと傳へらる、卽ちショウペンハウエルの如何に自己の解脫の不可能を怨めしく思ふたかは、之を想像するに餘りがあるのである、ルウッウも亦常に此種の苦惱を經驗した、渠れが永久の平安と光明とを攫得することを得なかつたことは、ショウペンハウエルと同一軌である、たゞ渠れの得たる平安は時々刻々の平安であつて、渠れの得たる光明は瞬時々々の光明であつて、暫時は天樂の妙音にその靈を浴せしむるを得しといへども、又間もなく惡魔の爲めに奪はれ去つたのである、夫故に『かゝる瞬間の永久に繼續するを予は希ふ』(Je voudrais que cet instant durât toujours) とは、常に渠れの發せし嘆聲であつた、リヒヤルド、ワグ子ルでも、トルストイでも、イブセンでも、共にかゝる心的歷史を經過した人である、今かゝる心的爭鬪の苦悶を經過し、而かもその人の一生涯に於て、彼岸の光明に到達し、心の平安を得た偉人その人ありとせば、かゝる人の一生涯の歷史は如何に有益なる敎訓を吾人に與ふるであらふか、蓋し測り知るべからずである、而してゝ種類の人間の最も偉大なるものゝ一人は、蓋しアウグ

スチヌスその人である、

アウグスチヌスの一生の歷史は渠自からの著『懺悔錄』(Confessiones)に詳かである、此懺悔錄には、渠れの變化多かりし一生涯の中に、如何ゟ神に對する希求が常に渠れの意識の中心であつたか、如何に渠れは心の平安は神の中に見出され得べきを確信するに至りしかゞ叙述せられて居る、換言すれは懺悔錄の卷頭第一に記るされたる『汝は汝のものとして我曹を造り、我曹の心は汝の中に息ふまでは平安ならず』(Tu nos fecisti ad te, cor nostrum inquietum est, donec requiescat in te)ある精神は、渠の懺悔錄の骨子であり眼目たる所の精神である、

中世紀の中特にその四五世紀の頃にありて、舊羅馬敎國の三偉傑と稱せられたるものは、アンブロウジウス、ヒエロニウムス並にアウグスチヌスの三人である、此三人は各自その特長とする所のものを異にして居る、『アンブロウジウスは性格、ヒエロニユウムスは材能、アウグスチヌスは天才』なりとは、三人の特長を概括せる適評である、まことアンブロウジウスはアウグスチヌスの師表であり、偉大の感化をアウグスチヌスの上に與へたる人であるが、その性質は全くアウグスチヌスと正反對である、アンブロウジウスの性格は、ペテロのそれと等しく、生れながらにして節度ある感情と着實なる意志とを有せし人物である、アウグスチヌスは之に反して、ヨハネ若しくはパロウに比すべき人物であつて、云はゞ過激なる人物である、情の趨く所滔として抑制すべからざる素質を有せる人物である、惡しくなれゞ極惡人にもなり得まトき人物である、アンブロジウスは生れながらの聖人であるけれども、アウグスチヌスは寧ろ惡魔として生れたのである、たゞ渠の有する胸中の光明は遂によく此生得せる魔の分子に打勝ちて、聖人の域に達したのである、或人はアウグスチヌスの激越なるアラビア的の感情的性質は、アフリカの熱帶地下に生れたのである、アフリカの炎熱は渠の性質をして、しゐく激越ならしめたるは、猶マホメットの多血的性質のアラビアの風土に負ふ所あると同一なりと論するものがある、たしかに渠のその生地タガステに於ける一般青年の激烈なる性質を記述して、羅馬の青年と異なれることを記述せるを見ると、多少風土が偉大の影響を渠の性質の上に及ほせしを判定し得るのである、渠の父は如何なる人なりしか、懺悔錄には渠の父はタガステの富裕ならさる一市民で、異敎徒で、たゞその子を世間的浮世的の學者となさんが爲めに敎育を重んじ、アウグスチヌスの未だ青年たりし時に死亡したといふ簡單なる事實れ外は分つて居ない、寧ろアウグスチヌスの一生の歷史の上に大勢力のあつたのも、それ母モニカである、母モニカは熱心なる基督敎徒で、信心で、敬虔で、寧ろ婦人の常として、迷信的に敎會を難有がつたといふ風であつたけれども、常にその子の將來を氣配ひ、その子の邪道の衢に彷徨せるを嘆き、如何にもしてその子をして神に歸依せしめ、正しき生活を送らしめんことを希ふの情は、實に切實なものがあつたのである、アウグスチヌスにして此母なかりせば、渠は終にサタンの捕虜となり、魔界の奴隸となり了りしや、未だ測り知るべからずである、渠の青年時代は凡ての放蕩逸樂の歷史である、小兒時代に遊戲のみに耽りて課業を勉めず、爲めに敎師の鞭韃を受けたる渠は、その青年時代にありては、婦人を愛し、窃盗を行ひ、放蕩に淫樂にその日を送つたのである、渠は幾度その母を泣かしめたか、渠は實に不孝の子である、

渠の前半生は罪惡の化身といつてよいのである、渠は實に肉慾の强盛なる人であつた、渠のイタリヤにありて、マイランドにありて、神の道を求めつゝありし其當時にありてさへ、渠は私しの妻を有し私しの子を生んだのである、渠は自己の友人にして且つ弟子たるアリユウビウスに、自己の獨身的生活の到底不可能なることを自白したのである、渠は實に惡魔の子である、アーリマンの率ゐるあらゆる罪惡は渠の一身に之を有して居つたのである、而かも渠は救はれたのである、渠は聖と呼ばるゝまでに再生の實を擧げ得たのである、基督の所謂新しき人として生れたのである、

何故にかゝる人間が救はるゝを得たのであるか、魔の府の捕虜たりし渠は如何にして神の府の人たるを得るに至つたのであるか、渠の一生の或時期に突如として現はれたる超絶的變化(Transcendentale Ver., ändering)とでもいふべきものであるか、之を哲學的に解釋すれば、即ち超絶的變化に外ならないのであるが、アウグスチヌスの主觀的立脚地よりいへば、神の外來的恩寵によりて然るを得たのである、神は自から發動的に、渠を苦しみの中より救ひ出したのである、然れどもかゝる救ひは決して外から來るのではない、渠れは一方にありては肉の奴隸であつたけれども、他の一方にありては、常に神の聲をその胸裏深き處に聽きつゝあつたのである、この神の聲は渠の罪惡を行ひつゝある當時にありても、常に渠を警戒しつゝあつたのである、此神の聲は次第に强くなり、漸次に大きくなり來つたのである、渠の中に住める神の子は、渠れの中に住める魔の子に打勝つたのである、たゞ渠は余り多くの弱点を有し、余り多くの罪惡を有したりしが故に、人間は弱きものなり、罪惡に陷り易いものなりとは渠の主觀的判斷である、然れども此主觀的判斷はアウグスチヌスに取りては眞理である、牢として拔くべからざる信念を伴へる眞理である、此眞理の上に渠の宗教的哲學は建設せられたのである、

人間は弱きものなり、罪惡の子なり、アダムの墜落以來人の子は遺傳の罪を有す、如何に完全な人間といへども、既に人間たる以上は弱からざるものはなく、罪なきものはなし、かゝる弱き人間罪ある人間は、到底自己の力をもつて解脫するを得るものでない、自己の力にて善をなし得る力を有して居るものではない、このゝる人間の救はるゝは全く神の力によるのである、人間は凡べて自己は救はる資格を有するものなりとさへ考ふることが出來ない、蓋し人間は罪深く弱点の多きものにしてよし、救はれざるとも不平を唱ふべき些少の理由だに之を有しないのである、夫故に誰は救はれ誰は救はれずとも限れるものでない、同じく罪深くして救ひに對して些の權利だに有せざる人間を救ふは、神の任意である、此神の任意を呼んで恩寵(Gnade)といふ、此神の恩寵は任意に人間を救ふが故に、人間の側より之を見ればその救はるゝと救はれざるとは、自己の力にて如何ともすべき限りでない、即ちその救はるゝと救はれざるとは運命である、既に定まれる事である、之を既定(Oredestinatio)といふ、かくアウグスチヌスの神學は全く渠の一生の歷史を觀察し、渠れの生活に同情を有する人にして始めて解釋をなし、又妙味を感得し得るのである、

アウグスチヌスは紀元三五三年十一月十三日を以てヌミディア州タガステ市に生れた、父をパトリチウス母をモニカといふ、父は異教徒であつて餘り感心した人でなかつた樣である、然しなが

ら母モニカは偉人の母たるに恥ぢない賢婦人であつたらしい、凡べて偉人は善き父よりも善き母の系統をひくものである、孟子の母、ゲイテの母、ショウペンハウエルの母、凡べて婦人としては奇才といはねばならぬ、アウグスチヌスの母モニカは實に道德的宗教的に完全なる母である、その神に對する敬、その子に對する愛、多くその例を見さる程である、アウグスチヌスの懺悔錄が如何に愛を以て母の事績を記述せるかを見れは、その母子の間に暖かき感情の存在せることを窺ひ知ることが出來る、アウグスチヌスは始め兩親の膝下に教育せられ、後その地の學校に入學した、然れども課業よりも遊戯を愛し、希臘の古典よりも、讀み易き羅典の文學殊にヴィルギリウスを愛讀した、渠の十六歳の時父を亡ひ、自からカルタアゴに趣き、論理、數學、幾何學、音樂、能辯術等を學び、又好んでアリストテレイスの著書を渉獵した、當時は卽ちアウグスチヌスの少壯血氣の時代であつて、渠れの放蕩時期は卽ち此時代の事である、渠れは既に十八歳にして私の妻を聚り一子を擧ぐるに至つた、アデロダアッスなるものは卽ち此私生兒である、渠當時を追懷して「愛の淸き分子と淫樂の暗黑とを分つことは予れに不可能の事なりき、此二つは相混して予の中に動亂し、予を驅りて欲望の淵、罪惡の沼に陷らしめき」云々と嘆じて居る、母モニカは大に之を憂ひ、某僧正を訪ひて、その子の監督を依賴せんとせしに、その僧正應へて「かゝる涙ある子は罪の中に失はるゝことなし」といふた、まことにアウグスチヌスは當時肉の奴隷たりしといへども、確かに渠れは既に一種の光明をその胸中に有したりき、此光明は卽ち渠の有する靈の分子にして、此靈の分子は實にアウグスチヌスをして遂に彼岸の目的に達せしめたるもの、普通の放蕩兒と日を同じうして論ずべからざるもの既に之ありしや明かである、僧正の「涙ある子は罪の中に失はるゝことなし」とは、蓋しアウグスチヌスの一生を說明して余りある語である、

（未完）

歷史的諺

浦井恒堂

Le Empire C'est la paix（佛）帝國は平和なりの意にしてナポレオン三世の言なり初め佛國に於て第二次帝政の興らむとする模樣あるや歐洲諸國は彼がナポレオン一世の遺業を紹ぎ兵を起し武を揚げむとして西歐の平和を攪亂するに至らむことを憂ふナポレオンを悟り諸國の疑心を散せむことを圖り一八五二年ボルドー府に於て開かれたる夜會に於て一場の演說をなして曰く人々は我等に反對の精神を以て「帝國は戰爭なり」といふ予は斷言す「帝國は平和なり」と然り實に其は平和なり蓋し佛蘭西は平和を望み佛蘭西之を得れは世界は靜謐なるべし（中略）吾人は開拓すべき數多の荒蕪の地開通す可き數多の道路及ひ築くべき多くの港灣を有す其他河流の浚渫溝渠の開鑿鐵道の布設等數多焦眉の事業を有す吾人は西部の諸港と米國大陸との間に於ける交通をして今一層迅速ならしめざるべからす最後に吾人は到る所に於て再興せざるへからざる廢趾打破せざるべからざる僞神及ひ勝利を得しめざるべからざる眞理を有すもし帝國が再興せらるべき者ならば以上は予が心中に期する所の帝政なり予が竊に考ふる所の征服にして予の身邊を圍繞する諸君は是れ卽

ち予か所謂征服の任に膺たる所の兵士ありと列國ナポレオンの此宣言を聞き始めて心を安せり然るに實際第二次帝政の興りし後に於てナポレオンの行爲は此宣言の實行を力めずクリム戰役を始めとして以太利戰役メキシコ遠征普佛戰役を惹起し帝政は平和にあらずして戰爭なりき因りて此諺は一向信用の價値無き宣言をいふ例へは露國得意の政策はラムピール、セラベーを巧に用ふるにありといふが如し

Le État c'est moi (佛)朕則國家也　是は一六五五年佛國路易十四世が遊獵に出てし際巴理高等法院(パールマン)に立ち寄り野服のまゝにて議場に闖入し鞭を以て議長席を叩き立てゝ發せし語なりといへりされど當時の實錄一も此事を記す者無きに依り恐らくは何人か後世好事者の揑造說なるべしと信ぜらる其はともあれ此語は極めて簡約なれど路易の獨裁政治の有樣を巧に描出せる者あるを以て人口に膾炙するに至れり

Le roi règne mais il ne gouverne pas (佛)王は統治すれども政務を視ずの意　佛王查理十世溫和主義の路易十八世の後を承けて帝王權神授主義(ヂバイン、ライト、オフ、キングス)を固執し國民を擧げて反動主義加特力主義の權化を認めたるポリニヤック(Polignac)を主相と爲し盛に民論を壓服せしかば議會の反抗愈よ激しく國民怨嗟の聲日に高し民權黨の領袖チエール(Thiers)慨然として「ル、ナショナル」新聞を發行し大に政府を攻擊せしが一八三〇年七月發行の同新聞第一號に於て劈頭第一に立憲國君主の本分を論じ此言を爲せり簡潔に立憲國君主の權能を說き盡したる箴言として著名なり

Le pavillon couvre la merchandise (佛)　國旗は積荷を保護すの意　英國は七年戰役(一七五六―一七六三)に於て盛に私船免狀を發し英國商船をして敵國の船舶はいふに及はず中立國の船と雖も敵國の物品搭載の嫌疑あるを名として之を攻擊捕拿せしめ海上に於ける跳梁言語に絕せり英人は之を名けて一七五六年の法則(Rule of 1576)といひ爾後大陸諸國と事ある毎に此法を行ひ諸國れ商業に大損害を蒙らしめきされば歐洲諸國は憤恚に堪へされとも彼等の海軍力は英國に敵する能はざるを以て起て之を責むる者莫―一七七五年北米合衆國獨立戰役に方り英國は復た一七五六年の法則を厲行し國際法を無視して盛に中立諸國の船舶を拿捕す露女帝カタリナ二世震怒し歐州聯合を組織して海上に於ける英國の暴行を禁遏せむことを圖り一七八〇年二月公文を發し戰時に於ける海上法を定めて曰く封港は實効的ならざるべからず中央國の船船は自由航行の權を有し交戰國の港灣にも出入することを得べし交戰國の所有に屬する戰時禁制品を除くの他中立國船舶の搭載する物品は決して拿捕すべからずと英國は此法を遵奉することを峻拒せしかばカタリナは丁抹瑞典(一七八〇年)墺國普國(一七八二年)葡萄牙(一七八三年)と合縱し英國と爭へり此同盟を名けて海上武裝中立同盟(Armed Neutrality League)といふ此同盟の標識とせるは國旗は積荷を保護すといふ(The flags covers the merchandise)標題に揭げたる語なりされ時としては Neutral flag, neutral

cargo（獨 Frei Schiff, frei Gut）ともいふ蓋し此時を以て戰時に於ける海上國際法問題の嚆矢と爲す合衆國獨立戰役の終局と共に此問題も亦た中止となりしが佛國大革命れ亂に際して英國は復たも一七五六年の法則を厲行し始めければ各國の憤怒を惹起し露帝パウロ一世は乃祖カタリナの興せる一七八〇年の海上武裝中立同盟を再興し瑞典丁抹國と訂盟せり名けて北方會盟（Northern Convention）といふ之に對して英國の主張は（一）中立國の船に搭載する敵國の商品を沒收するの權あること（二）實効的ならざる封鎖港間を航行する船舶を拿捕すること（三）鐵大麻穀類材木瀝青を戰時禁制品と爲すこと（四）中立國の船舶は搜索權を拒むことを得ざること等なりしか同盟は絕對に之を否認しき爾後此問題は荏苒決する所無かりしが一八五六年クリム役の後所謂パリ宣言に於て海上國際法規を定め私船を禁止し敵國船の積み居る中立國の物品は中立と定まりたゝ敵國の船か積み居る敵國の物品のみ捕拿することを得ることとなれり二十七八年戰役に際し我邦かパリ同盟に加盟し居らざるを以て私船を發せむとの議ありしかども文明國の體面を守りて實行せられざりしは諸子の知る所あらむ

Le Soleil d' Austerlitz（The Sun of Austerlitz）アウステルリッツの戰は一八〇五年十二月二日に起れる大激戰にして佛帝ナポレオン一世は六萬の兵を以て墺帝フランシス一世露帝アレキサンドル一世の帥ゐたる聯合軍八萬を擊破し大捷を得たり一名を三帝合戰といふ其結果墺國は和を請ひ露兵は國に引き還れり傳へ云ふ此日拂曉太陽の光耀例に無く照りまさりければアウステリッツの太陽といふ語は佛國軍隊中の流行語となり幸福の前兆の意に用ゐらるゝに至れり

Lucas a non lucendo（拉）其意は opposite にして羅馬の文典學者クインチリアヌスより出たり氏曰くある語は全然反對の意味ある語源を有す例へば lucus（森）といふ語の如し此は動詞 lucere（shine）より來たれり蓋し森林は日光を陰蔽して暗きがため non lucere（not shine）より轉ぜしなりと因て標題の語は反對の意の諺となれり英語の black も亦た lucas a non lucendo の一例にして此語の語源はアングロサクソン語の blaecen（白色に塗る）なりといふ又獨佛戰役（一八七〇年—一八七一年）に於て最初は佛軍の作戰計畫攻勢を取り獨國に侵入するにありしを以て國境に駐屯せる軍隊を呼びて萊因軍といへり而して此軍ライン地方を占領すること能はざりしかば獨人は之を嘲笑して Lucas a non lucendo Army といひき

Lucullic Luxury（英）Lucullischer Luxus（獨）山海の珍味を具へたる饗宴（exiquitely fine feast）ルクルスは羅馬の名將なり第三次ミトラダテス役（紀元前七四年—六三年）に於て總督となりて亞細亞に進發しミトラダテスの本國ポントスを占領しミトラダテスが奔りて其女婿アルメニア國王チゲラ子スに倚るや進みてアルメニアと交戰を始め深く內地に進入し寡兵を以て敵の大軍をテグラノケルタに敗り猶進みて國都アルタクサタに迫らむとす然るにルクルスの節度嚴肅兵士の掠奪を許さゝりしかば當時掠奪を唯一の目的として從軍せる兵士は悅ばずしてルクルスに背きしのば

ルクルス止むことを得すして退却しミトラダテスは勢力を輓回し捲土重來ポントスを克服せり而して羅馬に於ては豫てより貴族黨の領袖なるルクルスを陷擠せむことを欲せる平民黨は屈强の口實を得たりとしルクルスか私慾と權力とを欲するがため徒らに戰爭を遷延し東方諸國は殆んど全くポントス王の征服する所となれりと唱へけり議政官竟に動きルクルスを招還しポンペイウスを以て之に代ふ如此ルクルスは多年奮戰苦鬪今や將に其功業を全うせむとせる際に當りて日常敵視せるポンペイウスの功名心の犧牲に供せられ遺憾遺る方無く悒々として羅馬に歸り爾後一切の世事を放擲して復た顧みす多年蓄積せし資產を投して莊麗なる邸宅を築き天下の數奇贅澤を盡して閑かに餘生を送り六十八歳の壽を以て卒せり彼の贅澤は當時れ人目を聳動せしが彼は決して劣等なる快樂に耽りしと無く美術品の蒐集文學哲理の研究を樂み常に學者を其家に會して議論を上下し彼の所有せる貴重なる文庫を開放して公衆の閲覽を許せり彼の本邸の室は羅馬の神祇の名を以て之に命し一日キケロポンペイウスの兩人相携へて突然訪問しける時ルクルスは直に之をアポロ室に延き善美を窮極せる宴を張り兩雄をして呆然たらしきといふ彼いある時一食に二萬金を費したることあり又ある時極めて善美なる晩餐を準備すべきことを命ずれは侍者異みて何人を招待するかを訊ねしにルクルスは大笑して Lucullus sup to-night with Lucullus といひきとぞ

Maecenas　メーケナスは羅馬のアウグスッス帝帷幄の臣にしてアウグスッスが古今無比の帝政を組織し十二世紀に亘りて帝業を掬むるを得たるはメーケナスの立法的技量に負ふ所多大なりしなりまたアウグスッスの御宇をして羅馬文藝の黃金時代たらしめたるも主としてメーケナスの力とす因りてメーケナスは文藝保護者の意となれり獨逸のサクゼンワイマール公カロロアウグストを Modern Maecenas といふ如し

Macchiavellistic Policy　マキアベリはッッソ及びアリオストと双びて近世初期に於ける以太利三大文豪の一人なりフィーレンチエの門閥家なれども家道豊ならず一時はメヂチ家の顚覆に際しフィーレンチエ共和國の國務委員に擧けられしが一五一二メヂチ家の復興と共に職を罷められたるのみならず陰謀の嫌疑に座して禁錮の刑に處せられ後釋されて出獄せしが爾後心を政事に斷ち專心文學歷史れ研究を事とせり彼の著にフィレンチエ史あり甚だ緊要なる史料なれども彼の名の不朽に傳りたるは却て一小編君主論（The Prince）のためなりとす是は彼が領主ロレンツオ、ド、メヂチに奉れる意見書にして以太利の統一を以て焦眉の急務と爲し其大目的を達せむが爲めには手段の如何を論するに遑あらず權謀術數も可刺客を用ふるも可なり以太利の病既に膏肓に入る宜しく外科的治療法を以て以太利の統一を行ふべきことを論ぜり因りて極めて陰險なる政策を名けてマキアベリ流の政策といふ

March backward（背進）　一八五九年墺國と佛國サルヂニア同盟との以太利戰役に於て墺軍の總督元帥 Gyulai 十萬の兵を以て北以太利に入りチチノ河を渡りて進みたれども此人元來將帥の器に

あらず荏苒攻擊の好機を逸しサルヂニア兵とナポレオン三世との聯絡を防止する能はず敵勢大に振ひしかばジューライは命を發し我軍は今よりチチノ河に向ひ背進すといへり是時より背進の語は軍隊に於て賞用せらるゝに至れりといふ

Money, money, money　フランス王ルイス十二世(一四九八―一八一五)は夙に以太利に對して野望を懷きしが王の先はビスコンチ家に出て北以太利のミラノ公國を領有し後スフォルツア家の爲めに國を奪はれたるを以て王は其を理由としてミラノを討たむことを圖り元帥 Trivulzio に問て曰くミラノを征服するが爲めには如何ほどの準備を必要となすやとトリブルチヨ答へて曰くミラノ征服のため要する者三あり第一に金第二に金第三に金なりと

Morton's Fork (兩天秤)　英王ヘンリ七世(一四八五―一五〇九)はスチュアート朝の祖なり性頗る貪婪宮廷驕奢の用に供せむがため金を得むことを欲しゝがマグナカルタの保障ありて英王は議會の決議に因るにあらざれは規定外の政費を得る能はざるを以て王は種々の姦策を運らして金を得むとし或は既に人の記憶に存せざる古き法律に違犯せる者を搜索して科料を賦課し或は不知々々して王室料地を使用し居る者を檢舉して數十年間の使用料を拂はしめ或は外交急迫を口實とし議會をして非常準備金を議決せしめ然る後巧に外交談判に因りて處決し了りたりと稱して其金を使用せり殊に有名なるは Benevolences と名けたる一種の献金にして貧民の賑恤を名として義捐を促し王の私用に供せり主相君牧師(カーヂナル)モルトンは最も巧に献金を慫慂し富豪に說きて曰く君等の如き富者は博愛仁恕の主意に因りて巨額の義捐を爲さざるべからずと又節儉の者に說きて曰く君等の如き節儉家は此際奮うて出金せざる可らずと說き方こゝ違へモルトンに遭うては逃るに途なかりしかば時人之をモルトンフォークといへりフォークは道路の分岐點なり

Midas　は小亞細亞フリギア國の神話的國王なり性極めて貪慾なりしかば一日バックス神が其畢生の願望を問ひしに彼の手の觸るゝ者盡く黃金に變すべき神力を得んことを望めりバックス神は笑うて翌朝より其力を附與すべきことを約しければミダスは歡極まりて徹宵眠らず曉を待ち起き出でしに其衣服の黃金に變したるを始として手の觸るゝ者皆燦然たる黃金と爲りけり然るに朝餐の席に就き茶を喫せむとすれば直に黃金となりパンも菓も物として黃金に變せざるは莫かりしかばミダスハ茫然自失するのみ王に愛孃あり父王の顏色蒼然たるを異み故を問ふ王悲哀言ふ能はす手を延ばして愛孃を撫すれは是亦た一の黃金佛となれり時にバックス神はミダスの慟哭の聲を聞きて現はれしかば王は深く愧ぢ曩日の願望を取消しバックス神より賜はりたる神力の解除を請ひ其教に因りパクトロス河の水を以て黃金化せる物品に濺き昔舊態に復することを得たり此說話に基きミダスの語は二樣に用ゐられ一は俗語の金穴の意にて Like Midas, all he touches turns to gold などいひ又は所謂難有迷惑の意にて Midas' gift などいふ

Midas-eard　識別力の欠乏をいふ(wilhout discrimination and gudgement)ある時ミダスはパン神の方、吹笛の技及ひ美音の點に於て遙にアポロ神に優れることを斷言しければアポロ神は彼の耳の識別力無きを憤り彼の耳を奪ひ去りて代ふるに驢馬の耳を以てせりされば王は其耳の常人に異なれるを愧ち常に深く帽を蒙りて其耳を掩ひ隱せり其帽をフリギアンキアップといふポンチ繪などに往々見もる三角形の帽是なり

Nemesis　は希臘の女神にして初は分限の神にて人の分に過ぐる驕動ある者を罰せしかば後懲罰の神となれり因りて因果應報の意となれり例へは

It was indeed a curious Nemesis under which the Iron Chancellor (Bismarck) fell after having enyoyed for nearly 27 years a power such as never since Bichelien had feen wielded by a Prime Minister.

Nemo ante moitem beatus (拉)　Nobody can be praised before death リヂアは古代に於て西亞細亞の大國にして其富饒天下に冠たり故を以て其王クロイソス自ら謂へらく天下の幸福を享くる者已に如く者なかるへし、會ま希臘の大賢ソロン―諸國を周遊してリヂアに來たる王之に巨多の寶貨を示し且國の殷富の狀を語り問ふて曰く卿四方に遊ひ多く天下の人を知る方今天下に於て最も天の惠を享受する者は何人なりと思ふやとソーロン答へて曰く其はアテネの人テロスとす王ソロンガ已の如き大國の王を擧けすして一市人を稱するを訝り更に問て曰く其は何故なるかソロン答て曰く彼はアテネの全盛時代に逢ひ幾多の美麗聰明なる兒女の父となり家庭圓滿許多の土地田園を所有し邑人と親和し壽を以て終れり其性善良なりしかは死後大に邑人に愛惜せられたり王又問ふ然らは其次は誰人か最も天幸を得たる者そソロン曰くクレオビス及ひビトンの兄弟二人とす二人共に膂力人に超えオリムピアの競技に於て數度月桂冠を戴けり二人又極めて老母に孝あり一日其母禮拜堂に詣らむことを欲す已に牛車に登り牛を待つも故ありて來たらず兄弟乃ち牛に代り車を挽き堂に赴く觀る者其至孝を賞歎せざるは莫し已に堂に到り老母は祭壇の前に俯伏し兄弟の爲めに幸福を禱る兄弟稍や疲勞を感せしかは堂に上りて假寢し遂に復さ起たず人々爲めに碑を建て其至孝を後世に傳へたり王ソロンの言を聞き懌ばず卒然問うて曰く卿は予を以て幸福の人とは認めざるかとソロン答へて曰く凡そ人棺を蓋ふの後にあらざれは斷ゝて其幸不幸を定むること能はず今日に在りて之を見れば大王の如きは大國に君臨し其欲する者として得られざるは莫く其幸福無比なるか如しと雖も有爲轉變は世の常なれは始は天の眷佑を得ると雖も終りに至り天に厭棄せらるゝことなしといふべからずと王陽にはソロンの智を稱したるも陰には迂儒共に語るに足らずと爲し遂に復たソロンを見ず幾も無くして王の長子獵して流矢に中り其命を殞ず而して次子は聾にして啞なり王漸く樂まず後數年大學して波斯を討ち敗れて擒にせられ其王キロスの前に至るキロス命して之を焚殺せしむ兵士クロイソスを縛して積薪の上に置き火を放つ火氣炎々クロイソス忽ちソロンの言を追想し大に其名を呼ぶキロス之を聞き暫く火を停めしめ其故を問ふクロイソス因

て具さに已がソロンと問答せしことを語り氣息奄々哀を請ふキロス之を聞き心深く感し急に命して火を滅せしめクロイソスを伴うて國に還り賓客の禮を以て之を待ちきといふ但し此說話は希臘の史家ヘロドトスの傳ふる所にして歷史的事實（ヒストリカルフハクト）にはあらず

越中の名勝

林　忘　我

予生來旅行を好み閑暇ある毎に輙ち飄々乎として脚の向ふ所に任す一昨年金澤に來りてより既に畧近國の勝區を探り盡して日夕心中の愉快實にいふへからざるものあり頃日同好の諸氏予の寓を叩きて旅行の好場所を尋ねらるゝと切なるを以て先つ越中にて予が最佳景と信するものを列記し其參考に供せんとす然れとも實境を描いて之を眼前に彷彿たらしむるとは不攻予が如きもの〻到底なし得る所に非るを以て此記に於ても唯實用的案內記たるに留め猥に形容之辭句を濫費して却て自然の美を汚さゝらんとを力めたり讀者之を諒せられんとをこふ

予は加賀に來りてより先つ地圖を按して其景色の單調無趣味あるべきを想ひやがて附近に出遊するに及ひて果して其推測に違はさりしを確め潛に身の不幸を嘆したり四月能登に遊ひて始めて海岸の美景に接し積日の不平幾分か消散するを覺え其年の夏期更に越中飛彈の山中に漫遊するに及ひて始めて我渴望せる眞箇壯大の自然に邂逅したるの感あり其後若越諸國の海岸を探るに至て予か旅行癖は多大の滿足を得たりと雖も猶越中探勝の時の感興は今日まて最も深き記憶となりて殘れり

予の見る所によれは越中は海岸の景なくして山河の景に富めり氷見より境に至るまて殆三十里の間何等風光の見るへきなく僅に氷見附近伏木の西方水橋の西方魚津附近生地附近の海岸の比較的佳なるを除きては彼の平凡無比と稱せらるゝ加賀の海岸に比して甚た勝れる所あるを見す然れとも山河の景に至りては越中或は北陸に首位を占むるとを得べし卽ち川の代表者としては黑部川神通川庄川あり山の代表者としては豪壯遙に富岳を凌駕せる立山あり此等は徒に越中の名勝たるのみならす又實に日本の名勝たり加ふるに地僻にして道路險に遊惰柔弱の俗物輩の來遊を許さゝるを以て今猶人工の汚れを免れ醇乎たる天然を持續するを見るは我等の喜に堪へさる所也今左に順を追うて其案內記を揭けんと欲す

（一）立山　自然の「大」を代表せりと稱せられたる立山は我か金澤を距る僅に二日程に過きす其山麓なる蘆倉寺村へは富山市より上瀨町を經て僅に六里餘道路平坦なるを以て脚の弱きものは人車よるを得べし登山の期節（自七月二十日至九月十日）中は重なる民家は一定の順序により皆旅客を泊せしむるを以て登山事務所に至り乞はゞ其順番の家に案內せらるべし然れとも旅宿の次序は決して亂るとを許されさるを以て一度事務所の手を經たる以上は已れに當りたる旅宿の汚穢を訴ふるも復如何ともすへからす、仍て予は芦倉寺に至る毎に必す直接に同地の豪家なる佐伯忠胤氏方（村の入口より二丁許左側）に至り事情を述へて宿泊を乞ふを常とす斯くせは「親戚」或は「知已」の名の許に快く破格の宿泊を許さるべし室內ひろく器物寢具甚だ淸潔なり義道（ギドウ）と稱する怜悧なる三河產れ少童旅客の爲に萬事を斡旋すべし

登山の道條と甚た明瞭なるを以て案內者は必要ならされとも荷物に苦しむ者は成るへく三四名連

合して傭ムをよしとす（賃金一日五拾錢の割）彼等は米を携帶して山上煮炊の勞に服す若し案内者なく米を携へさる者は山上にて舍主に依賴せは炊きくるべし予の經驗によれは山上の米は麁惡無類且つ半熟にして到底咽を下らず仍て山中の食料として富山にて新しき食パン二斤ビスケット一斤牛肉の罐詰最小のもの二個ばかりを買ひて携ふる方よかるへしと考ふ其他能ふへくんは毛布一枚を携帶すべし

未明に出立して村を離れ廣漠なる磧を過き一里半はかり常願寺川の北岸に沿うて進めは川の分岐せる少し上に鐵條を欄干とし薪を編みて踏板とせる小き鉤橋あり（其所にて橋を渡らす川に沿ひて左に入らは稱名瀧に至る）此を渡りて進めは急坂忽ち頭上に起り巨木天を蓋て晝猶暗きを見る此れを材木坂といふ一里にして熊野堂の茶店あり其より上は峻嶮前の如くならす二里にして左方に稱名の大瀑を遠望し猶二里にして渺茫たる彌陀か原に至れは立山温泉道の本道と直角に右折せるを見る（此處を追分といふ）此邊より道二つに分れいづれも室堂の宿舍に達すれども一の谷の嶮を見んと欲せは左方の路をとるべし追分より二里餘にして千手原に至り遂に室堂の巨屋に達す

室堂に着して猶時間あらは附近の地獄谷に至り熱泉沸騰と轟々たる硫氣噴出の壯觀に接すべし其景悽絶恐山箱根の如き小規模に非す眞に地上の地獄と稱するも過言に非るを覺ふ

苦しくして而も趣味ある室堂の夜泊に幾多の詩料を感得し翌朝未明に浮土山雄山に登らは其大其美嗟何の辭を以て之を評せん旅客は恍惚我を忘れて居ら自然の大景に融合するの感を生すべし

歸途には追分より萬山の奥なる立山温泉に下るをよしとす

（二）立山信州路　信濃大町（郡役所中學校の所在地なり）の附近野口村にて諸般の準備を整へ案内者を傭ひ針木峠を越ゑ黑部川を横斷し大平（ダイラ）の小屋に一泊し其より佐良峠を經て立山温泉に達する道あり又大平より直接立山々頂に達する道あり（前者は昔年佐々成政の通過せしもの）共に幽邃無比特に針木峠附近積雪上攀登の壯快と黑部川沿岸の美景とは一度味ひしもの〻終生忘るゝ能はさる所旅行癖の士は必す此境に足跡を印すべし野口村より立山迄僅に二日程に過ぎす

（三）稱名瀧　稱名瀧は稀有の名瀑なれとも人皆立山登山の途中より遠望するのみにして未だ親く瀑底に至りし者あるを聞かす此れ蓋し旅客偶其境に至らんとする者あるも立山案内者か彼等を恐嚇して其非常の難所なるを說きて之を斷念せしむるによれり予は是非とも此を見んと欲し昨夏大岩寺より態々山を越ゑて芦倉寺に來り例の佐伯氏に一泊し翌日主人の周旋により朴實なる佐伯伊佐五郎なるものを案内者として遂に其素志を達したり地は芦倉寺を去る五里頗る難所なるを聞かされしも健脚に誇れる予は少しも之を意とせす强て彼の男を說いて嚮導を賴みしなり七時出發八時頃（前日より時計破損して用をなさす予か山中旅行無二の友たる磁石を以て之に代用す）藤橋に着して立山道に分れ蛇の如き細徑を稱名川に沿ふて上る半里にして無人の木挽小屋あり其より草莽次第に深く徑路は其れに沒せられて全く見るとを得す僅に足に抵抗せさる所を路と知りて進めは萱葛なゝ頭上にからみ合ひて身は恰も隧道を行くの如し蝮の害を恐れなから姿は見ゑぬまゝ相呼應して猶進めば一里斗りにて再ひ小屋あり此處に至る迄迷ひて數回叢中に倒れたり、其れより四五分間休憩の上更に川を離れて左方の小山に向て進む急峻甚しけれど頂上まで僅に五六町のみなれは直ちに到着し空腹甚しきを以て晝飯の一部

を喫したり磁石を見れば已に十時過なるか如く心頻にせかれて直に復出發す藤蔓に垂下し岩角を攀ぢて一支流の側に下れば又小屋あり其より細溪を渉り小山の麓を廻り行けば幾くもなくして遂に本流の磧に出でたり此より道全く絶え巨岩累々矮樹密に其間に交錯して歩行頗る苦む斯の如きもの殆んと半里仰き見れば遙に一條の大瀑布の白龍の如く体の上部を樹頂に現はせるあり不覺快哉を叫び勇氣百倍疲脚頓に輕きを覺ゆ此處より瀑畔に至る僅に一里に充たずと雖も處々に絶壁ありて今迄の如く川の一方のみを歩するとを得ず已むなく河中に亂立せる岩石を踏んで急湍を躍り越ゆること數回若し一度轉墜せは頭腦岩角に觸れて粉碎の災立ろに至るへく毛骨爲に悚然たるを覺ゆ磧には數千万の怪岩危石縱横起伏して巨人の髑髏を並へたるか如く此を間斷なく攀ち上り跳ひ下り行く予等の苦みは眼前の美景と前途の希望となかりせは殆んと堪へ得へからさるものなりきかくて此の獨り角觝にて大に時間と氣力とを消盡し漸く十二時半頃瀑底に達して驚くへき大觀に接するを得たり

アヽ稱名瀧は予か嘗て見たる最も壯大なるものなり、見よ遙に九天の上より落ち來れる絶大の水晶柱は再度途中の岩壁に觸れて三壇となり遂に轟然たる響を以て深青色の瀧壺に直瀉し其水の全部を地獄の如く沸騰せしめつゝあるを、見よ瀑頂には大樹生ひ茂りて目も及はぬ迄にいと小く一抹の白雲危ふけに其上に懸りて時しも黄金なす日光を其罅隙より垂直に亂射しつゝあるをアヽ此の美觀予は何の辞を以て之を形容すへき之を彼の有名なる那智華嚴白水之諸瀑に比するに高さに於て豪壯の点に於て唆に數等の上にあり唯强て難を求めは彼等は岩面黑色にして周囲に樹木の欝

葱たるあるに反し此れは兩側之絶壁稍赭色を帶び且つ中部以下赤裸々にして絶て緑を着けさる点に存す然れとも絶壁のいかにも豪宕無双にして今にも墜落せんとするか如く仰視するものをして覺ゆず戦慄せしむるの慨は唯此瀑のみ有する所なるを以て其優劣俄に判すへからさるなり

予已に此の幽境に來り此の大景に對して積年の素志始めて達するを得爽快いふへからす乃ち石上に踞して晝飯の殘りを喫し無邪氣なる導者と共に暫く自然之鑑賞に耽るアヽ此の瞬間我も彼も共に微細なる自然の兒のみ復其間何等の遥庭あらざるなりかくて茲に留ると半時間はかり衣袂は細霧に濡れひたりて身に沁む寒さいと堪へ難く特に前程遙かにして或は夜に入らんとを恐れ遂に思ひを殘して此處を出發し途中多くの困難を經て薄暮無事旅宿に達しぬ此日往復十里を通して殆んと休息せす歩みたるを以て兩脚之疲れ頗る甚かりしも導者の賞賛と予に十分の滿足を與へ且つ土人さへ多くは至らさる靈境に入りしを思へは予は非常の得意を感して其夜の夢いと樂しかりき』

稱名の瀧道は最後の一里の外は決して恐るへき程の難所に非す晩春草淺き候に於てせは何人と雖も容易に至る事を得へし唯春期は水量稍多きを以て流を越るに一層の困難を覺悟せさるへからす足弱のものは途中至る所に泊すへきの小屋あれは決して憂ふるを要せす造化の秘を探ちんと欲する者は須く一遊すへきなり

(四)黑部川の絶景　予は今迄諸國の大河急流を見たるとを多きも未た黑部川の如き絶景に接せしとあらす、黑部川は實に急流中の急流にして殆んと瀧の連續せるものと稱すへく水の美なる境の幽なる他に比類あるを見す此川は水源より河口迄殆んと二十餘里之長きに亘れるも重に深山幽谷之

間を貫流するを以て其流域の多分は少數の人の外未た至りし者あるを聞かす唯愛本橋より上流八九里餘の間昨年石川大林區署の手によりて河岸の絶壁に沿ひて怛々たる一間幅の大道を開鑿せしを以て心あるものは容易く此美景に接するとを得へし予は昨年夏單身此の峽谷に入りて行く〳〵其展開する千變万化の佳景に對し今更なから大自然の妙工の限なきに驚嘆し一種神來の氣に打たれて恍惚我を辨せさるに至りしとありき途中三箇の釣橋の如きは其奇其妙遙に飛驒白川のそれを凌駕し周囲の自然と相俟て一種各狀すへからさる雅致あるを見る里程は愛本橋より音澤迄一里弱其より三里にして黑薙温泉あり猶三里にして西鐘釣温泉あり共に河側之岩罅より湧出し夏期には來浴者一日數百人に及ふことあり旅宿は各一戸にして而も甚た不潔なり鐘釣温泉の上流一里餘に大林區署の小屋あり毎年初夏より初秋に至る迄技師技手等の出張せるものあるを以て温泉の不潔を厭ふものは就て願はゝ一泊を許さるへし其附近に猿飛と稱する奇勝あり必す見逃さゞるを要す更に冒險を好む者は導者を傭ひて此より祖母谷を溯り信越國境の群山就中大蓮華の峻嶺に攀登するを得、

（五）神通川の美景　神通川は越中より飛驒に通する國道に當れるを以て茲に細說するを要せす其最も佳なるは片掛驛より蟹寺驛を經て飛驒の打保村に至るの間と蟹寺より分流に沿ひ飛驒の船津町に至るの間となり飛驒に遊はんとする者は必ず此道を通過すべし

（六）庄川の奇景五箇山白川白水瀧　庄川（射水川）の美景は越中井波町附近より溯りて飛驒の平瀨に至る十七八里の間にあり此溪谷は所謂五箇山（越中）と白川（飛驒）との仙境を包含するものにして群巒重疊直ちに其兩岸に聳立し藍の如き一道の碧水其間を穿ちて蜿蜒として流れ行く樣たしかに皇國の一名區たるを失はす之を黑部川に比較するに彼れは奔湍を以て勝り此れは深淵を以て勝る活動の趣は彼に及はすと雖も靜寂の趣は此れ遙に彼に超絶せり加ふるに古風なる一簇の茅屋は点々として其の兩岸の樹林中に隱見し平和の氣は滿峽を覆ひて佳民皆浮世の苦を知らす風俗淳朴今猶大古の趣を存し眞個に我邦の武陵桃原なるを覺ゆ井波より三里にして河岸に大敎温泉あり四近の風色甚た佳なるものありと雖も僅に一戸の旅舍は皆木賃客を收容するを以て「御役人樣の御座敷」と稱する六疊の一室を除きては不潔の甚しきは如何ともすへからす大敎より二里餘大崩島に至りて始めて新道あり下梨は五箇山全村中の都にして郵便局旅人宿あり城端町と僅に一山を隔つるのみ山上には有名なる天柱石なるものあれとも平凡一奇なく賞觀するに足らす若し强て見んと欲せは字松尾に至りて案内者を賴むべし漆谷より上流數里の間特に絶勝に富み靜穩眠れるか如き瑠璃色の深淵は蛇の如く屈曲して綠滴る山腰をまとひ一帶灰白色の巖巖は傲然として其兩側に壁立し幾多の奇橋は此碧湍を横りて蛛網の如く空中に懸垂し天然人工相合して茲に純美なる一大活畫を構成し此等の消息は到底我筆の能く描く所に非るなり鳩ヶ谷荻町を經て平瀨に至るに及んて景致漸く平凡となるを覺ゆ

庄川の溪谷には數個の瀑布あり白山の白水瀧（平瀨より五里）荻町の高瀧等を最とす前者は日本屈指の大瀑布なれは必す至り見るを要す、

峽中旅宿に乏しきを以て至る所の豪家に就て泊すべし質朴なる主人と共に爐邊に圍坐して世外の

清談に耽る豈特殊の興味なしとせんや寺院に宿するも亦尤妙なり

（七）遺漏雜事　前に述へ來りたる地方は春期休暇には雪深くして至るへからす他方のものは夏期歸國の途次に於てする方費用日數の点に於て便益尤多かるへきを信す　立山信州路は數名連合し八月末又は九月上旬歸校の途次信州より上るを要す　金澤より庄川に至るには先つ二俣を經て福光まて徒歩し其より井波を經て河岸を溯る時は美景の全体に接するを得然らされば福光城端を經て下梨（途中に天柱石あり）或は漆谷（小瀬峠を越ゆ）に下るも可なり然れとも猶此れに勝れる捷路あり即ち金澤より犀川を溯りて倉谷鑛山に至り國境の山脈を越えて直に庄川沿岸なる西赤尾町に達するか或は淺野川を溯りて越中に下り刀利其他の二村を經て倉谷道に合して同所に下るもの是なり斯くせは足弱の者と雖も一日にして庄川に達するを得べし　其より河岸に沿ひて行く〳〵名勝を探り平瀨に至りて案内者と共に白山に登るへし　其里程凡九里途中より白水瀧と六白川温泉（側に無人の小屋あり）とあり白山より加賀の方に下るには南路（白峯温泉に降る）と北路（尾添又は中宮温泉に下る）の二途あり　又飛驒の白川より高山地方に至るには荻町より天生に越す險路と平瀨の上流新淵より六厭に越す本路とあり高山よりは信州（乘鞍岳槍岳白骨木曾御嶽等順路）美濃（中山七里）越中（神通川美景）に通する大道あり

参謀本部の圖は必す携帶すべし猶此に勝れる詳圖は農商務省地質調査所輯製のもの圖書館にあり就て見るべし

猶此に漏れたる有峯大岩寺立泉寺小川山田二温泉皆折あらは一遊すべし

定性分析法

在大學　龜川生

分析化學トハ物体ヲ分析シテ其ノ性分ヲ知ルノ學ニシテ化學ヲ學フニハ缺クベカラザルモノナリ而シテ又其ノ方法ハ化學反應ヲ應用シタルモノナレハ化學ノ素養ナクシテ能クスベキ業ニアラザルナリ　サレハ範圍廣ク化學ヲ學ブ一二年ニ過ギザル青二才ガ喋々スベキモノナラザルモ聊カ嶄新ト思フ（四高時代ヨリハ）二三ノ方法ヲ學ビシヲ以テ諸君ノ參考ニ供セント欲ス　乞フ越俎ノ罪ハ幾重ニモ御許シアレ

分析法ハ一ツノ技術的ノモノニシテ熟練・忍耐・細心ヲ要スルコトハ常ニ耳ニスル所ニシテ先生ノ御目玉ト共ニ頂戴スルハ『急カズトモ確カニヤリ給ヘ』ニテ千ノ疑ヒアル事ヨリハ一ツノ確カナルニ若カズト・分析化學ノ金言トコリ言フベケレ故ニ當科ニテハ一ツノ驗体ヲ少ナクトモ二日長クテ十日間位ヲ費シテ分析スル程ナリ.

久原先生ノテーブルト似タル点多キモ順序トシテ複雜ナガラ初メヨリ記載セリ

試藥ノ製法

試藥ノ製法ヲ擧ゲシハ四高ニテ用ユルモノト異ナル点アルヲ以テ若シ左樣ニセシモ檢出セザリシト攻擊サレシ時ノ逃ケ口ニ供セン爲メナリ

Acetic acid	$C_2H_4O_2$	藥局方ノマヽニシテ淡クスルコトナシ
Hydro chloric acis	Hcl	同上
Dilute ,, ,,	D Hcl	藥局方ノモノ　10%
Nitric acis	HNO_3	藥局方其ノマヽ
Dilute ,,	D.HNO_3	藥局方ノモノ　10%
Sulphric acid	H_2SO_4	藥局方其ノマヽ
Dilute ,,	D.H_2SO_4	藥局方ノモノ　10%

シ煮沸シテ澄明トナシ更ニ $Hg\,cl_2$, ノ溶液ヲ加テ赤色ノ沈澱少シ起リ消エザルヲ度トナシ之ニ KoH 160 gr, 及ビ Na OH 120gr, ヲ加ヘ蒸溜水ヲ加ヘ 1 liter トナシ更ニ少シノ $Hg\,cl_2$ ヲ加ヘ靜置シタル上澄液

First groop

Hcl ニテ沈澱ヲ生ズ

$Hg_2\,cl_2$, Agcl , $Pb\,cl_2$

皆ナ白色ノ沈澱ナリ然ルニ $Pb\,cl_2$ ハ多量ノ温湯ニ溶ケル故ニ水ヲ加エ熱シ夫ノ上液ヲ取リ更ニ水ヲ加エ熱シ最早沈澱減セザル如クナレバ $Pb\,cl_2$ ハ水ニトケタルモノトシテ濾過ス

濾液　$K_2Cr_2O_7$ ヲ加フレバ黄色ノ沈澱

$2Pb\,cl_2+K_2Cr_2O_7+H_2O=2Pb\,Cro_4+2K\,cl+2H\,cl$

沈澱　洗ヒタル后 Ammonia ヲ加アレバ Ag cl ハトケ Hg_2cl_2 ハ黑色ニナル

此ノ時 Ag ハ $NH_3Ag\,cl$ トナルトノ說ト Hg ハ NH_2Hg_2cl トナルノ說アルモ Richter's ニハ未定ノ由記載セリ

此ヲ濾シ分ツ

濾液　HNO_3 ヲ加フレバ Ag cl ノ白色沈澱ヲ生ス

$NH_3Ag\,cl+HNO_3=Ag\,cl+NH_4NO_3$

沈澱　王水ニテトカシ $Sn\,cl_2$ ヲ加フレバ白色ノ沈澱ヲ生シ后ニ metals Hg ヲ排出ス

$2Hg\,cl_2+Sncl_2=2Hg\,cl+sn\,cl_4$

$2Hg\,cl+Sncl_2=2Hg+Sncl_4$

Second groop

H cl ニテ First groop ヲ試驗シタル液ハ沈澱ノ生ズル生ゼザルニ

Sulphuretted hydrogen H_2S kipp's apprate ヲ用ヒ清淨シタル gas ヲ夫ノマヽ檢体液中ニ通シテ用ユ

Ammonium Carbonate $(NH_4)_2CO_3$ 炭酸安母紐謨一分安母尼亞水一分及蒸溜水三分ヨリ成レルモノ

Ammonium chlorate NH_4cl NH_4cl 5% ノモノ

Ammonium molybdenate $(NH_4)_2MoO_4$

$(NH_4)_2MoO_4$ 10gr ヲ 10% ノ NH_4OH 水 40gr ニトカシ夫レニ 60.cc, ノ水ヲ加ヘタルモノヲ 20% ノ HNO_3 250cc ニトカス

Ammonium oxalate $(NH_4)_2C_2O_2$ 3.33% ノモノ

Ammonium sulphide $(NH_4)_2S$ 安母尼亞水三分ニ硫化水素ヲ飽和シ更ニ安母尼亞水二分ヲ混セルモノ.

Aqua Ammonia.	NH_4OH	藥局方夫ノマヽノモノ
Calcium hydrate	$Ca(OH)_2$	$Ca(OH)_2$ ノ飽充液
Silver Nitrite	$AgNo_3$	3.33% ノモノ
Baryum chlorate	$Bacl_2$	10% ノモノ
Ferous Sulphate	$FesO_4$	時ニ應シテ水溶液ヲ作ルベシ
Mercuric chloride	$Hgcl_2$	5% ノモノ
Potassium chromate	K_2CrO_4	10% ノモノ
Potassium bichromate	$K_2Cr_2O_7$	10% ノモノ
Potassium Ferricyanate	K_4FeCy_6	10% ノモノ
Caustic Soda	Na oH	20% ノモノ
Magnesium Sulphate	mg SO_4	10% ノモノ
Natrium phosphorate	Na_2HPO_4	5% ノモノ
Lead acetate	$Pb(C_2H_3O_2)_2$	10% ノモノ
Platinum Chlorate	$P+cl_4 3Hcl$	5% ノモノ

Nessel's Reagent KI 30gr. ト $Hgcl_2$ 13gr ヲ蒸溜水 800 cc ニ和

ニ讓ル)

上ノ溶解セル三ツヲ濾分シ置ク……(B)

茲ニ又注意ヲ要スルハ Cu ノ少量ガ下ノ如キ形ニナリテ同シク $(NH_4)_2S$ ニトケルコトナリ

$$2CuS+(NH_4)_2S_5(?)$$

故ニ少量ノ Cu アル片ハ $(NH_4)_2S$ ノ代リニ Na_2S ヲ用ユベシ然ル片ハ夫ノ恐レナシ

(B) ナル液ヲ濾シ分チタル Residue ヲ能ク洗ヒテ夫レヲ試驗管ニ移シ(少シ水ニテ洗ヒ落シテ差支ナシ)濃厚ナル HNO_3 ヲ加ヘ熱スベシ(茲ニ S ノ排出スルコアルモ永ク熱スレバ S ハ一所ニ塊マリテ所謂ゴム狀 S トナル)然ル片ニ黑キ硫化物ノ殘ルコアレバ夫レヲコシ分チ夫ノモノハ下ノ如ク取リ扱ヒテゴム狀 S ナルカ Hg'' ナルカヲ檢スベシ

卽チ King water ヲ加ヘ熱シテ能クトカシ $Sn\ cl_2$ ヲ加フレバ Hg'' ナレバ白キ甘汞ノ沈澱ヲ生ズ

$$3HgS+6H\ cl+2Hno_3=3Hg\ cl_2+2NO+4H_2O+3S$$

$$2Hg\ cl_2+Su\ cl_2=2Hg\ cl+Su\ cl_4.$$

HgS ヲ濾シ取リタル液(HgS ナクトモ一度濾スコ必要ナリ之レ濾紙等ノ塵埃アレバナリ)ニ H_2SO_4 ヲ加フレバ Pb ノ有無ヲ知ルコヲ得

$$Pb(no_3)_2+H_2SO_4=Pb\ SO_4+2HN\ O_3$$

沈澱ヲ生ズレバ濾シ分チタル后 NH_4OH ヲ過剩ニ加フベシ

$$Bi_2(no_3)_3+3NH_4OH=Bi_2(OH)_3+3NH_4NO_3$$

同時ニ Cd, Cu モ hydrate トナルモ NH_4OH ニトケル故ニ沈澱セズ

若シ Cu アレバ NH_4OH ヲ加ヘタル片下ノ如キモノトナリテ所謂空青色ノ美色ヲ呈ス

$$(Cu\ SO_4+4NH_3)$$

此ノ反應ハ銳敏ナリ故ニ之レニ依テ Cu ノ存在ヲ知ルコヲ得.

關セズ多少酸性ナリ(First groop ノ沈澱生ズル時ハ少シ過剩ニ加フルヲ要ス)此ノ groop ノ特性ノ酸性液ニテ H_2S ニテ沈澱ヲ生ズルコナリ若シ中性 alkali 性ナレバ Third groop モ亦沈澱ス然レモ茲ニ注意ヲ要スルハ酸性ノ余リ强カラザルコナリ强キニ過グレバ Bi, Cu, As 等ノ沈澱ヲ生セズ酸ニ溶解シ Third groop ニ混シ行キ大ニ妨害ヲ來スモノナリ故ニ余ハ多クノ酸ヲ入レタル片ハ砂湯ニテ蒸發乾涸シテ H cl, HNO_3 ヲ逐ヒ出シソレニ少シノ酸ヲ加ヘ多クノ水ヲ加ヘテ H_2S ヲ通スベシ

若シ HNO_3 多量ニアル片ハ(多量ナラザルモ H_2S ヲ通ズルコ永ケレバ)白色ノ S ヲ排出ス

$$HNO_3+H_2S=HNO_2+H_2O+S$$

前ニ述ベシ如ク H_2S ハ必ス水溶液ニアラズ gas 夫ノモノヲ通スベシ

酸性ニテ硫化物ノ沈澱ヲ生ズ

Hg S ,	Pbs ,		
black	yellow-red-grey-greyish black		
Bi_2S_3 ,	Cu S ,	CdS ,	
brawnish Black	black	orange	
AS_2S_3 ,	Sb_2S_3		
yellow	orange		
Sns			
brawnish yellow			

沈澱ヲ生ズレバ熱シテ濾下スルニ便ニスベシ

沈澱ヲ濾シ取リテ能ク洗ヒ $(NH_4)_2S$ ヲ加フベシ

然ル片ハ AS, Sb, Sn ハ下ノ如キ形ニナリテ溶ケル

$$AS_2S_3+3(NH_4)_2s=2(NH_4)_3AS\ S_3$$

$$Sb_2S_3+3(NH_4)_2S=2(NH_4)_3Sb\ S_3$$

$$SnS+(NH_4)_2S=(NH_4)_2Sn\ S_2$$

Note! (Au, Pt モ亦茲ニ來ルモ之レハ稀ニ分析スル故ニ后日

此等三ツノ内 Na_3ASO_4 丈水ニ溶解シ他ハ不溶解性ナリ故ニ直チニ濾シ分チ

雜 濾液. 沸騰シテ CO_2, NO_2 ナドヲ逐ヒ出シ冷シテ HNO_3 ヲ二三滴加ヘ熱スベシ

$NA\ ASO_4+3HNO_3=H_3A_3O_4+3n_2NO_3$

錄 再ビ能ク冷シテ $(NH_4)_2M_0O_4$ ヲ加エ熱スベシ

$[2(NH_4)_3A_3O_4+22M_0O_3+12H_2O]$ ノ yellow 沈澱ヲ生ズ顯微鏡ニテ見レバ星形ナリ

茲ニ注意スベキハ As ナキ時ニ $(NH_4)_2M_0O_4$ ガ HNO_3 ノ爲メニ MoO_3 ノ白色沈澱ヲ生ズルコトナリ之レヲ能ク取リ違エルコトアリ.

沈澱. 水ニトケザル沈澱ヲ皿ニ入レ Hcl ニトカシ夫レヲ非常ニ稀薄ニシテ (余リ濃ケレバ次ノ反應出來難シ故ニ H_2 ノ泡ガ少シク上ル位ニ極薄クスルヲ要ス) pt plate ト Zu plate ヲ能ク磨キテ (oil 等付キ居レバ出來ズ)二枚合セニシテ中ニ入レ二十分位ヲ經レバ Sb ハ Pt 面ニ Su ハ Zu 面ニ美麗ニ附着ス

此ノ反應丈ニテ Sb, Su ハ充分ナルモ尙ホ見ント欲スレバ Sb ヲ Pt 面ヨリコスリ取リ King water ニトカシ H_2S ヲ通ズレバ Orange Rpt ヲ生ズ Su モ Zu 面ヨリコスリ取リ Hcl ニトカシテ $Hgcl_2$ ヲ加フレバ白キ甘汞ノ沈澱ヲ生ズ

$Su\ cl_2+2Hgcl_2=Sucl_4+Hg_2cl_2$

此ノ時 Hcl ヲ多ク加フレバ出來ズ

Third groop.

第二 groop マテ取リ去リタル濾液ヲ能ク煮沸シテ H_2S ヲ充分ニ逐ヒ出シ HNO_3 ヲ一二滴加ヘ再ビ熱シテ酸化スベシ而シテ NH_4cl ヲ加ヘ NH_4OH ニテ沈澱サセ(沈澱ニ注目)更ニ $(NH_4)_2S$

上ノ $Bi_2(OH_3)_3$ ヲコシタル濾液ニ Kcy ヲ加ヘ H_2S ヲ通ズレバ橙黃色沈澱トナリテ Cd ハ沈澱ス

Cu ハ此ノ濾液ヨリ見ルヲ得ルモ夫ヨリ銳敏ナルハ HNO_3 ニトカシタルモノニ $K_4Fe\ Cy_6$ ヲ加フ

$2Cu(no_3)_2+K_4F_2Cy_6=Cu_2FeCN_6+4KNO_3$

此ノモノハ redish brawn Color ノ沈澱ナリ

B Division

(B) ナル Solution ヲ取リ少シク酸性ニナルマデ Hcl ヲ加ヘ alkali ヲ中和スベシ (Hcl 余リ多ケレハ又 As, Sb 等トナルカ故ナリ). 然ルトキハ B Division ノモノハ brawn 又ハ yellew ノ沈澱トナリテ出テ來ル然レドモ同時ニ白色ノ S ヲ排出シ來リ大ニ區別ニ苦ムコトアリ夫ノ時若シ潔白色ナレバ S ト見テ差支ナシ然レドモ疑ハシキトキハ Benzal ヲ加ヘ振湯スベシ然ルトキハ S ハ Benzal ニトケテ沈澱ノミトナル

沈澱アレバ濾シテ (BenZal 加ヘズトモ S ハ濾紙ヲ通過スル故ニ沈澱ナケレバ濾紙ニ殘ルモノナシ) 濾紙共ニ乾燥スベシ

而シテ $NaNO_3$ ト Na_2CO_3 ト等分ニ混シタル Fusing mixture ヲ作リ夫ノ一半ヲ坩堝ニ入レ火ヲ緩ニシテ徐々ト熱シ (焰ガ一寸位ニテ坩堝ノ底ニ達セザル程). 融解スルニ及ビ他半ト上ニ乾シタル沈澱トヲ混シタルモノヲ極少量ツヽ加フベシ耳キ搔一杯位ニシテ一杯融解スレバ后一杯ヲ加ヘ極徐々タルヲ要ス

而シテ皆ナ加ヘ終ラバ火ヲ强クシ白色ニナルマデ融解スベシ然ル后火ヲ取リ (急ニ取レバ坩堝ヲ破ル恐レアリ) 坩堝ノ冷エルヲ待チテ水ヲ注ギ硝子棒ニテ混交シ alkali ヲ皆ナ水ニトカスベシ然ルトキハ下ノ如ク變化シ來ル

$Na_3A_3O_4$

$Na\ Sb\ O_3$

$Sn\ O_2$

ニテ卷キ火ヲ付ケテ能ク燃スベシ（此ノ少量ナルガ普通ナル故ニ斯クスルモノニシテ若シ多ケレバ坩堝ノ蓋ニテ燒クベシ）燒キタルモノヲ王水ニトカシ夫ノ王水溶液ガ燒キ付ク位マデ熱シテ王水ヲ逐ヒ出シ夫レヲ Na_2CO_3 ニテ中和シ alkali 反應ヲ呈スレバ aletic acid ヲ加フ

夫時 Co ナレバ red Ni ナレバ blue トナル此ノ溶液ニ付テ Bor ax ヲ用ヒテモ可ナリ（共ニアレバ不明）又 K NO_2 ヲ入レテ黃色ノ沈澱ヲ生ズレバ Co ナリ

$[(NO_2)_3Co+3NO_2K+NH_2O]$

此ノ沈澱ハ徐々ニ起ルヲ以テ皆ナ沈澱シ終ルマデハ凡ソ十二時間ヲ要ス十二時間ノ后靜カニ濾下シ濾液ニ KOH ヲ加フ若シ Ni アラバ $Ni(OH)_2$ トナリテ淡綠色ノ沈澱ヲ生ズ

濾液.

能ク煮沸シテ H_2S ヲ逐ヒ出シ HNO_3 ヲ一二滴加エ酸化シ夫レニ Na OH ノ過上ヲ加エ少シク熱シテ濾下スヘシ

沈澱.

$Fe_2(OH)_6$, $Cr_2(OH)_6$, $Mn(OH)_2$ Mn アレバ直チニ酸化サレテ赤褐色トナル

此ノ沈澱ヲ洗ヒテ濾紙共ニ乾スベシ

夫ノ間ニ濾液ヲ處分スヘシ

濾液.

二分シ一ツノ醋酸ヲ加ヘ H_2S ヲ通スベシ Zu ナレバ醋酸々性ニテ硫化物トナリ白色ノ沈澱ヲ生ズ

他ノ一分ハ Hcl ニテ酸性ニナシ夫レニ NH_4OH ヲ加エ暫クスレバ有名ナル雲ノ樣ナ flockig ノ沈澱ヲ生ズ

前ノ沈澱乾燥スレバ濾紙ヨリ落シ $KclO_3$ ト Na_2CO_3 ノ

ヲ加エテ熱スベシ而シテ能ク沈澱ガ下ニ沈ム樣ニナラバ濾過スベシ熱セスシテ濾下スレバ徒ニ時ヲ損スルノミ

Note！ HNO_3 ヲ以テ酸化スルハ H_2S ニテ還元サレテ居ル故ナリ鉄ナドハ亞酸化鉄トナリ居ルモノナリ.

尙ホ H_2S ヲ通セズシテ直チニ此ノ groop ヲ試驗スベカラズ何トナレバ Cr. MN 等ノ酸ヲ成形スルヲ得ルモノハ酸ノ形ニナリ居ル故ナリ然ルニ H_2S ヲ通ズレバ還元サレテ鹽基ノ形トナル.

Cr ハ鹽基ノ時ハ青色ナルモ酸ノ時ハ黃色ナリ

鉄ハ hydrate トナリタルモ亞酸化ハ汚綠色（Cr ニ似ル）酸化ハ褐色ナリ

沈澱物.

$Fe_2(OH)_6$ $Fe(OH)_2$ $Cr_2(OH)_6$

$Al_2(OH)_6$, CoS, NiS, MuS, ZuS.

Fe, Cr, Al ハ NH_4cl ニ逢フテ複鹽ヲ作ラサルモ Co, Ni, Mn, Zu, Ca, Sr, Ba Mg ハ NH_4cl ト逢フテ複鹽ヲ作リ溶解性トナル然ルニ Ca, Ba, Sr, mg, 硫化物ヲ作ラサル故ニ $(NH_4)_2S$ ニテ沈澱シ來ラズ濾液ニ行ク併シ只 NH_4OH 丈ナレバ hydrate トナリテ共ニ沈澱シ來ル恐レアリ又 Oxalic acid, Silisic acid, phosporic acid アレバ上ノ方法用ヒテモ Ca. Sr, Ba, mg, 共ニ沈澱シ來ルコアリ之レハ后ニ記述セン

沈澱.

沈澱ヲ能ク洗ヒ夫レヲ H_2S 水五ト Hcl 壹ノ割合ナル混合液中ニ入レ能ク攪拌シテ悉ク溶解セズシテ黑キ沈澱殘レバ Ni, Co ノアル證ナリ故ニ黑キモノ殘レバ濾スベシ

沈澱.

Ni, Co ノ量ハ通常少ナキ故ニ濾紙ト共ニ乾燥シ Pt wire

加へ熱スレバ Ba ハ $BaCrO_4$ トナリテ沈澱ス故ニコシ分チ再ビ $C_2H_4O_2$ ヲ加エ K_2CrO_4 ヲ加へ熱シテ Ba ヲ皆ナ沈澱サセ取ルベシ

又ハ $SiF_4 2HF$ ヲ加フレバ Ba ハ SiF_4BaF_2 トナリテ沈澱ス

Ba ノ沈澱ヲ濾シ取ラバ再ビ $(NH_4)_2CO_3$ ト NH_4OH ヲ加エ Sr, ノ沈澱ヲ見ルベシ

而シテ此ノ三ツハ確カニスル爲メニ Spectra scope ニテ見ルベシ

Mg.

第四 groop マデ取リ終ラバ夫レニ NH_4cl, NH_4OH HNa_2PO_4 ヲ加エ白色ノ沈澱ノ生スルカヲ見ルベシ併シ易ク起ラザルコアリ沈澱生ズレバ顯微鏡ニテ見ルベシ雪ノ結晶ノ如キ沈澱ナリ.

alkali groop,

NH_3 ハ未ダ Hcl ヲ加エザル前ニ於テ KON カ NaOH ヲ加エ熱シテ出デ來ル gas ヲ test paper ニテ見ルベシ

尙ホ確カニスル爲メニハ test tube ニ栓ヲナシ glass pipe ヲヘノ字ナリニナシテ嵌メ Caustic ヲ加エタルモノヲ test tube ニ入レ徐々ニ熱シ出テ來ル gas ヲ稀 Hcl ニ受ケ夫ノ NH_4cl トナリタル液ニ Nessel's Reagent ヲ加エ見ルベシ併シ此際能ク tube ヲ洗ヒタルモノナラザレバ危險ナリ極少量空氣中ニアルモノマデ沈澱來ル故ナリ.

K, Mg マデ取リタル液ヲ濃クナシテ又 NH_4OH ヲ能ク逐ヒ出シテ $P+cl_4 2Hcl$ ヲ加ニ夫レニ Alcohol + Ether ヲ加ニ能ク攪拌シテ黃色ノ沈澱ヲ生スレバ K ナリ併シ NH_4OH モ Na モ $P+cl_4 2Hcl$ ニ逢フテ黃色ノ沈澱ヲ生ズル故ニ $NH+OH$ ヲ逐ヒ出シ Alcohol Ether ニ $P+cl_4Na_2cl_2$ ヲトカスト雖モ不安心ナリ宜シク顯微鏡

fusing mixture (等分). ヲ加エ能ク混シテ坩堝ノ中ニ入レ熱シ融解セシムベシ而シテ此ノ化酸化セラレテ

Fe_2O_3	K_2CrO_4	K_2MnO_4
赤色	黃色	綠色

ノ如クナル故ニ坩堝ヲ冷セバ此ノ三色ニテ區別スルヿヲ得.

併シ此レヲ水ニトカス Fe_2O_3 丈ハ不溶解ナリ故ニ濾シ取リテ Ncl ヲ加エ, $K_4Fe\ CN_6$ ヲ加フルカ KSCN ヲ加エ見ルヘシ

水ニ溶解シタル Cr, Mu ハ二分シ. Mu, ハ坩堝上ニテ H_3PO_4 ヲ加エ强熱シテ $KMnO_4$ トナシ見ルベシ Violet Color トナル Cr ハ醋酸ヲ加ヘ $Pb(C_2H_3O_2)_2$ ヲ加ヘクローム酸鉛ノ黃色沈澱トシテ見ルベシ

4th groop

第三 groop ヲ取リタル液ヲ砂濁上ニテ熱シテ $(NH_4)_2S$ ノ過上ヲ NH_3 ト S トニ分解シ. 一度濾シテ更ニ NH_4OH ヲ加エ (NH_4cl ハ存在セルモノトシテ) $(NH_4)_2CO_3$ ヲ加フレバ白色ノ沈澱ヲ生ズ

$CaCo_3$, $SrCo_3$, $Ba\ Co_3$

沈澱ヲ取リ夫レヲ HNO_3 ニトカシ蒸發乾涸スベシ

$Ca(no_3)_2$' $Sr(NO_3)_2$, $Ba(NO_3)_2$

トナル之レニ無水 alcohol ト無水 Rther ノ等分混合液ヲ加フ然ルトキハ $Ca(NO_3)_2$ 丈溶解ス故ニ水ヲ加エ Alcohol Rther ヲ蒸發サセ夫レニ $(NH_4)_2C_2O_4$ ヲ加フレバ白色ノ CaC_2O_4 ヲ生スヘシ故ニ $C_2H_4O_2$ ヲ加ヘ不溶解ナレバ Ca ナルコ明カナリ

Alcohol Rther ニトケザル Ba, Sr ノ硝酸化合物ヲ水ニトカシ (水ニトケル故ニ Alcohol ニ Rther モ無水ナラザレバ一部分トケ來リテ Ca ト間違フコアリ) $C_2H_4O_2$ ヲ一二滴加エ K_2CrO_4 ヲ

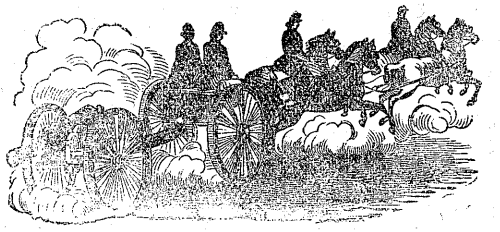
ヲ用ヒ $Ptcl_4K_2cl_2$ ノ octra hedral Crystal ヲ見ルベシ
又 $Si\ F_4 2HF$ ヲ加エ少シ Alcohol ヲ加ヘ見ルベシ
$Si\ F_4 2HF$ ハ Ba , K ノ外沈澱ヲ生セズ
又 Spectra scope ニテ 20°O ノ處ニ Vialet ノ薄線來ルヲ見ルベシ

Na, Spectra scope ノ 50° ノ黄色線尤モ確カナリ

余リ異ナリタル所アラザルモ只老婆心ヨリシテ記述セシモノ宜シク諒セヨ

acid ハ久原先生ノテーブルト余リ異ナラザルモ少シ二三ツアルヲ以テ此ノ次キ Base ノ各論ノ便利法ト共ニ述ベン又二三ノ混シタル場合ニ困難セシモノノ分析モ共ニ貴紙ノ余白ヲ借リテ記述セント欲ス返スヽヽヽモ多謝ヽヽ

不登高山、不知天之高也、
不臨深谿、不知地之厚也、
（勸學篇）



文苑

能登半島

半　脫

十月以來御日樣を仰いだ事のない北國も、此の頃の日和に大方は雪も融けて、今日は犀川の水量が常よりはいたくも增したとの事、折々は鶯の聲も聞くので、都大路の春景色などさすがに思ひ出される時であつた。試驗を終へて其の翌日能登半嶋の一周を果たす可く、兎角雲足の早い、惡くすると雨にでもあり相な四月一日寮を去つて下り列車に投した、津幡で一旦下車して七尾線を待つ。今朝寮を出たのは非常に早りつたのに、其處は又自分の家と違つて、暗い内から起きて御飯から辨當まで拵らへて、早く食べて御出で御友達が待つてるだろうから、それから危ない事なんかしないでね。斯んな風にして送り出して呉れる母は居らぬ、其處には大勢の人が集まつてれば自然我儘も許されぬ譯で、僕と山崎とは朝飯を未だ食べない。少し腹の内が淋しいので牛乳を呑んだが、思ふに此の一合の牛乳は飢を滿すべく何等の功も無かつたらしい。此處から羽咋迄瀛車賃は參拾七錢であつたと思ふ。瀛車は出た。

街道の松並木を白い菅笠の馬子が馬を曳いて行く。避病院の側きの桑の花は今を盛りと咲き競ふて居るが、病院の戸は堅く鎖されて、昨日迄病床に沈吟した哀れな寡婦は、此の平和なる春をも

待たないで今日は彼の世へ逝いたのでもあろうか。踏切に荷車止めて滊車を待つ男、其の荷物等より察するに此の邊の藥師の緣日へでも行くのでがなあろう。

うのけ停車場の前は砂丘で、松林の中に熊手携へて立てる乙女ありその邊り桃の花咲きて平和な春を誇り顏に。此の砂丘と向ふの山との間の市に通ふ小道を、馬に車曳りして自分は車の上に鼻歌低く行く馬子がある。菜の花は惜氣も無く此處をも飾つて、其の間を飛び交ふ蝶さへも見ゐるのだ。

七尾線は各停車場毎に名所案内の札が立つてる。仮へば「當地は石灰及び葛の產地なり」等甚だ面白く感ぜしめる、羽咋にて下車す。これからが愈々能登廻の一歩が初まるのだ、今しがた郵便脚夫がすたすた渡つて行いた橋の側きの一膳飯屋、其の小河の兩岸は川柳が茂つてるので、僅かに水の海に入る邊り波がざゞんざれ音を立てゝ寄せてるのが見える。料理は極めて簡單で「ごりの煮付」に澤庵許り、然し白狀するが實際に甘かつた。

「いくらだ」。

「拾五錢で」。

一体能登は馬鹿に物が安いと云ふ樣に聞いてたので、安いとは思ひ乍ら餘り安いのゝ感心して、茶代の方で拾錢奮發して合計貳拾五錢置いて特意になつて出て來た。

「あの是では……」娘の妙な顏をしたので

「なに好んだ拾錢は茶代だから」。

今にして思へば拾五錢しかも三人だ、考へても判かり相なものだとも考へられるが、何う云ふものか其當時は左樣は思はなかつた。恐らく是は先輩たる人が安い安いと丸で只の樣な事を聞かせられたのに基因する。果して婆さん青くなつて追ひ掛けて來た、少し後れた眞田は遂に婆さんにつかまつた、眞田は婆さんとの間に五分間位の押問答があつたが聞えなかつた。要するに一人前が拾五錢で合計四拾五錢との事。寄宿を出る時高橋舍監が旅の愧はゝき捨て等は体面を汚がすなと云はれて出て來たのだが、此の場合旅の愧はかき捨てだ、此の言葉が盡々難有く感ぜられるのである。小さな村の土藏に添へる何となく濕つぽい路に、眞赤な椿の花がこぼれて、今し鷄が聲高く鳴きし靜かな村を出でゝ右に湖を見た。遠山は霞みて田の道等に立つてる人が豆の樣ゞ。山崎啞蟬曰く。名も知られぬ平和な湖吾は鄕に逢ふて、云ひ知らぬ感慨に泣く一人なるも。思ふに此の行二度は期し難し幸あれよと。啞蟬元來情に富む殊に其の湖に稱する最も感慨措く能はずと云ふ男である。可憐なる少年を村の胡畔に立たしめて、母の墓に別れて他國に迷ふの情を描きしもの啞蟬なり。瑞西にありと云ふ幽邃なる湖を戀ふるも啞蟬なり。察するに此の湖と別れるの情堪へざるものがあるらしい。僕等も幾度か振り返つた。恰も春の薄日に照らされて銀色に光る湖が、遂に山に隱れて見えずなる迄。本道は甚だ平凡なので海岸へ出た。

義仲の寢醒の山か月悲し。是は芭蕉が倶利加羅の頂に、冷かなる石に刻みし句であつた。榮枯盛衰は世の常であるかも知れぬ、生者必滅は眞理であらう。而も幾万の敵を此の谷に埋めた時、後白河法皇を白河院に押込めた時、誰れか粟津の哀れな最後を預知したろうか松に掛つてる鬼蔦は

今も赤く奇麗に彩られてあるが、昔を忍ぶものと云つては折々出づる古太刀ゥ此の碑より外には只松風許りであらう。此んな事を考へたのは去年の秋倶利加羅遠足當時の感である。見れば其の慈しい、悲壯な倶利加羅は左方に來たり、岸を打つ波の音が激しく砂を飛ばす事が甚だしい。潮汲む人の覺束なく汀に歩みよるのが見られた。

赤土の松多き阪道を彼方より馬車來たる西洋風なり。何處で鳴くのか雲雀の聲が聞へて、登るにつれ海は段々と見て來た。此邊小さき池多し。高濱の町を過ぎて橋を渡つた、其の海に入る處の材木の上で休んだ。日は午を過ぐる事二時間鼠色の雲天を込め、遠く島の如きものを見たが、岩よ碎けて散る水沫の爲めに能くは見へない。顧みれば今渡つた橋は恰も畫中の夫れの樣。

右福屋、左本道行きあたりと書いた木標の左本道行きあたりが馬鹿に氣に入つた。沖の方が何だか怪しく暗くなつたと思ふ間も無く、大粒の雨はらはらと僕等の横面を無遠慮に叩いた。今迄微かに見ゑた白帆も何時の間にか掻き消されて。未だ三時だが雨は降るし腹はへるし、一と先つ此處で泊る事として福浦の入口の宿屋に足を止めた。流石に呑氣な御客樣を爐の端に招ドて雛餅を燒いて呉れたのは難有かつた。

『なにしに東京の御方が金澤迄御出でになつたいね』。斯う切り込まれては少しく辨解を要するので、高等學校の日本に七つきり無い事、夫れから金澤の學校の好い事など、隨分合點が行く樣に話したつもりだが先の疑は晴れぬ樣だつた。頓て客間に通されて火燵に足を伸ばした時は思はずうとうとした。膳は運ばれて酢貝で甘く夕飯も終つた後は、元氣益々恢復され何だか愉快で足らない、丁度女房さんがお茶を持つて來たのを幸に

『何か面白い話は無いかね』。斯う問ふた。

『何にも年老が話も有りませんはね』。と笑ふ

斯んな風で頭から相手にしないが、色々話しの末船頭の歌ざと云ふのを聞いた。福浦名物夏中三月冬は四海の波の音斯う云んだそうで此の歌の意味は何う云ふのかと云ふと、何でも夏三月が生活の根本になるので、冬は魚も取れず波許りで船さへ碌々入いて來ないと云ふ始末それで斯う歌ふんだそうな。お女房さんと入れ替りに亭主がやつて來て一つの願があると云ふ、聞いて下さるか何うか、夫は何なりとも僕等に判る事ならと云ふ樣な譯で彼は徐々に說き出した。それは此處に一人の娘があるそれをつまり娼妓にしやうと云ふのですが、未だ丁年にならないので親族の人の保證が無くつては警察で許可しない。それで實は一人の伯母があるんですが名を出すのは嫌だと云ふんで、一体此んな時には何うしたもんでしようと斯ふ云ふ問なんた。隨分事情もあり相な話だゥ別に聞く必要も無いので、好い加減に說明して終つた。亭主は喜んで二三年前の大火で殘らず燒いて終つた事だの、彼の太皷は遊廓の音たのと云つて下へ行た。三人共寢に就いた、太皷の音や三味の音や微かに旅寢の枕に通ふさすがに淋しきものなり。

夜は明けた今日は四月二日である。

鐘樓灣頭に近くあり、もふべ泊りし船の五六艘靜かに横はつて、水は靜かに朝靄沖の方よりたちこめてをる。春の夕など紅に暮れて行く水面の靜肅を破ぶつて欸乃勇ましく船の歸り來たる時や。

鐘樓の鐘は自ら鳴るかの樣に舟子の幸福を祝するのであろう。頓て錨下して夕餉に向ふ時や、月は脊山に差出でゝ其の影を水に碎きつゝマストの影を長く水に投ずるである、吾にもあらず苦を出でゝ見上る鐘樓の側に彼岸櫻がほの白い。如何に平和な港ではあるまいゝ。

彼方より雛賣りが來た、三十五六の男の天秤乃後先に張古の人形、陶器の猫ちん等入れてをる。

「お芳さん買ひてへの」、漁夫の妻であろう笑ひ乍ら云ふ。

「二疋許買つて呉れろ」、是は又大平に云ひ捨たなり過ぎて行く。顧すればもうべ僕等が泊つた宿屋は涯の上なのだつた。

春の日溫かに旅心優々、清水の流れ出る處菫咲き。赤き椿の多く咲いてる木薩を行けば鶯頻りに鳴く、此邊から海岸に奇石が見られて岩に碎けて散る水沫も壯嚴であつた。富來村より山に登る處に小學校がある、教室は一つある許りで其海に面せる方に小さき玻璃窓がある、今日は休みでないと見えて小さな頭が幾つも見えた。若し夫れ他日此の校より邦翁の如き英勇を出したなら其紀念として無窮に保存されて其時始めて世人の尊敬を得さうな學校。壓道をぬけ頓て富來町に着き右に橋を渡つて山路に掛かる。夏密柑等買つて持參す。砂中を通せる道所々に農家が立つ。砂の畑に菜の花が咲き桃が咲く但し此の道の長いには閉口した。松露を取つてる小供を見乍ら實達山の麓を迴はつて、先發隊が殘して置いた「四高」なんぞ土中に書いてあつたのに心を勵まされて、畫過ぐる頃村へ下つた。實は地圖上此の村は餘程大きな積りで居た處が案外に少さいので、飯を食ふ家も無く甚だ落膽した、之れにつけても宿屋で貰つた辨當は捨て聞數きものなりとは僕許りでなかつた。

又登る。暫らくにして石を切出してる處があつた、十五六人の女の僕等を見て笑ひ罵るのを聞く。此の石は細かに碎かれて道路の敷石にするのであるらしい。放れ馬の列に出逢つた邊から海が見え出したので、腰を下して先の夏密柑などを食つた。先刻笑つた女連が石を負ふて遣つて來て、色々な事を云つた末に夏密柑一つ取られた。

「旦那さんに禮云はまつしやい」、などと小供に見られたから殘念だつたが、多勢に無勢僕等は怨みの涙を呑んだ。

「何處へ行きまつしやる」。突然すれ違ひに斯う云はれて面喰つたが其の親切に感服して

「黑島です」。

「黑島けえ猶う少し行きまつしやると」、斯う云つたなり行つて終つた。塩を燒く處なるべし今は鎖されたれども夏の夕等昔の歌人に御意に召し相な處。日が海に沈んで星が瑠璃の海と黃金の天の配劑を一層完美ならしめん爲めに其の光を下界に投げた。

宿屋と云へば宿屋なり、土間に入れば下女が足洗ふ水を持つて來た主人は四十五六の太りたる人で、察する處料理など夫妻自ら勞を取るらしい。黑き大黑柱の側きの爐の火の盛に燃ゆたる、之が宿屋とは思はれる筈が無いので、兎に角招ぜらるゝ儘に室に這入つた。湯など勿論無い物ざから村の湯に出かける。足駄を穿かけて三人が、星の降り相な、波の音の近き此の砂村を湯屋に辿とつた時、愉快な樣な、嬉しい樣な淋ゑい樣な、先つ有らもるルストな考を混ドさレエベンゲヒ

ユールが起つた、然し遂には慈しいふ樣な感情に滿されて終つたらしい。注意しないと滑り相な流に膝迄切の湯、是も一つの經驗だと笑ひながら宿に歸つた。今夜此の先きの門前と云ふ處に金澤万歳の興行があると云ふ話。便所へ行く時にとて洋燈を廊下に釣して呉れたのは難有かつた。夜更けて表ての通を歌ひ乍ら行く濱の若者の聲を聞いた。

明くれば四月三日で、即ち僕等が出發して以來三日目に當たる極めて平穏ある日であつた。本道より行けば道路も善し近くもあるが寧ろ海岸を廻つたらばと云ふ譯で門前の總持寺の前を左に山路に分け入つた。總持寺は由緒ある禪宗の本山で越前の永平寺と同格であるとか、過ぎし年の火事に寺は燒けたれども山門のみは嚴めしく殘つて居る。僕等が其前を通過した時、十五六人の法師隊が黑衣の袖を結びて庭を清めて居たのを見た。丸い頭もあれば四角なのもある、小さいのや大きいのや或る者は文覺か獻山の荒法師の樣な顏をしてるし、或る者は繪にある弘法大師か蓮如の樣な顏をしてる。夫で或る友は此處に宿つて其夜哀れな法師の戀物語を聞いたと云つた。墨染の衣に浮身をやつせども、心は佛陀の光明を疑はずとは云へ、朧に霞む春の夜か、陰々の雨に花散る時か、逝き父母の忍ばれる時もあろう、破れた戀の思ひ出される時もあろう。僕等は頓て其處を去つた、御僧達幸に健全あれよ。

山路に掛かつたが最後山許りて、頂上迄登つたら海が見られると思つた考も空想に過ぎなかつた。一体僕が考では此の能登半島なるものは小さく細長いから、兎に角其の脊髓山脈の少し高さうな山に登つたら加賀の海も越中の海も一眸の中に收める事が出來ると思つてた、然し實際地圖で想像する樣な譯には行かない。時には道の分れる處で頸も拗つた事もある。杉の木隱くれに一軒家を見出して、上帝に感謝しあがら火賊退治を爲す武者修業の事などを思ひ出した事もある。折角登つたのを殘らず下つて終つて又登ると云つては造化の不便をこぼしもした。斯くして道々菫の大きなのを取つて互に大きさを比較したりなんかして下り乍ら辛じて海を見た、村の中に庄家の如き家を見。涯の上の家の犬に吠へられて海岸に出たり。此の村は菫色濃き村なりき。僕は之に菫村の名を與ふべし。

銀砂に足を伸して海を眺めた。温い春の日光にいつしか疲も出たと見えて吾にもあらず夢に入つた。其の夢泉川の岸に七年振て佇んだ僕は、此河に對して自己の幼時からの事を聯想してる。彼の黑い瀧神の岩、夫に續いてる竹藪の陰の道を春の夕に飴屋の笛が聞えた事やら。祖母の家を訪ふときいつも渡た森下の橋や、其の時幼うりし僕が母にさへ見違へらるゝ許りの男になつて、再び然も今此の岸に立つたのだ等。僕が此んな事を考へてたとき後に人があつて僕を呼んだので吾に歸れば、矢張此處は能登で呼んだのは啞蟬であつた。

僕等は此の村から直に海岸に添ふて輪島に行けると考へたのだが是は全く駄目だつた。衛生組合長と書いてあつた家で譯を云て賴んだので黑い米ざが兎に角飯にありついた啞蟬所望の鰈も燒いて貰らつた。斯くて此處を出でゝ山路に掛つた。山火事の火の子が帽子に降りかゝつた山を廻り、雜木林に三人別々になつて呼び逢い乍ら初めて旅の苦痛を感ず、五時半頃海を見た其の時の歡喜の叫。思ふに僕等は山路に迷つたのだつた。

此の二三日町らしいものを見た事のない僕等は、兎に角郡役所もあれば警察署もある輪島に着いた時横濱に好く似た町だと迄思つた。湯から出て夕飯に向へる時、何處とも知らず寮歌が聞ゐる。次で橋を踏みならす音。誰だろう、—最も障子に近く居た眞田が障子を開けた啞蟬も僕も之に續いて首を出した。誰だ—誰だ—見る十人近き健兒の一隊なり。山崎か！何んだ中野か—一人が云へば又一人が云ふ。是は菊地ドクトルが先登で寮の連中河野、今井、大田原、武藤の連中で僕等より一日遲く出た相だが到當追ひ着いたと特意なり。宿屋が一杯などで他に宿るべく又も勇ましい歌を歌つて町の角を曲つて行つてしまつた。

「馬鹿に早い奴等だな」。「到當二日で來やがつた」。

東京の兄に手紙を書いた。夫れは一体此度の旅行に就て一言も兄に言はなかつたから切めて能登半島の先端からでもと思つて。

僕等は之から山越へに穴水に出て歸るつもりで其の日は八時過ぎゐ起きた。輪島は漆器の産地として有名だが小賣店は無い、大取引の外小賣の必要は無いと見ゐる。輪島に就て面白く感じたのは其日の市であつた。山の人は野菜に白桃や緋桃など添えて持つて來れば、海の人は魚や貝や海草など賣りに來る、そうして道に店を出して賣る斯くして荷物を金に代へて山の人は海の物を、海の人は山の物をそうして濱邊に山に歸るのである。啞蟬詩ありと云ふ。

穴水より瀛船にて和倉に着いた、僕等は此處に一夜を靈湯に明かして明日七尾を經て金城々下に歸るべく決定した。

（完）

春の夕

古川如翠

犀水汀堤の生樹に青氣搖き、醫王の巔嶺夕雲まさに紅なり。

予書に倦み獨り孤杖を効外に曳きてこの景を味ふ。日は暮れぬ、風は眠り流は靜かにして、天地漸く寂寥。鳥は飛び去りぬ、人また隻影を留めず。俗界の紛擾はつひに吾を去る。是に於てか予は獨り宇宙の懷に在り。予既に塵世の人に非ず、仰で星斗燦たる無限の蒼穹を見、俯して曠茫たる平野の夕を望む、枯羸の身を挺して煩瑣なる人事に堪ゑず疲れに疲れたる予が心身は今やこの莊嚴なる宇宙の大靈に圍繞せらる。言はんか語既に盡きぬ、祈らんの吾が音聲既に絶たり、默々冥想、これ予か唯一の世界、寂然として自然と共に靜まり肅然として天地と共に沈冥す、あゝ這般の消息やこれ直ちに予が宗教の全部、眞箇の感謝唯ゞ此の一瞬に存そるのみ、無限と交り絶對と契る、是に於て乎、あるものは唯だ神卽吾のみ。

吾爾を知る、父の言葉は常にかくありき、今にして子父を知るを得たり、父よ爾吾を知るよ、あれ予が渾身の感謝を表はせる祈なりき。言下靈と靈と相抱き相擁してこゝに温き微妙の接吻あり。あゝ其間何等宇宙の時間（タイム）なく、また地界の空間（スペース）なし、焉んぞ自地生死あらんや。一陣の風薫じてこゝに忽然として吾我に歸る、たゞ夢の如く淡しあゝ夢か、これ果たして夢なりしや。

身は既に暗夜の翼に掩はれつ、月なき一天、星平野に隨つて潤く、其光永〜へに天父の愛を語らぬ。

『我思ふ故に我存す』我が心靈は既に宇宙の靈と融會一体したるもの、また思念なし即ち我存せざりしなり、廣義の死を遂げしあり、而して瞬時一轉我猶ほ在るを覺ゆ、あゝまた何等患難の現家ぞ、先の靈そも何處にありしか。

茲に於て、予、基督の嘗て語れるを想ふ曰く、『我往く所に爾曹往くこと能はずそは我が往く所を爾曹知らざればなり』と、予も亦た或意味に於て同一の言語を發し得るなり。

瞬時の死！『我』念再び火の如く胸に燃ゆると雖ども、一縷の光明は赫々として其か背後に吾を待つあるを覺えき。万有の眞相は眞に解すべからず、而も瞬時の死によりて其か神秘の一幕を望むを得き。西哲嘗て言あり、路傍一片の野花猶ほよく人の發見し能はざる思想ありと。岸打つ波、松嘯く風、そこに遠大の思想は歌はれ、偉大なる天の聲は聞も。潺々として哢く里の小川、娟々として大江に湧きて流るゝ月の影。荒烟たゝたふ平蕪の暮、あゝこゝ、吾人の瞬時の死を遂ぐるの所。アラビヤの沙漠、ユダヤの原野、恆河の流、ヒマラヤの峰、修養の地！、心練の！嗚呼是れ眞に宏大なる神恩に非ずや。

過去二十餘歲、想へば眞に愚ありき。身は神の天地にありながら見る能はず自然の音樂は終に聽く能はざりき、奈何せん、目は已に盲ひて、耳は已に聾せしなり。網々睡過せる半生の予、一蛆虫の夫の如き軀、而も大なる神は猶ほ捨て給はざりき、今日此時、我を此野に誘ひ、温ゐき御口ずから愛の靈漿を味はしめ給ひ、聖なる氣に予を醒覺し給ふ、思へば惠深き神の心！予は渾身の感謝を捧げつ。

「凡そ夢なるものと神に由つて生れ且つ神を知るものあり」人の子としての生命は親之を與ふ、神の子としての生命はだゞ神のみ之を賜ふ。今や予か眠は何來の氣に覺醒せらる、眼少しく開き來れば忽如として此身慈母の懷に在るを覺ゆ、耳纔かに通ずれば幽焉として遠く微妙の聲を聽く、そも何來の氣とは愛卽ちこれなり。予已に愛の生命を享けて第二の產聲をあぐ、而も果して神を知り得べしや。

人の子としての生命は猿の生命、烏賊の生命、將たまた蛙の生命と一般のみ、其死豈何のあらむ。見よ、ナポレオンの死は果たして彼か人格＝眞生命を左右し得しか、歷山の死は共に直に彼か雄志を奪ひ去りしか、ルーテルの死、リンコルンの死、ゴルドンの死、これ等豈よく彼等の人格を滅却し得しや。知るべし、死と雖ども吾人か一度達したる人格をまた如何ともなし能はざる也。

區々たる形骸は夫れ朽ちん、然れとも靈魂ハ宇宙に遍漫す、血肉は夫れ或は乾壞せん、然りと雖とも人格は永く存す。

微々たる一卷の聖書、而も幾千年以來人類として讀まざるはなく、讀んで感泣せざるはなし、知れ、基督の生時は單にヨルガン河畔の小天地に限られたるも其生命は永〳〵へに活如として宇宙に遍在するを見ん。

肉体の死！靈性の向上は汝によりて決して斷絶せらるゝことあらじ、寧ろ却て無限の發達を爲し大なる生命と融會せんの第一歩たるなり。有限を脫して無限に入るの人の子の死！來れ、予は悅んで迎へん。

閑寂たる天地、暗々たる此世の夜、こゝに予、宇宙の大靈に默契したるの時、仰げば悠久たる天空、星光永とはに輝くの所、予は聊か永生の何たるを悟りぬ　（終り）、

故郷の四季

大谷南海子

○春

霞やうゝゝ細やかなる頃幼き童を携へて山路をぞゞろ歩きするいと幽し覺束なくかゝれる山藤の花垣根にもゆる山百合などのいかに艶美なる綠したゝる木影の下鶯の喃々と鳴き渡るなど見るにつけ聞くにつけ一として心を娛むる種ならぬはなしもえ出ずる芝生の上に腰うち据ゑ畫餉の紐をときつゝ目を彼方に送れば堤に眠る牝牛の夢あたゝかにして若菜つむなるらむ杖にすがれる嫗の腰もいとのびやかなり

青空高くまひ上る天子告の音のどけくして草花あつむる乙女子の唱歌の聲しづかなり青き麥紅なる蓮花黄なる菜の花うち交りてうつくしくさながら毛氈をしきたらむが如し歸るさに山躑躅の花など手折りて持ちかへるいと心地よし

○夏

夏は春よりもいとまさりてもかし金石とけて水かれ人々玉なす汗を流す夏の日風清き扇が濱の風光また何にかたとへむ砂白く松青きところ四五の友どもと共にオールを握りボールを飛ばす快さえもいはれず夕つ夕渚に下りて一葉の小舟に掉せば颯と吹き來る一陣の風袖いとすゞしく日頃のあつさもいつしか跡白浪の泡ときゑ去る沖には日井の岬の燈臺北斗の如く陸には海夫の苫屋の燈螢の如し千鳥とびかふ洲崎のかなた白鷗ねむる鹿島のこあた出入の帆影絶間なくして漁夫がすなどる網引の聲かすかなり

晝間の暑さに眠りし如き草葉も夕つ方やう〳〵頭をもたげて元の綠にかへり葉末における露の玉をたづねてかなちこちに飛びかふ螢の光ながめ一入おもしろしあなや自然が造れる山里の風景はなか〳〵つたなき筆紙にうつすべくもあらずあはれ自然の萃は田舍の寂しき處にぞあらはるゝ郭公の聲茅蜩の音も聞くにつけ興多し

○秋

『山里は秋にも殊にわびしけれ鹿の鳴く音に目をさましつゝ』と某の君の咏めるも山里の秋の夜をうつしたるものならん唯にさのみかは「女郎花多かる野邊に宿りせばあやなくあだの名をや立てあん」と小野のよしきといふ人の歌ひしもよく眞の様をうがてり芳しかりし千草あでやかなりし百花も何時しか枯れて木葉とふれたる頃只優にやさしき女郎花あるは尾花の鮮かなる姿をあらはしたる宛然野邊の景色庚申山より峯つゞき稲荷の森のあたり立田姫が織りなす紅葉の錦いとうるはしく丹ぬりの鳥居のやう〳〵愧らひ貌なるさまいとれかし貫之の「白露もしぐれもいたくもる山は下葉のこらず色づきにけり」も滿山黄ばみわたれるけわひ何處も同じ秋の夕ぐれといふが中にも山の風景又掬すべきもの多し葉のなき枝もたわはに蘂せる柿の實をついばむとて四五の烏の

れづ〳〵とびまわる樣又なりおかし

○冬

物のあはれは秋こそ勝れと人毎にいふめれど哀なるはたゞ秋のみやは、「山里は冬ぞさびしさまさりける人めも草も枯れぬと思へば」といふ古歌さへあるものを山やせ水かれ滿山色衰へて寒風枯梢にさけぶ夕あるは一夜が中に野も山も銀の世界と化したる朝の冬の景色はをさ〳〵秋には劣るまじ睦き熊野の浦とはいへさすが冬の最中には古綿をむしるが如き雪とぼり〳〵と落ちて生物息の根をとめ鷹尾山頂白鶴まふ時の物すごさ又おくあはれなり

弦の響

水衣

振返つたとき云ひ知らず涙ぐんだ、

これで丁度七つ、丘一つ越ゑた向の鐘の音が行衛も見ないうすい光につゝまれたさゝやゝなるゝばかり流るゝのであらうと思つた野の小川に、はたときにて、そよ〳〵と春風がいづこともなく夢と歌ふよいのをり、只わけもなく氣が浮き立つて冷のな胡蝶の胸に血を漲らせた金色の翅に飛び乘つた樣な思、指を組んでさて振り返つた

馬子が追分の節、そればかりでは無い先刻遇つたばかりの黑の法衣を着た雛僧

其時は秋であつたのが違ふのみのけふである、と自分は云ひ知らず涙ぐんだ

其櫃をねくつての歸り途、人々にとりのこされて廣漠した野原、檜林を通りぬけた時胸に秘めて置いた細い弦の緒を卷いたのを左手に繰つて一つの端を唇に右手でかろく彈いた

星はもう天に滿々してゐたのであつた

折しも野分の風がすゝきに沈んでさらでも澄み渡つた秋の空に眞珠を轉ばしもく樣な弦のひゞき

彈いて彈いて思ひ込んで彈いた、かよわい弦一筋にどうして弛緩が來ないことがあらう

あからさまに自分は霧吹かうと小川に屈んだのである

再、弦を繰つて氣を沈め右手の小指にかろくおさへたが聞けば遠の方で追分の節、はと猶豫と氣が亂れて何とはなしに行衛と思ふのをねふた

小川を越え畔道を傳つて其聲に辿りあがゞ繁き草を分けて、と見ると今しがたきづきあげたばかりの奥津城、霧にしめつた線香のたなびき、もるぎもせぬ蠟燭の淡い光、朦朧とした紙燈籠……

氣が付いた時は黑い法衣を着た雛僧に手をひかれて居たのである

あゝと自分は小流にたゝずんで昔を呼んで見たがたゞ和らかい春風に思をのせた若草の上をさつと一直線に閃めいて七尺あまり

それは野川に映つた星の流であつた

芦の湖のほとり

山崎麓

（一）

英國なる『カンバアランド』『ウェストモーランド』の湖と山とは、自然のさまの人に與ふる清き饉、殊に豊かにあふるゝとぞ。我が箱根なる芦の湖のほとり、こきうすき緑の袖ながら、白がねなす湖の鏡いだいて横はれる山姫のすがた、あゝ永に忘れじな。

（二）

ある夏にてありき、百合の香たかき山路をこえて、小笹に風たえ、旅人れすがたもなきひるすぎ、友と湖のほとりにいでつ。舟はつまくゝに佇む。傍なるすゝけたる小き店に宿り木の細工物、筆たて、駄菓子など、うすぐらき日光をあびてぞ静かなる。店先につられしは、サンショの魚なりとか、黒き勾玉の形して串にさゝれてあり。きよき谷川にすみ、水に垂るゝ蔓草を鰭にふれさせてあそび、はゞ白き小石を臥床としてやいこひけむものをなど、はかなきことと思ふ間もあらで舟つきたれば乗る。舟こぐは父と子と覺ほし、うすくれなゐの離宮遠くへだてゝきて湖のだゞなかに出づ。

かすかなる櫓の音きゝつゝ船そこに臥して我は思ひぬ。此湖、ふるき昔山の火をふきてよりつくられしとぞ云ふなる。いかなればかばかり大なる力もて山ハ火をふき出でけむ。げに自然の力、自然の心ぞ測り兼ねたる。思ふに神は此湖をつくり出でゝ人を慰めんとし給ひしにはあらざるか。

水も山も清き此ほとり、日頃のなやみむうすれてたのしき夢に入る心地するものを、忘れて池と云ふは是にあらずや。さはれかぎり無き世にかばかり小き我れの、自然の深き心を測らんとするは、百合の根に集くへる蟻の、近き花園ばかりを我が世と覺もるに似たる可し。

あゝさはれ此湖の底には古き杉あまた横はりて殘れりとぞ。罪の幻影我がむねにうつらざる此せつな、水底にくゞり入り杉の根を枕にして永に眠むるも我れ悔いぢな。藍色こき水をうかゞひてはうつるともなき水の彩を我に示さるゝさとしにあらドかとぞ眺め入りし。思ふにふるき昔よりかぎりなき静さに満ちたる水底は今も變らでやあらむ。嘗ては梢にやどりし星の光も今は朝な夕な澄みわたれる水に漂ひては、青藻をくゞり水虫の夢驚かし、猶此古杉にや、さゝやくらん『君湖のそこにくちはて給ふとも、いや若き光もて我は永に君を訪ひまゐらせん』と。

（三）

秋の暮れなりき元箱根に一夜やどりぬ。日入りたる頃湖のほとりにさまよひ出でつ。黄昏のいろは山々を蔽ひつくしぬ。月明かなる丘のほとりを飛びめぐりて西の國の詩人を樂しましむるとぞ云ふなる山鳴、我が國にもあるや知らねど、古き關所のありしほとりに、微かなる小禽の音するは其にあらずや。

かくて山々に向ひたちつくしぬ。悲しき心地とも、嬉しき心地とも知られねど、かすかなるみ空の幻影我が眼にうつり、ふく風に水の香たゞよひ、さゝやくが如き自然の聲きゝ得たりと思ひし間もあらで不圖我が暖き肉に心づきぬ。心づきし時人知れぬ悶ねたねかたかり。思ふに聲なくし

てかきりなく働く自然の力と我が身に宿れる靈の溶け合ふにはあらずや。たとへば深き森のほとりより湧き出づる泉へ、木の葉にやどる白露のしたゝりて流れ合ふにはあらずや。あゝかばかりなつかしきせつなの永に續きたらば人に宿る罪もあらじを。

駒ヶ嶽の頂に迷ふ雲、美しきくれなゐに染みて、古城の石がけにのくれさく椿の花のごとかりしと覺えしもしばし。山のくま昏き淋しさに蔽はれぬ。

Now, with religious awe, the farewell light
Blends with the solemn colouring of the night.....Wordsworth.

水の色はさびたる褐色をなゝ今猶殘る太古の韻、藿の香の如く身にしみぬ。かくて今日の日くれぬ。太古の夜と同じく山の影、星のかげ、三ヶ月のかげ皆水に落ち、今日もくれはてぬ。永遠のひゝき、あたりにみち渡りぬ。

（四）

霧僅にはれし午后、姥子の宿を出で仙石の原をさまよひぬ。ささやかなる黄金の鈴をならせる女郎花、ほの白き房をそよがする花芒なぞかき分けもく。するぞき芒の葉におさゑられても、冷たき石をたよりて唇ふれ合はす、露草撫子のすがたに隱れ、なく音ひくき蟋蟀その小き胸にうつる秋の歌やいかならん。こき紫の絹の冠もてつゝめる頭をのばして光を仰がんとすれぞ、長うのびたる莖の力なく倒れがちなる玉蜀黍、地にうまれたる人のさまはかくてや消えもくある可し。山よりまたも湧き出でゝ霧、襲ひ來て我が行くての野の花、くれなゐむらさきうすくなり、はては消ゐもく。夢をたどる我が思ひこはあまりに嬉しきかな。

見よや、我がたてる野のようゝ低くなれるところ、芦の湖こそ開けたれ。すみわたれる水の色は曉ちかく消ゐゆく天の川のそれに似て、はたまた、森の香に醉ひて世のさげきも知らず歌へる小島の白き胸毛こそ、あつめて湖のいろに比すべかりけれ。

（五）

ひたすら花の香をしたひよる蜜蜂のごと我はもの狂はしゝありぬ。我は唯花野をかき分けて下り行きぬ。我は湖のほとり戀ひしくて何事をもかへり見ざるなりき。芒の葉に足をきり、鬼あざみのとげに腕を傷けたれぞ心にとまらず、今ははれもく霧を袖もてはらひつゝ湖のほとりに出でぬ、波はしづかに岸をうち、藪のげの渡場にかすかなる烟たてるほか、天地に動けるもの我のみの心地したり。

こゝろ驕りたのづからなる興たさゐ難くふと心に何ものか湧きいでし時我知らず微笑みしあり。

我は湖に入らんと思ひしありき。

かく興ずる心地やみがたく遙に傍なる黑き大石に著物をぬぎぬ。

湖に我は入りぬ。小米花の如き水沫たち穩にほゝ笑むが如く湖は我を懷けり。水あさく砂清し、泳ぎ知らぬ我はたゝ蒼白く水をすかせる肌を水底に横へて、みそら行く雲をながめしのみなりしが。

水は耐ゐかたきほどつめたけれぞうれしかりき。この心地たれと共にこの語らむ。なに故ともみづ

のらは知らで花を慕ひよる蜜蜂の心は今の我ありけむ。

花野の霧はれ、山を蔽へる雲はれぬ。麓には放たれたる牛馬の群、椎の實の如く散れる山の上、頂ちかく夕陽の光帶べる富士山のうすむらさき、太古の昔にかへれるが如き赤裸々の我が前に立てり。

はるかなる林の落葉我にさゝやけるにか、花野のくち葉我にさゝやけるにか、湖の底なる小さき砂のさゝやけるにか、太古より生ける我が靈はよろこびの胸に滿ちて、我がすむ可きところを、今此人れ世にて得たる心地したりき。

（六）

あゝ箱根なる蘆の湖、いかばかり偉大なる自然の藝術ひそめるゐや。是より世に戰はんとして出づる我れの、幾度敗るゝも幾度倒るゝとも、此處に力を與ふる自然の清き糧あり。なやみもうれひもぬぐう可き泉こゝにあり。あゝ芦の湖のすがた永に忘れじな。（完）

あ　き

夕づゝ

（新しく盟ひし友に贈る）

寂　莫

八千草香ふ秋の野を
夕の雲をながめつゝ
何とは知らぬ寂莫の

層樓の上欄により
心の醉にまどろみつ
いふすべもなき寂莫の

今やこの世は混沌の
行ゐをてらす月もなく
うれたき胸を抱きては

たとへば園ゐ香も高く
蜜のうま酒分たむと
胡蝶の夢は春の夜も

思へは遠くなやましき

ひとり空しく吟行ひて
つくゞ我を思ふ時
苦しき胸にあふれけり。

旭に照る雪の遠山に
獨微醺をはく時も
重けき胸を壓しけり。

まことあやあき闇なるを
星も見ぬ身はとぼしさに
かこたむ外の術ぞなき。

色よき花も多くとも
翼つらぬる友もなき
あもれいかでか安らむ。

我世の路をたゞひとり

手をとりあはむ伴侶もなく
忍ぶとすれど身にせまる

邂逅

小笹の陰にほゝゑみて
白百合我の見てしより
遙かに森をもれいづる

君を見しより我が思
荒野はるゞ〳〵迷ひ行く
臭わき出る眞清水の

冷たき闇の人の世を
數の中より撰び得し
我が世のはてを照しつゝ

光明知らぬ昔ならば
ひとりわびてもあるべきに

かくて辿らむ我かそも、
あゝ嶮へかたき寂莫や。

ひそかに天を仰くなる
踏み迷ひたる深山路に
灯火得たる思あり。

闇より闇に流れきて
己が命の濁流に
そゝぎ入りぬる心地あり。

ひとりこゐむに我れたゐど
君は眞珠よ願はくは
我が行末に幸あらせ。

よしやもだへにたゐぬとも
君の光を見しからに

忍びかねたる我が思
心に草のもゐてより
朝ゐ夕なにあゐがれて
いくそ恨にひぢくちし

煩悶

神が千ずぢの琴の緒も
たゞうらぶれに夕くれて
君かれもかけ幻に

君の瞳は白銀の
森の陰なる谷川に
友こふ鹿の和胸に

君や白百合我はたゞ
思は遠く運ぶとも
我に送らむそよ風を

せめては君が夢ともけ。
君が情のしらつゆを
深きもたへのたゐがたう
袂抱さて泣きにけむ。

かくまで胸にしまざらむ
悲しき歌になやむまも
くづれもやらず浮ぶなり。

あはれ獵矢と落しきて
己が姿をうつしみて
深きいたでと立ちにけり。

地に伏すしこの卿なれや
たま〳〵吹きてやさし香を
わびくらすべき運命かや。

君はみそらに影清く
我は吹きあるゝ海風に
思は高くもねむとも

悲しきなやみ身をとぢて
ひぢを枕のまろび寢を
たゞ〳〵奇しき夢の間の

赤誠

夕ぐれ椽に立ちいでゝ
そゞを心地にそめなせし
我が赤誠を君知りて

ある日手をとり野を山を
歸さ忘れし夕ぐれを
岸の萌草ふみ分けつ

夕陽輝やく彩の刷毛

永久に輝く天つ星
消ねなづみたる漁火か
天なる星を照さむや。

思ひ疲れし草の宿
いたはる人ぞなけれども
暫時に我を慰むる。

忍ぶに堪えぬ思出の
歌の一首は揃なくも
たゞ忘みことば忘れめや。

共に樂しくさすらひて
水音清き犀川の
流に沿ひて下りけり。

西のみそらに流るれば

遠くむかぶす天雪の
をちの森かげ夕くれて

あゝうるはしき夕げしき
夕陽の光を身にあびて
熱誠はとりあふ手によりて

若草香ふ夕風に
彩さま〳〵の夕雲の
亂れもやらず浮べるは

盟の船

遙けき遠地にかゝやける
ちかひの船は今岸を
あゝ此船の行すえに

海風あぎて鏡なす
金絲銀絲をみだすとき

五百重は染みて紅や黄や
紫うすくこもるあり。

君と我とはもろ共に
かはすことばは短くも
互の胸に通ふなり。

醉ひし心地に彳めば
影をひたせる水の面に
見よやまばゆき愛の宮。

希望の星をしたひつゝ
世の荒涙に漕ぎ出なむ
神、願はくは幸あらせ。

沖邊遙かに月かげの
さやけき光あふぎつゝ

かたみに手をばとりかはし
もとの情をあたゝめむ。

曙、彩のむらくもを
もる〻旭の影うけて

紫そみし沖つ邊に
珠を亂せる浪の上を

ちかひの船は帆をはりつ
希望の岸に進まなむ。

さはれ遙けき世の浪路
時には伏せる巖あらむ

あるは暴風雨に狂ふべし
よしや櫂折れ舵くだけ

船は本の巢と舞はむとも
力あはせて進まなむ。

君得て我は今强し
ちかひの船は乘り出でぬ

勵みあひつ〻櫂にぎる
腕の力をこゝろみむ

猛らば猛れ世のあらし
狂はゞ狂へ世の船路。」

破簑

水衣

江畔の賦

笈を遠き國に負ひし友の盲目て歸りたるに悲しくて

そとかろく唇に
盃あげてさゞなみや

みたびにやらぎ若き血の
おもひにのせてみだれつゝ

あら吹くややわ風の
とゞめもあへぬ笹葉舟

むれゐの小雲みんなみの
江にうつりてはひかりかな

かすかなるれとなひは
みだれにすさぶ笛の音か

秋の夜、月にひゞかせて
ありし流轉よいまいづこ

あけぼののみぎはには
薔薇のかをり無き人の

うれひにしづむ額白う
あだし露ぬふ花れ衣

靜かなる江のほとり
うつりもゆくかけふの日の

彩なき鐘にむらさきの
裾濃になびく山の靄

靜かなる江のほとり
まだ消えのこる遠の峰の

雪こそあはきわかやぎの
春とこしへのいろならめ

しばらくは花の露
散らして醉はむ歌やあに

白晝に星の流れては
あゝ興云はぬ人の子よ

× × × × ×

さらば友いざさらば

さらばふたゝび思ひ出の
浮世の夢を夢にして
たゞ月影に江のほとり

うたはゞや日をくらし
なげきの友よされば
とて
掬する袖に水の香の
淡げにのみはあゞざるを」

春にこそ花咲かめ
さらばと友のゑみし眼に
たゞいたづらの露消ゆて
ゆくへの雁をながめしか

× × × × ×

戀に醉ふ歌の子よ
なさけには之に眠る子よ

盲目の友がれもひには
ひゞきもたかしあめ天の征矢
天の征矢憂しやわれ
こぞ來し途をたゞひとり
たどりつゝ江に來てみれば
世は讃嘆の春の聲

獨興

常緑の松常住の月
歌にふす人の子はこれ
籠になく秋のすゞ虫
天馬ひとたび砂蹴れば
紫雲は遠し淨界の黒土

花笑めば花散れば
誰が忍び音

瞬けば夢よりさめて
我よいまこゝに
いざ叫べ名に白き鳩

思ふは豈時のいさを
闇の領わせまる夕づゝの
たゞ彩もなく響く
寂寞の鐘の音の
嘯聞きてほゝゑむごと

落葉霜に閃めく秋の亘
蹣跚として破翅の蟋蟀
雛鳥の目をまぬかれて
しばしと宿りし履のかげよ
噫春の胡蝶といづれ

弱は夫れ遂に強の食
ろも神のみのりか
三軍散て小風に舞へば
やがて荒涼無緣のさけび
昧者皆これ

見ずや君北天暗雲のもきゝ
聞かずや漠野万馬のいなゝき
射んとせば先紫微の東壁
突かんとせば先玄象の金鼎
寧ろをの子がわざ讃せむかな

袖の涙

住の江

我れ古里を出づるとき、
ゆゝしき君は我濕車を、
確と見つめて其目には、
無量の露をやどしけり、

雨降りぬとて止ぬとて、
花咲きぬとて散ぬとて、
送り給はるたまづさは、
朝な夕なのともなりき、
嗚呼慕はしのわが君よ、
君はなさけを我に向け、
我はこゝろを君に寄す、
しかのみならず父母も、
もるし給へる中なるを、
如何なる風の吹來しか、
初めは假のいたづきと、
おもひたものも末遂に、
肺のやまひとあり果て、
頃しも秋の末名つがた、
落ち葉窓うつ夜半の頃、
風や稍名をわたるらむ、
厂やみ空を行くならむ、

桐の一葉のはかなくも、
憐れ露とゞ消えにける、
海やま百里へだつ身の、
いまわの際にも逢ず、
うらみは長し苔のした、
又逢ふ術もあふぎらん、
思ふ度ごとかこたれて、
讀み行文字の文よりも、
名げきは袖の涙なり。

荒鷲

外圃

吹きすさむ、うらる風、
羽にしめて、夕、荒鷲の、
三千里、雪を越名て、
翔けくだる、亞細亞の東。

鳥の肉、そは朝の餌、
人の血、そは夕の酒、
紅に、嘴染みて、
雲を裳く強き翼の、
旅のつかれ、梢に下りぬ。

『我はそも、諸鳥の王、
我啼かば、草も聲なく、
我飛ばゝ、人も色なし、
眼の光、鳥を落し、
爪の響、岩を碎く、
萬生、みな、我が犧牲、
我はこれ、諸鳥の王。』

星の光、雪の闇、
風高き、梢の上、

荒鷲は誇に醉ひて、
奪ひたる鳥の大巣に、
温かき眠、むさぼる。

其夜夢奇しかりき、
其夜夢恐しかりき。

北の空、海のきわみ、
うゞやきし七つの星、
いつしかに天を離れて、
舞ひ落夢ぬ、雪の上。

くすしや、星結ほれて、
白銀の劍と成りぬ、
劍、やがて、雪を剖きて、
記しもく、血潮の文字、
『汝はもろ鳥の王にあらず、

王は東洋天にあり』

忽ちに、血潮燃えて、
白雪の眩ゆきまでに、
明らけき、焔の文字、
『汝は諸鳥の王にあらず、
王は東洋の天にあり』

火は消ぬ、雪の闇、
星は先ぜぬ、空の闇、
荒鷲は只わなゝきて、
おそろしの眼閉ぢぬ。

蹄の音、雲に響きて、
日の神の天に聲あり、
『我はそも万靈の神、
我はそも、諸鳥の王、

來れ、荒鷲、汝惡魔、
我に黄金の征矢あり、
罪惡の翅、射つて落さむ』

荒鷲は夢より醒めぬ、
おそろしき神の憤怒、
かぎりなき罪に怯れて、
我昔、悔ゆる折しも、
曉方の霧を破りて、
銃の音、森に響きぬ。

荒鷲は枝より落ちて、
胸の血潮、雪を染めぬ。

東の、群雲割れて、
紫の島のみろら
白銀の弓とり持ちて、
日の神の笑みて立ちぬ。

花笠

水　衣

悲しけれ　ばかくと名づけし『花笠』のせめては更はらへ春雨
そゞろわれ緋縅ぬぎし落武者の風なく梅の散るにまどひぬ
をしければ小琴になげしすみれ草しづ枝にかゝる春あはき夢
此子十五孤城に立ちて入日射し羽鳴のひゞきやがてのけふか
詩にわびて袖にかざして遠見えて扇に立ちし影にかくれぬ
をかしけれと花をま指に結びてしあらはは何の人のさかしら
靜けさにまどひて聞きし葦の江やかずにさばきしさゞ波の音
橋半ば露に落ちて我そゞろ駒の嘶春わかき朝
偲びつゝうしとも云へぬ春の水に色こそかはれ緋桃ひとひら
桃われの君は桃野に旅の人白きが中を緋桃雪ふる
幸問はれ秋にもあらでさびしみと氣つきて羞ぢし其夜朧夜
いとゆふのみどりのうげに藤の更さてもやどりは君が一そほひ
歌にたまへ曲に彈かむの櫻月夜かげなき征矢のみそらまひゆく

鐘の音にかへりみすれば人よ我よ花笠すてし野路のさびしさ

「人はそれよ花笠たびし野にまよふ」たゞひとりある我とれば
「いたでなればきのふにすぎし幸ぐおほき」み聲に床の小琴ひゞきし
きぬのねとたゝうすかなる初秋の柴垣そこにむせぶすゞ虫
淡き燈に、と胸をつけば小櫛落ちて鬢のほつれを蝶まよひきぬ
曉の帳に雲のもきゝのすがた見ればやがてむなしきよべの夢かな
繪筆染めてやがてきこねむ夕なれば「我病みぬ」とはわだと思ひしを
蝶が身を君と思へばいまさらに墓守る我のたもとをかしき
昔とへばみぎはのまゝの白さもり詩えぬにあきし君がれもかげ
雲散りていまはの星の朝の露よそれ斷岸にすみれ花咲く
小琴抱き泣きてし人の玉の緒は畫筆すてたる星月夜かな
たゞ見たるやがてとめたる今ぞわぶる心ひとつに花のかはらぬ

あかつき

秋風

やむまなき時の双輪は音もたてず忘れしひまもはやめぐり行く
白梅の香あたゝかき小座敷に繪絹をし展べ筆初すも
世のさがは唯大神の聖旨ぞと思へばいとゞやすき我が世や

新春の光長閑けき朝ぼらけ團欒たのしき平和の家
秘文の封じをしきる心地しぬ年新玉の今朝の思は
天地の影新なるけさの春何とは知らぬ胸のときめき
八重雲をわけ昇る旭の尊さに神世の夢の忍ばるゝかな
文机に落つる初日の輝きに醉へるが如き福壽草の花
若水の清きにうつる我面の笑はづかしく袂かざしぬ
若水を硯にうけて歌思ふしばしを啼きぬ籠のうぐゐす
柴の帳かゝげて日のみ神いま海原を分けのぼります
手鞠つくと振の袂になやむ子が京の訛ををかしときゝぬ
人の身は地に曳くものゝ影に似て心の光消えば消えなむ
經の聲寒き聖人か庵にも紅く咲き出し老梅の花
我歌を風にうたひて遙かにもかへす木魂にきゝとるゝ夕
みいくさは義の爲正のたゞなるを盾つくしこの夷ぁはれや

冬

外圍

たき捨てし門の藁火に雪ふりて梅が香寒し驛路の朝
身の老を机によりて思ひ居れば椿にかゝる夕暮の雨

うらぶれて獨り戸に倚り紅梅のこぼるゝを見る黄昏の雨
紅梅ゐ尼の昔を問へな君今は燒きたる薄墨の日記
ゆたに散る緋桃白桃身に浴びて奏でむ、君よ、琴を貸ずや
若草の廣野にひとり我立てば夕紫の雲に神みる
日の子、われ、朝東の雲に下りて、空の大鷲征矢ひきて見む
愁そを詩に慰めん夕暮の星の明りに梅手折る君
罪多き北の夷の血潮もて染めむは雪のあまり清けき
山法師は貝を鳴らして過ぎにけり月に遲れし白梅の村
窓あけて柱によりて詩を思ふ醫師老いけり紅梅の雨
鐘遠き比叡の峯の紫を夕山茶花の椽に立ち見る
椿れちぬ、京の一日さびに堪へで佛を刻む眉白き君
南蛮に今宵宿直の人や誰ぞ白梅月夜歌は召さずや

破調

蜜に醉ひし蝶の行方をおつかしみ雨の花野に獨り佇む
歌に更けてかへさの月のほの白ら人美くしき紅梅の宿

雛棚の燈火しめりて白桃に雛のさゝやく聲をきくかな
手取川ながれたゆたふ淵にし越二十里の春の歌きく
雪殘る越の遠山靄に消ゑて雨にくれゆく春の手取川
夜は明けて白鳥めぐる印度洋日進春日煙長らもく
いくさありて荒れし一村花落ちて白壁破れぬ春の夜の月
兄君の門出の宴の燭あかう姫ヴイオリンに進行の曲

狂ひ

日は暮れて三島へ下る坂三里敷石寒く芒亂るゝ
戰神に祈る明方梅咲きて白鳩とびて馬標の動く
看護をば妹に托し寒き朝を秣刈るべく出分け入りぬ
駒つなく庭の緋桃の亂れけり今日積上の木曹殿の召
別れ行く峙の松に佇みて秋豐かなる我が村を見し
月清し金物白き將一人敵の夜營の笛聞くかな
町見えて信濃へ下る茶屋の朝赤き木の實に置く霜白き

半脱

あやや雲

山陰にさき出ゑ花は日もさゝず訪ひよる蝶もなくて凋まむ
ともすれば胸の血潮のわきたちてものおとにつけ忘れがたの君
大地の噴き出す焔にもたえぬごと胸の悶の靜めかぬたる
此思せめては蘭の香に匂ふ君が枕に夢と通ひぬ
我にわく血はさながらにとりあひし君かみ手よりみ胸に通へ
賜はりし花輪の色ハあせむとも捨つるに惜しき君かうつり香
此ちかひさゝがにの糸の細くとも風に破れむよはきにあらず
上らむは同ド岸邊に大み神ちかひの船に幸あらせ玉へ
世の涙は天をつくとも君と我れ助けあひつゝ岸にすゝまむ
我思君よそれとはいひかねて紅き夕日を君にたゝとく
川の瀬の清きにふける君の額に夕日のかげは花と亂れき
手をとりて二人語らふ夕ぐれを夕日てりそふ犀川の岸
君と我共に夕日のかげあびてとる手さなからかくてあらなむ
とりあはむその手をよしやひねむとも情よいかでさめはつるべき

わ　か　父　は

其　月　　あ　　き

わが父は嗚呼わが父はわが父は呼べど叫べどだゞ松の風
わが父は眠るが如く逝きましぬ見果てぬ夢を人に殘して
淨樂の花の下にやいますらむいまはの顏に笑の見えてき
男の子われ泣かとすれど姉妹が咽ぶ涙に又さそはれつ
ともすれば夢かとばかり幾度かいましゝ父の部屋をのぞきぬ
枯れ果てし草葉に雪や積るらむあゝわが父のねくつきどころ
寒ければ寒くますらむ暑ければ暑くまさむと亡き父れもはも
ましまさばかくこそはせめかくせましかくせまほしと思ふことゞ
今は春はやも若草生もらむか霜に見すてし父のおくつき

紫　會　詠　歌

其　一　　人

京の君を京へ送りて近江人粟津松原三井の鐘きく
魂祭る嵯峨の小家に宿かりて五山の鐘に夢破られつ
加賀の山越前のやまはえあれや神手づからの冬の粧ひ
鞍ヶ嶽は靜かに暮れて暾道水田十五丁冬の月うつる
馬子の歌車のひゞき森に消えて「左京道」の夕さみしき

梅薫る月の一夜を旅にして讀書さみしき大原の里
褒美得つゝ弟七つの文着きぬ梅の十五夜雲白き頃
友二人去りて淋しき夕まぐれ歌誦し居れば霰たばしる
二十妻憂悲かくさむのほゝゑみに戰功立てよと我言ひ兼ねつ
肉に狂ふ荒鷲追ひて筆とりて詩人とわに平和うたひなむ
この春を黄金山のいくもるさこの夏遼東露の人なけむ
埋火に山家集讀む冬の夜を鉢叩行く朱雀野の庵
湯の宿の金屏ふりて年暮れぬ病もつ身に思ひ出多き
湯の氣立つ軒の小梅を寒雀蕾落してつぼみついはむ
夜芝居の臺詞きこゆる村のはづれ湯の氣しめやかに冬の雨ふる
巖の松に調はふりぬ神さびぬ三千年の新年の大八洲
うま酒を能ふ疲れし御社の翁に強いて新年を祝はむ
朝東風に神の春日野雲はれて翁と媼若菜つむなり
鬢の毛に朝東風かろき春の野に里の新妻若菜摘むなり
松に水に天正の調今もあり史に古りさる加賀の大町
うらぶれて恨みて京を出でしかど尚野の雨を笠に惱みぬ
二十とせの驕る望を地になげて今日野の川に行く秋を謳ふ

人は遂に運命のきづな遁れ得じさらば君泣け我も亦なかむ
冷さは我が手に未だ血あればゞ石と霰をつらしとやはいふ
落つれども木の實はやがて芽を出す力なきかな世のうらぶれ男
強いられて屠蘇をさけたる新妻の春髪かほる早梅の窓
鈴鹿山酒つみて行く馬子の子が節面白き春の追分
温泉の宿の盲の歌にあはれ深み酒冷ゑにけり春雨の宵
唐崎の松面白き雪の夕鴉のとま船唄ひながら行く
橇引きて歸る子雪に見ゑずなりて靜に暮るゝ蝦八丁
ぬれてゆく柩小さき夕堤柳やせたり枯芦の雨
三代の跡や夢なる江の北に夕雛が子か悲笳を奏する
いとし子は戰に出でゝ母一人眼を病む窓に白き梅さく
都よりおこせし文を披きゆけばこぼれ出にけり梅のひとひら
湖添ひの新懸村に移り住みて二畝の水田に種下しけり
刄うつ槌の音止みて日はなゝめ小鍛冶の梅に小鳥囀る
看經の鉦の音絶ゑて尼寺の雪解の庭に梅の花ちる
出征の今宵別れの盃に泣かじと思ふ小さき胸かな
山賤が荒鷲屠り斧さげて家路を急ぐ山嵐のあ

秘め置きし父がかたみの劍太刀鞘拂ふ可き秋は來りぬ
年たけし翁の曳ける橇ふりていや降り積る越の白雪
砲車行く野路の若草あれにあれて鍬持つ農夫獨いたみぬ
いとし子が軍に向ふ門出にはこゝに愛ありこゝに勇あり
師の君に歌捧げむと貴人の佇む夕春の月出でぬ
銀燭の裳裾にゆるゝ宵深し奏宮五千春の顏
紫の木の間に沈む夕日影つがひの鴛鴦の影うすれゆく
胡笳止みてうらみの血潮湧き來り遊子むせびぬ長城の北

春季雜題

○　紫　雲

葵垣や薪積んである背戸の雪
薄雪や河岸黃昏るゝ船簿
木場の雪船のまゝなる裸木や
枯草や無名の古墳見いでたる
鄙歌に豆よる胡座の小春うな
落し錢闇に手探る千鳥かな
寒月や新島守の歌に泣く
御手洗に靑錢沈む落葉かな
山茶花の垣あり灰が捨てゝある
城の雪松に見ゐ透く櫓かな
芥火や犬時雨行く市の夕
朧夜を狐出るとよ小松原

朧夜や小皷洩るゝ何御殿
葵簀茶店蛤を燒く柳哉
朧夜や小櫛を拾ふ長廊下
白梅や醉さめかゝる月の欄
聖廟や篁つゞき梅の奥
白梅や築土の長き士族町
塗りたての壁や梅散る朝の雨
春雨や紙結びある乙女塚
春雨に雪駄わびしき裳かな
春の夜や禿千鳥の文使
春日影目ばたく籠の鸚鵡かな
石牛の背に落花や御賽錢
江南は霞みて松の並木かな
友禪や梅にも名ある水の鄕
胞衣塚の草はそどりに躑躅かな
宮の灯や花散る宵を笙の聲
菜の花や日傘干したる裏畑
殘雪や茶の木植ゑたる屋敷跡
舞々乃裳に輕し春の風
利根白帆菜畑に續く筑波かな
白梅の庭あたゝかく鶴の夢
春風に櫓太鼓の遠音かな

○　外　圃

凩や博覽會の跡を吹く
醫をやめて貧に老いけり鯨汁
菫漬けて鐘きく奈良の夕哉
夕晴れて雪に灯ともる機場哉
襟卷と語るトンビの車上かな
院の灯や高野の杉に霙ふる
寢ころぶや小春の椽のあたゝまり
水仙に寫眞飾りし机かな
墓裏に鮪ちよろつく落葉哉
冬の蠅老いてます〳〵愚なる哉
凩下りて湖寒き城下かな

四五人の兵卒走る時雨哉
冬枯や茶店の跡の捨筵
金時もまゝりよりけり藥喰
病間に小春の庭を眺めけり
家低き松に鳶啼く時雨哉
琵琶抱いて近江へ下る霜夜哉
冬籠る我を愚といふ鴉かな
水仙や寺の一間の古錢會
菊枯れて池の魚皆沈みけり
宿直のする事も無き暖爐哉
雪れろす人に日の入る城下哉
戸を閉ぢて木枯遠き讀書哉

○　K・N生

揚がらざる凧の糸の目縺れけり
切凧の尾がからみたる榎のな
猿曳の背にねる猿や戻りみち
彈初やぷつと切れたる一の絲
春寒き雨が降るなり勝手口
型を切る染屋の椽や暮遲き
白絹に花の數縫ふ日永哉
友禪を晒す流や日麗
縫箔の孔雀の羽に春日哉
箔を塗る三尊佛の春日哉
草餅や桃の花咲く淨土寺
門前の花賣切れし涅槃哉
水取や白梅遲き二月堂
茶摘歌夕日傾く頰冠り
摘草や木の根にはたく下駄の土
駒鳥や夕月かゝる榛の枝
陽炎や椽へはきたす糸の屑
芝能や片袖くらき捨篝
千郎の袖に燃えたつ薪哉
壺燒や津々浦々の夕霞
鳩に豆やる子や花の淺草寺

江上の月傾きて獺祭
筆筒に蝶の舞ひくる社殿哉
行雁や一夜を契る水無瀬川
春の野や黛青き少納言

○

四高俳句會（時習寮）

川上や鴨群れさわぐ森の雪　啞蟬
塀にかこむ林檎畑や雪の山　同
憂き宿や此頃雪の洛外に　五洲
雪白く鳥の古巣につもりけり　同
南天の實一つこぼれ雪の庭　寒郊
雪の野や月に馬賊の驅けり行く　同
海賊が港を襲ふ吹雪かな　紫嶺
開眼の供養もなくて雪佛　同
塵塚や雪に啄む鷄の息　紫雲
樂の音や雪の朝の大悲閣　同

○

赤裸々の鏡に對す初湯かな　紫嶺
年玉や十年品を改めず　同
初風呂や穢を厭ふ大和人　浪奴
年玉や長者が家の床の上　同
兵營に初湯浴みぬと日記かな　寒郊
初風呂や大工の弟子の博多帶　啞蟬
年玉や京の伯母より草双紙　同
硝子戸に屠蘇の息吹く初湯哉　同
磯の家の新潮汲んで初湯かな　紫雲
新しき桶積んである初湯かな　同

○

草に寢る白き兎や春の水　啞蟬
竹の根に鮠つゞひけり春の水　同
竹垣や雛砂なむ春の水　同
春水や湖來の里の十二橋　百合
もるやうに船のせて行く春の水　同

流れ菜や家鴨眠たき春の水　浪奴
酒料に机賣らばや春の宵　同
澤蟹の穴這ひ出でゝ春の水　五淵
春の水驢馬の荷とさて渡しけり　紫嶺
抽斗へ凧糸しまふ机哉　同

蝶々の標本作る机かな　紫嶺
春の日や竹の机の餌摺鉢　紫雲
羽根洗ふ孕雀や春の水　同
春水や夷にとつぐ駒の姫　同

西湖游草跋

村上函峯

嚮者。長崎詩友岡田篁所寄レ書曰。予今在二金澤一。金澤有二北方心泉師者一。善レ詩好レ游。數游二清國一。蓋二一訪レ之。余始見二師於文字禪洞一。談及二西湖一。師曰。予數游二西湖一。每レ游有レ詩。無慮六十餘篇。請二諸名士評一。名曰二西湖游草一。子幸題二一言一。余受讀レ之。湖山雲煙。奇變百出。西湖十景。悉聚二筆下一。使二余恍若二親游一。夫西湖之勝。宇內所二艷稱一。題詠綦多。白樂天蘇東坡名篇。傳誦至レ今。我邦人游二西湖一。作レ詩爲レ卷。得二諸名士稱揚一。實以レ師爲二嚆矢一矣。足四爲二藝林一吐三レ氣矣。昔人云。居二廬山一。不レ知二廬山眞面目一。唯樂天東坡詩諸篇。眞寫二西湖眞面目一者。此卷開二西湖生面於二公之外一。是篁所之所三以許二師善レ詩也。此卷熊佩玉序レ之。鐵梅藹人有二題詞一。余嘗官二于長崎一。與二諸子一游。今亦題レ之。眞知二文字因緣不レ淺矣。次以爲レ跋

書盡忠報國榻本後

同

庚子之夏。大學生林安繁。自二上海一歸。示二余岳武穆墓盡忠報國四大字榻本一。字大六尺。雄健中含二溫藉氣象一。猶二武穆之爲レ人也。武穆以二四字一涅二其背一。明人洪珠。因書二四大字一刻二其墓側一。佩文齋書畫譜有二其傳一。官參政。善二行草一。可四以知三其非二凡筆一矣。武穆以下復二中原一滅中國讐上自誓。使二其行レ所レ志。則國讐可レ報。中原可レ復。而業垂レ成。爲二秦檜一所レ陷。天下後世。莫レ不二憤怨切齒一焉。今也時勢大變。清國爲二列國一所二窺窬一。覺羅氏之社稷。岌岌乎其危矣。使二武穆見レ之。其感舊爲二何如一。余見二此榻本一。大有レ感二古今之變一。因借觀數日。書レ此以還　安繁號二穆齋一。加州金澤人。

漢詩

敏庵

甲辰元旦

千門萬戸旭旗新、　椒酒杯中笑語親、　聞說北夷破交誼、　皇軍近日發橫濱、

除夜感

天地悠々委此身、　東馳西走任浮淪、　星霜二十邯鄲夢、　惟惜徒然染俗塵、

海岸嘱目

杳々過鴻落日邊、　長風万里去來船、　天涯無際天耶水、　前岸青螺入渚煙、

加書

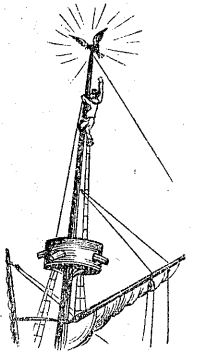
童顔不老是神仙、　五鳳十麟侍壽筵、　誰識斯翁風骨健、　却令龜鶴羨長年、

懷友人某在于米國、

膠漆多年結好盟、　河梁分手若爲情、　故人異域信來晩、　枕上相着夢亦驚、

秋夜

楚水吳山三五秋、　蘭檣桂棹白雲遊、　碧天滄海皆吾有、　孤雁一聲塵事休、



雜報

報國義會

砲火は遂に交へられたり、正義の旗は神や護らむ。北辰校裡半千の士一片愛國の念やみ難く、發して是に報國義會となり、三月十二日之が開會式を靜勝館に開く。會則左の如し。

報國義會規則

第一條　本義會ハ目下ノ國情ニ鑑ミ奢侈ヲ戒メ勤儉ヲ勵ミ盡忠報國ノ實ヲ擧クルヲ以テ目的トス

第二條　本義會ハ北辰會々員ヲ以テ組織ス

第三條　本義會ハ軍資及恤兵費ヲ獻納シ其他臨機適當ノ行動ヲ爲ス

第四條　本義會々員ハ七八兩月ヲ除キ毎月十日ヨリ十五日迄ニ金五錢ヲ代議員ニ納ムヘシ但數月分ヲ前納スルコトヲ得

北辰會特別會員ノ前金ハ別ニ定ムル所ノ方法ニヨル

特志者ハ本會ニ於テ設ケタル獻金箱ニ特ニ金員ヲ納ムルコトヲ得

第五條　本義會ニ左ノ役員ヲ置ク

義會長　一名　會計掛　三名　協議員　若干名

協議員ハ北辰會副會長理事及各組代議員トス

第六條　本義會重要ノ事件ヲ處理スル爲メ協議會ヲ開ク

協議會ハ義會長及ヒ協議員ヲ以テ組織ス

第七條　第四條ヨリ生スル獻納金ノ處分ハ之ヲ義會長ニ一任ス

第八條　本義會々計ハ特別會計トス

第九條　本義會ハ平和克復ニ至ルマテ繼續ス

武道記事

崇高ならずや芙蓉八朶の峯、其麓に武勇の國民住む。清麗ならずや琶湖洋々の水、其濱に剛毅の國民住む。何者の癡漢ぞ、好むで此民を煩はさむとするは。

東亞の天風雲急也。劍を執つて立つは此時ぞ。一つの聲は歌ふやう、その昔我等は勇士なりき。二つの聲は歌ふやう、今ぞ我等

は勇士なる、いざや力を試しみむ。三つの聲は歌ふやう、何時かは我等も勇士ぞよ、我等が功績は全土を越えて輝かむ。

◉柔道大會

至誠堂に紀元節の祝賀式が終つてゝら此柔道大會が無聲堂に開かれた、折惡しく雨催ひがしたので人の集りは少し遲かつたが、一本勝負が半に達した頃には堂内立錐の地が無いやうになつた。

一本勝負が終つてから五人掛り勝負があつた、此五人の敵を受けて優に餘裕があつた勇士は芝沼榮作君である。

當日の番組は次の如しである。

巴投、大外刈返（神保 金衛／多田 淳良）　大外刈、卷込（山内 喜之助／招沼 廣三）

腰投（藤井 正太郎／高橋 克己）　掃腰（加藤 周藥／板垣 贊造）

浮腰、浮腰（山下 潤藏／富永 福司）

〃（細貝 五十吉／根津 金吾）

掃腰、大外刈（横田 克己／藤車 奥田 祐安）

躰落、大外刈（中野 並助／關谷 吾一）

巴投、大外刈（小山 永顯／藤澤 廉之助）

浮腰、浮腰（服田 美濃吉／加藤 虎之助）

引分（有村 愼之助／松本 信一）

卷込、卷込（河原 繁／吉澤 謙太郎）

背負投（中出 郁次郎（二）／下村 茂）

引分足掃返

裏投、〃（安江 正城（一）／長屋 修）

卷込、卷込（加藤 正一郎（二）／加藤 完治）

押込（小野 徹昭／吉澤 謙太郎）

背負投

大外刈、腕逆（吉田 宗一（專）／池田 泰次郎）

躰落（宮永 三郎／小川 堅二）

巴投（赤松 祐之／堀田 相爾）

大外刈（高田 澤智／青廊 永明）

移腰（白上 祐吉／櫻井 正矩）

浮腰、浮腰（嶋田 胴三郎／小澤 民治）

引分（前田 滿多雄／青山 暢性）

講道館投之形（白石 喜之／芝沼 榮作）

背負投（市村 祥（專）／伊藤 直）

大外刈（大樋 知新（一）／倉内 松藏）

引分（本 正生（二）／西 成伍（二））

大外刈（山田 毅一（二）／加藤 鐵之助）

引分大外刈（安達 登喜雄（二）／中村 正）

背負投、〃（澤野 彦次郎（一）／白石 喜之）

引分背負投（高井 魯一（專）／芝沼 榮作）　巴投、巴投（盛岡 宅平（一）／小泉 禎次）

（專）は金澤醫學專門學校、（一）は石川縣立第一中學校、（二）は同第二中學校。

勇士の面々どんな活動をなしたりを畧述して見よう。

富永君に山下君、富永君は敵と向ふや否や、さも容易さうに之を浮腰に投げた、美事投げたと思ふと再ひ浮腰に投げた、其活きの神速だつたとは何に譬へむ樣もない、敵と組んでから再度に敵を投げる迄僅に五秒を要したばかりであつた、君は寒稽古に勵むで大に其腕を鍛ひ上げた人である今日の美事な勝も之に負ふ所少くないと思ふ。服田君に加藤君、服田君は四級の老武者で背負投ハ其意得とする所である、加藤君は斯道に於て餘り優つたといふ方でも無い、人は君の爲に今日の勝負を危んだが、然し悉く之は思ひ違ひであつた、服田君得意の技は少しも出ない却て加藤君の活きは目覺しい程で、先づ浮腰に敵を挫き更に又之にて敵を敗り終つた、加藤君の爲には實に祝す可きであるがまた服田君の爲に涙無き能はずである。有村君に松本君、此番になると場内忽ち色めいて來て二人が立つて組むや拍手の響は四壁に起つて暫しは鳴り止まなかつた、其躰格といひ技量といひ二君は實に好敵手を得たものと謂ふ可しだ、其態度の高雅にして男らしきは稀に見る所である、譬へは、赤地の錦の直垂に黑糸威の鎧着て金作の太刀を帶き、連錢葦毛の馬に金覆輪の鞍置いて、鎧踏んばり立ち上り大音聲によばはりたる某の源氏の若武者と、朽葉の綾の直垂に萠黃威の鎧きてあしドろの太刀を佩き、滋藤の弓を脇に挾み甲を脫いで高紐にかけ、黑き馬の太う逞しきに鑄縣地の鞍置いて騎り出でたる某の平氏の公達とが、左近の花を散らしつゝ暫し刃を交へしが、

春の日永も彼方の峯より暮れそめて敵も味方も退きたれば、またの逢ふ日を誓ひつゝ馬首を廻らせりと聞くそれにも似たるかな。花々しき合戰の後に白石君と芝沼君とが莊重に講道館投之形を演じた。吉澤君に河原君、河原君は近來餘り無聲堂に出入せぬが三級の勇士、之に反して吉澤君は日頃稽古に熱心なる末頼しき若武者で今度新に四級に昇進せしめられた、然し河原君とて別段技が下がつたわけも無いから吉澤君に取つては少し重荷であつた、果然河原君は卷込で一本を占めた、然し吉澤君は少しも氣を落さぬ渾身の勇を振つて美事背負投で前敗を償つた、さて勝負はいづれに歸さうか滿堂の人は片唾を呑んで其一擧手一投足に注意した、殘念にも天は此若武者に幸しなかつた、あつと思ふ間に敵の敗る所となつた、由來奇麗な稽古だと言はれた河原君の事とて無理な事なしに敵を厭したがまたも卷込であつたのは少し惜しい氣持がする。布村君に伊藤君、布村君は小がらの男であるせいか背負投は其得意とする所である、然し伊藤君は新に四級に進んだ程の勇士であるから中々其手に乘らぬ、が一度危い事があつた、布村君が勢込んで背負ひ込んで將に君が大地ゐ投げ出されようとした其刹那、幸なる哉布村君の手が弛んで君は九死に一生を得た、斯くして一本勝負といふ宣告も受け遂には後一分で引分といふ聲ゞかゝつたが、伊藤君は遂に敵の背負投に敗れんければならなんだのは殘念であつた。大槌君に倉内君、大槌君といへば第一中學に幼年組が出來た時其筆頭であつてまだ二七の愛らしい御曹司であつた、然し今は一軍の副將として其力優に虎髯虬鬚の大の男を取り拉ぐに足る、倉内君は天來の雄略を無聲堂裡に鍛ひ上げて今は四級の列にある剛勇の士である、大槌君は大内股に屢失敗つた後遂に大外刈で美事敵を敗り終つた、然し勝敗は時の運である倉内君はよし今日の戰に敗れたにしても其活き振りの雄々しさは武士たるに耻ぢおいものであつた。安江君に長屋君、長屋君は平生無聲堂に出入するとが少ないが母校に在つた折に勵んだものと見えて其技は確に四級の人々に劣らぬ、然し安江君も中々侮る可からざる敵である、長屋君も苦心の樣子が見えたが矢張君は優勢であつて一度は裏投で一度は抱き込んで胴と咽喉とを〆めて敵を倒し、猶綽々として餘裕があつた。本君に西君、西君は腰投で美事敵を敗らうとしたが惜いとには深すぎて宜しく敵に幸した、暫しする間に組んだ共に〆めを取らうとあせつたが思ひ切つて立ち上つた、すると本君は巴投に西君の丸い躰を數尺の外に投げ出さうとしたが君もさる者巧に避けて遂に引分となつた、勝負を見なんたのは殘念であつたが敵も味方も十分其秘術を盡し敢て遺憾はなかつた、山田君に加藤君、共に六尺に近い大の男で必死と戰つた有樣は實に當日の一偉觀であつた、山田君は隼の飛ぶが如くに空を切つて大外刈をかけ、しまつたと思ふと加藤君はすかさずこれの返しをしたので勝敗無くしてすんだが此瞬間は實に人をして手に汗を握らしめた、山田君は足拂を掛ける風に見せてすぐ引き返して大外刈と來る、そして之が君の唯一の武器で此の外には手も出なければ足も出ない、然しこんな淺薄な計畧にかゝる樣な愚物が何處にあらう、況んや加藤君は常に之を利用して二本ばかり續け樣に敵を大外刈で倒した、味方の衆は手を拍つて喜んだが「一本」といふ聲は遂にかゝらなかつた、彼れ此れする中にどんな隙が出來たか殘念にも加藤君は敵の大外刈に倒れて「一本」といふ聲は高く響いた、響い

たも道理、誰も斯樣な勝に此宣告が聞かれようとは夢にも思はなかつたから、然し致方ない加藤君は涙を呑んで去つた。僕が一言する、實を避けて虛を擊つは兵の形で兵は敵に因つて勝を制す可く敵をして虛ならしむるには須く計を用う可きではあるが、遠謀を缺き深慮を缺き直に敵の發露する所となるが如きは寧ろ始より用ゐざるに若かざるのみならず斯の如きは兵を用うる者の耻づ可き所である。小野君に吉澤君、共に新進四級の猛士である、吉澤君は一度腰投に失敗つたがさきに河原君を傷けた得意の背負投はまたも成功して小野君は美事投げ出された、一度投げられた小野君の勇氣は更に百倍し來り敵をむづと組み伏せて袈裟固めに固め込んだ、いかな吉澤君も之には抗し難く十秒の後ささの背負投に而かも手痛く報ゐられた、さて愈々勝負を決せむと爭つたが善く奇を出す者は窮りなきと天地の如く竭きざると江海の如しで、奇に富んだ兩君の事とて何時果つ可しとも思はれず遂に後日を期して相別るゝとなつた。安達君に中村君、安達君は二中の御大將其腕前は數度の合戰に人の認むる所である、中村君は新來の士で斯道に携はるに至つてから日もまだ淺いが其頑丈な二十貫もある躰格と虎をも搏たむ怪力とはやも君をして安達君と相對せしむるに至つたそして此大敵を引き受けて悠々迫らず敵をして名を成さゞらしめた技倆は我も人も驚かざるを得ないのである。吉田君に池田君、吉田君は醫專校の比倫ない勇將で常に無聲堂裡に輸贏を爭うて我軍れ將士を惱す者である、暫し戰ふ間に腕の逆を取り更に大外刈に我を敗り悠然として去つた、池田君は新進四級の猛勇であるが立ち技でい敵をして功名を得せしむる虞ありと考へたものか臥技に於て勝を制しようと勉めた之も止むを得ない事であつた。澤野君に白石君、立ち上つたが二人とも容易に手を出さない、手を出したかと見ると白石君は得意の帶を持たうと幾度か試みた若し君にして一と度敵の帶を取らむの敵の生や累卵の危きに在りともいふ可きである、然し澤野君も其處に失念は無く常に巧に之を避けて辛くも其生を續けた、二人は少しもあせるとも無く又無理をするとも無く實に正々堂々と戰うた誠に勝負する者は斯くあり度きものである、我の術は巧であつたが敵の謀が深かつた故か無念や我は〆められた、騷ぐな騷ぐな敵の虛を見るに敏き我將いりで敵を衝かで止む可き、さはれ天の利我に幸せざるを奈何せむ、再び敵の背負投は我をして立ち難きに至らしめた、我爲めに涙無き能はずである。高井君に芝沼君、芝沼君は今曉の戰に四人を倒して更に五人目の敵を敗らむとして無念や引き分けられる我校有數の猛將、其傷未た癒ゑざるに醫專校の勇將高井君を敵として再び戰場に立つ其勇氣や愛す可しである、敵の乘ずる所となつて背負ひ樣に投げらるゝや勇氣頓に倍して獅子奮迅の活劇を演じた、敵は得意の跳腰に我を敗らむとすると前後數回常に我の避くる所となつて遂に果さず却て我の大外刈に美事刈り倒されたのは衆の歡呼せざる能はざる所であつた。盛岡君に小泉君、軍鼓の響矢叫びの聲は坤球を搖かし蹄の塵煙簇り立つて天をも蔽はむ其の中に入れ亂れたる敵味方、死して譽を殘さむとかたみに勵まし戰ふ隙に、仰ぐ御空の月の船藍碧なる海に浮ひ出た、同じ野原のつゞきなれど此處は遠く離れた岡の麓物凄き程の月の光を浴びながら互に鎬を削るは誰れあろう、彼方は勇武無双の聞え高き一中校の總大將此方は雄畧千古を曠うする我の一軍の旗頭、既に立上つたが容易に組ま

ぬ兵交はらむとして戰旗動かず二龍野にあり腥風天地に滿つとは正に此事の、組んだ愈々組んだ、小泉君は臥技に勝を制せんと欲したらしかつたが、間髪を入れざる間に敵の虛を見出して、臥技は變ずて巴投となり敵はどうと投げられた、美事！と叫びも得ぬ間にまたも巴投の一本敵は數尺の彼方に打ち投げられた、拍手は急霰の如く降り喝采は驟雨の如く飛んだ。

輸贏は終り大戰は其局を結んだ、勝つた者は甲の緒をしめ敗けた者は捲土重來を期して歸り去つた。

當日進級した勇將猛士の芳名を掲げよう。

小泉　禎次

右三級へ昇進

池田泰次郎　石田　濟　伊藤　直

矢口　長三　河野　喜藏　栗本　快一

大和田信吉　加藤　完治　小林儀一郎

倉内　松藏　中村　正　小野　徹昭

西　成伍　吉澤謙太郎　下村　茂

右四級へ昇進

○劍道大會

時や來ぬ、旌旗は高く天を蔽ひ貔貅は動く岡の頂麓の野、戰塵簇り起ると見ればはや矢叫びの聲高し。人と生れて武夫たらバ死して甲斐ある身なる可し。

二月十四日の朝露散らし夕の日影沈むも知らで、力のかぎり戰ひし、いづれ劣らぬ勇武の士、その名をこゝに記るすも我等が譽なり。

面、小手（佐々波與佐次郎　倉内松藏）　胴、胴（鷲尾正吉　田中八百八）

引分面（松橋好次郎　竹尾秋助）　小手、小手（山崎亮五郎　辰巳英一）

突、小手（大田原清美　矢部友雄）　胴、小手（山内喜之助　栗本快一）

胴、小手（萩原清次郎　吉澤謙太郎）　小手、面（中村正　小和田嘉一）

小手、面（芥川均一　國峯專吉）　小手（吉澤謙太郎　藤澤廉之助）　胴、胴（桐田春吉（師）　篠原定吉）　面、小手（木曾淨專　鈴澤壽）

面、面（久田芳太郎（一）　大脇賢一郎）　小手（岡嶋友三郎（師）　江川義雄）　面、面（赤土佐兵衛（商）　金吾）

小手、面（玉川英一（師）　赤松祐之）　小手、面（河南孝允（二）　根津一正）　引分面（石橋　靖）

面、小手（敷田雄登吉（二）　石黑文吉）　突（小原外久（二）　篠原定吉）　引分小手（香川先生　石川先生）　一刀正傳無刀流組

胴、面（川端義作（師）　石黑文吉）　面、面（河南孝允（二）　高木靖彦）　小手、面（高橋克己　鈴木五右衛門）　胴、胴（吉澤謙太郎　藤澤廉之助）

面、突（小川堅二　見間芳郎）　素面試合（佐野先生　神保金衛）　突、面（大桑祥（商）　江川美雄）　突、突（稽狩善助（專）　神保金衛）

小手、小手（高澤冠一（二）　赤松祐之）　小手、面（榮作（商）　鶴見節三　内田）　胴、面（四郎（一）　和田豐作　栗林）　胴、胴（一二三仙太郎（一）　藤田圭太郎）

面、小手（三百菊幸吉（師）　栗林豐作）　面、面（赤尾肇三（專）　胴　泉崎三郎）　引分小手（福岡捨雄（專）　胴　飯森梅男）　引分面（河南孝允（二）　高木靖彦）

突、面（眞舘保（一）　關谷吾一）　突、突（石橋三也（專）　千秋寛）

此外稽古數番

（師）師範學校（商）商業學校（一）第一中學校（二）第二中學校（專）醫學專門學校

佐々波君倉内君、佐氏は寒稽古に皆勤して其腕を磨きたる勇士、倉氏は柔道部新來の驍將、其技に於ては人を驚かすものあれども、好漢惜むらくば未ざ劍を知らざる也。松橋君竹尾君、松氏は校中第一の長軀六尺を超ゆると更に寸余、刀を交ゆるや猪進敵の前額を破る、竹氏此勢に挫けてまた施す可き術を知らざるもの〻如かりしも、更に秘術を盡して防戰最も努め漸くにして敵の鋭鋒を避け得たり、然れども竹氏が一と度は面を結び直し一と度は胴を締め直したるが如きは、其不用意の甚だしきものにして、また戰士の最も忌む可き所に非ずや、單に面を擊ち胴を切るが如きは斯道の敎えむと欲する所にあら

ず、若し劍を執る者の精神に締らざる所あらむか下手の藁り人形とえらぶ所無き也。佐野安麿先生神保君、先生言を發すれば必ず當今學生の元氣衰へたるを嘆せざる無く、常に之が矯正に勉め殊に武技を奬勵せらる、然れども徒に言議するは先生の好まざる所なれば自ら無聲堂裡に斯道を勵まむとせらるゝは年來の宿志、今日の素面試合は實に之れが發動にして我校武道の復興に與ふる効果少小にあらざる也、兩雄袋竹刀を携へて場に上るや拍子の響は急霰の如し、先生先つ敵を呼んで上段に構へ神氏は之に應じて青眼に身を固む、ジリ〳〵とつめよる兩士の凄まじさ滿堂の人をして息の根を絶たしめぬ、虛空の一閃、先生の劍は美事神氏の胴を掃ふ、と見れば神氏の劍把は辛くも既に之を支へたり、あはれ無念と引き返へしざま發矢と擊てば神氏の眉間鮮血滴るを見る、タヂ〳〵と思はず引退きたるも、斯くては武士の譽を傷けむいかで報ゐで措く可きと、決心の色面に表はれし神氏は、猛り狂ふが如く掛聲諸共擊つて下せば、氣の狂ひか腕ふるへて、刃は敵の肩さきを削ぎ大地を破つて碎けたり。桐田君篠原君、桐田氏は師範校當日の先陣、些か其任の重きを感ずたるか愼重の態度を以て敵に對す、其最後の胴は眞に敵をして堪へ難からしめたり。大桑君江川君、江氏もとこれ温厚の君子、常に燈下書を繙いて古人と親み月夜水邊を逍遙して人生の窮極を思ふ、然れども一と度劍を執つて立つや勇氣勃々禁ずる能はざるもの〻如く敵を見ては怒髮天を衝く壯士の慨あり、果せる哉、一刀擊下敵の額を破り其咽喉を突き、敵をして再び立つ能はざらしめたり、猪狩君神保君、猪氏は醫專校の勇士、猪氏の肩さき神氏の前腕薄手の傷は數知れず、苦戰力鬪敵は神氏の鋭鋒に倒る。岡島君江川君、其先鋒桐田君は美事敵を破りて勝鬪を擧げたり、我若し敗れなば何の面目ありてか君に見ゆむとの念胸に燃えたる岡氏も、劍を執りては敵を知らざる江氏に對しては些か氣遲れの感無くむばあらず、殊に氏は不幸にして短身其成功や到底望む可からざらむ、さきに一たび敵を破りて勇氣更に揚りたる江氏の切先鋭きと譬へむものも無し、大喝一聲また一聲、はや敵の額は傷を以て被はれたり。里餘を歩みて氣息奄々恰も半死の老翁の如く、戸外にあると數時間忽ち藥餌の助を借るが如き柔弱婦女子の亜流、少しく吾輩の言を聽け、人間元來書を讀む可く讀まば須く萬卷を讀破す可し、一二の書を散見するが如くむば寧ろ讀まざるに若かざる也、面色は菜葉の如く躰は薄の如くにして、到底幾許の書をも讀破し得ざる汝等は爾等は宜しく讀書を廢す可し、之を廢すると共に暫く山海の靈に浴し、是に再生して初めて我無聲堂に來れ、其時に於ては我無聲堂喜んで汝等に敎ゆる所ある可し。某君某君、劍を執りて立つ者は須く一氣に敵を破る可し、渾身の勇を振つて擊下せむか、敵孰んぞ支ふるを得む、某々兩君少しく思ひをこゝに致せ。鶴見君内田君、内氏誤つて劍を落とさる然れども鶴氏は之に迫らざりき、是れをこれ宋襄の仁と謂ふ、敵の抗し難きを見て自ら劍を敗むるは或は武士の情ならむ、然れども未だ敵の力衰へざるに於ては這般の猶豫は斷ずて無用、敵を敵として戰ふは却て敵を尊重する所以と知らずや、和田君栗村君、栗氏は面を切られ胴を拂はれ敵をして名を成さしめたりと雖も、奮鬪の狀は誠に會津武士の子孫たるに耻ぢさりき、殊に一擊にして敵の劍を掃ひ落し直に之を組み伏せたるが如きに至りては、直に男子の面目を損せざるもの也。一二三君藤田君、一氏は川君、

小手に得意の士、藤氏の用意周到なる巧に之を逃れたれども敏捷なる一氏は遂に再度胴を切つて功名せり。香川善次郎先生石川龍三先生、當今運動の術發達して其種枚擧に遑あらざれども、眞に確固たる精神を有するものに至りては武道を措いて他にあらざる也、球を擊ち救を投ずるが如きは巧は則ち巧也、然れども之が爲めに自己心靈上に幾何の得る所かある、之に反して武道は其主眼とする所一に心靈の活動によりて徒に人を擊つが如きは其敎ゆる所にあらざる也、而して心靈の活動は延いて肉体の活動となる、心靈の活動身体の活動、やがてこれ『人』の活動にあらずや、吾人が窮極の目的は一に『人』の活動に在りて存す、而して武道は之を吾人に敎ゆるものなる以上は吾人が斯道に勵むは當に然る可き所也、然れども當今輕佻の風學生界にも浸漸して今や深く膏肓に入らむとし、無聲堂裡眞に無聲の觀あり、夫れ然り、今日に於てこれが救濟の術を講ずるにあらずんば、北辰校裡永へに健鬪叱咤の聲を聞く可からざるに至らむ、而して北辰校裡の寂寥はやがて日東帝國の元氣衰滅を意味するものに非ずや。嗚呼吾人豈に獨り我校の爲めにのみ悲しむと謂はむや、香川善次郎先生は故山岡鐵舟先生の高足、さきに劍を携へて北陸勇武の國に遊ばるゝや、日々劍を提げて我無聲堂に敎導の任に努めらる、先生の技神に邇づるは夙に天下の認むる所にして殊に其心事の高潔なる宛然古武士に於けるが如きは、能く我校武道の衰頽を救ふに最も力あるものたるを信ず、既に此良師を得吾人が大に神身を錬る可きは此機にあり、要は唯堅忍不撓以て尊師の厚意に背らざるを期す可きのみ、兩先生が精神を込めて試みられたる一刀正傳無刀流組の目錄は左の如し。

一刀正傳無刀流組目錄

一ッ勝。二本目。三本目。下段ノ霞。脇搆。二ッ勝。陰刀。下段ノ打落。棄身。乘身ノ一ッ勝。下段ノ付。中星眼。折身。摺上。脇搆ノ打落。本生。上段ノ霞。拳拂。浮。切返。左右拂。逆拂。地生。寄身。星眼拂。卷霞。卷返。引本覺。相下段。撥。裏切。長短。早切返。順飛。拔須飛。詰ル。ヲシ身又ハ。越身

河南君石橋君、石氏は嘗て第二中學にありて神速の技人を驚かすものありし驍勇の將、河氏は當時石氏の旗下にありて常に戰場に殊功を立てたる剛毅の武夫、而して河氏今や同校斯道の御大將たり、石氏其技に於て必ずしも河氏の下にあらざれども河氏頃日の進歩や實に石氏をして無限の感あらしめたるや疑ふ可からざる也、態度嚴かに立ち合ひ一刀は一刀より激しく擊つ電光石火の活劇はさながら鬼神の鎬を削るに似、鎧袖ちぎれて天に飛び果ては劍も折れむとす、折から高き叫び聲、待たれよ暫しと馳せくるは誰ならむ、卯の花威のやさしの公達、紫匂ふ袂のひまより兩雄微笑を洩らしてぞ別れたる。眞館君關谷君、眞氏は第一中學第一の勇士其技の老巧成熟誰か之に及ぶ者あらむ、關氏は我校新來の猛將其技の神變不測誰か之れに及ぶ者あらむ、今や兩雄陣頭に表はれて龍爭虎鬪の大活劇を演せむとす眞に天下の偉觀也、眞氏の態度や從容迫らず毅然驚かず恰も旗鼓堂々堅を擂き銳を振かむとするもの、如し、翻つて關氏を見れば其平生憤を發して驀來するに似ず、唯閉息して自ら衛り依て以て萬全を持せむと計るもの、如く思はる、果然、大風一陣敵は猪進して我が急所を襲ひ、我の亂るゝに乘じて更に我を衝く、眞に一氣渾成、關氏遂に再び立ち難し、眞氏必ずしも優れるにあらず關氏必ずしも劣れるにあ

ちず、見よ關氏の遠征するや常に百戰將軍の桂冠を戴き來るにあらずや、一勝一敗亦これ數のみ未だ以て其眞價を疑ふに足らざる也、然れども關氏にして此に一獅子吼するにあらずんば、鼎の輕重或は楚人の侮を防ぐ能はざらむとす。石橋君千秋君、石氏の斯道に於ける唯輕妙を以て評せば足る、千氏は實に渾身之れ膽其一刀一擊はよく龍虎を摧くに足る、之を聞く一たび京洛の水に梳づるや義仲はまた木曾山中の驍勇にあらざりしと、石氏の如きは恰も此義仲の徒か、千氏の敵にあらざるや知る可き也、然り千氏の怪腕敵を衝いて立つ能はざらしめたり、快又快。

當日の番組は之を以て終りを告げたり然れども將士の餘勇猶未だ竭きざるものあり、是に於てか香川善次郎、柿田信行、吉見彌五郎の三先生は場に出で諸生をして稽古をなさしめたり、吉見先生は既に齋々老後を樂む身しゝも其劍を執るや矍鑠として壯も及ばず、諸生内に省みて耻づる所無き能はざりき。

大戰は終りて戰塵漸く收まらむとし、日は落ちて晩鴉歸る。成名將士猥りに勝を誇らず、失脚英雄徒に敗を悲しまず、俱に劍を携へて堂を下る。

此日寒稽古皆勤者の勞を慰め且つは其出精を勵ましむが爲め各々竹刀一本を授げらる。

又新に級を進められたる者左の如し。

關谷吾一

右三級へ昇進

神保金衛　江川義雄　田邊邦平

右四級へ昇進

織田祐蒲　赤松祐之　高橋克巳

辰己英一　内田節三

右五級へ昇進

明治三十六年第十一回秋季

陸上大運動會記

白嶽山頭白雲起ちて河北湖畔秋風戰き、天は愈々澄みて菊香益々高し、校庭活氣炎々として鬱勃天を衝かむとす、此時にあたり一大揭示は我が扣所に飜れり、身を金石とけて水かるゝ酷暑に練り、氣を天地閉ぢて白鶴舞ふ嚴冬に養ひし六百の健兒は欣喜雀躍胸をたゝいて喜び腕をなでゝ笑ひぬ。委員は東馳西走其の勞苦をわすれ勇士は狂して其の鐵脚を撫せり。

砲聲一發、更に一發、

十一月三日の天地は此砲聲と共に破れたり、鳴き渡る鳥に「アホー」と罵られ隣の雞に起きよとさそわれて、我も今朝はさすがに六時を合圖にはね起くれば、下宿の女主はいぶかしき眼もて我をながめつゝ、「ああた恐ろしい夢でも見ましたか」と。

雨戸一枚押しあくればさらぬだに清きこの頃の空今朝は殊の外うつくしくして、一片の白雲なく東の空いと赤うして今や出でむとする朝日の光いみじうまばゆし、軒端にかゝる日の丸の御旗靜にたれて徐にけふの佳辰を祝ふに似たり。」

大國旗ひるがへる校門を入りて左に折るれば一大綠門あり、三部館といふ内部には幾條となく万國々旗を吊し科學の標本を陳列して茶菓を供し、且つ導きうつ案内し頻りに客を引かむとす、悲いかな今年の今日は昨年の今日にあらず雨にぬれてかげ入る人たえてなく幹部は手を拱いて無爲にくるしむ樣「客なき店の手代の如し」とある人は惡口したり。

運動場の中央には一大輪柵をめぐらして勇士技を競ふ舞臺とす、中央には校旗高く雲表にひるがへり、之を中心として四方又万國々旗を吊せ

るは何となう心地よし、柵の北側紅蔦纏はる巨榎の蔭天幕一段高くして會長席賞品授與席委員席等を設くると例年の如し、場の西北綠松影濃やかなるところ一小亭あり法文亭と號す、前には時節柄幾十の芳菊をならべ内には數十の卓をすえ茶をすゝめ菓子を供へ得意の口辯を弄して客をまつ、一見公園内に設ける茶店の如く出入の遊客頗る雜踏す。

更に眼を金城の方に轉ぜんか、閣上の部旗は高く聳ゐて天を衝かむとし城外の堅壁高く長くして万里の長城を欺かむとす、名けて二部館とす、あゝ阿房の宮殿はかくも宏大なりしか太古のピラミッドハかくも豪壯なりしか、内部には又一大パノラマあり、頗る妙をきはむ觀客入るを知りて出づるを忘れ館内爲に立錐の余地なし。

午前九時來賓すでに席にみち縱覽席又寸地を餘さず、高帽禮服のた役人あれば頭冠りに草鞋掛の稼人あり、金緣烏打の紳商あればねじ鉢卷に法被脚胖の職工あり、知事男爵あれば素町人あり、丸髷の奥樣あり、肉屋の下女あり、蝦茶式部あり、流行兒あり、獨人あれば英人あり、佛人あれば米人あり、老幼男女貴賤貧富偉人凡骨いづれもみな其業をわすれて天長の今日をことぶくかといとうれし。

委員すでに地位につきて準備全く整ひし時競技係は鈴聲高く開會を報じぬ、輕裝したる第一回の勇士は續いて顯はれぬ、抽籤によりて順次已に定まり等しく皆左足を出發線上に置く、此時万人の眼はみな競技者の上に注がれたり、白勝たんか赤かたんか、黃かはた青か、用意の聲と共に体は等しく前方に傾く刹那、銃聲一發耳底を劈けば砂を捲き地を蹴り風に乘じて走る、鳴呼何ぞ夫れ壯なるや。

うくて豫定の順序もて次々と競技は行はれ、健將勇士相つぎて得意の技を爭へば、遠きオリンピアの昔も忍ばれ武神茲に降りて援け給ふの觀あり、思ひ起す去年の今日そも如何ある日なりしぞ運動まさに中ならむとするや一天俄に暗くして妖雲とび雨滴雷々として怪風怒叫し柱は折れて地に敷き紙旗は飛んで天に舞へり、幾万の觀客或は時習寮に入り或は靜勝館にさけ走るあり倒るゝあり笑ふあり怒るあり子を尋ぬる母あれば友を求むる乙女あり、西に東に南に北に狼狽雜踏を極む北陸の天地裂けよ碎けよとつめ合ひし觀客數分時ならずして蜘蛛の子の如く四散し又一人の影を止めず我が運動會は寂々の中に葬られ了んぬ、而して今年の今日は如何、知らず如何なる神の我等をねたみ如何なる神の我等に幸するか。

競技に勇壯なるもののあり骨稽なるものあり、汗を握らし唾を飲ましむるあり、腹をよらせ頤を解かしむるあり、スプーン、サック戴囊は是れ多く噴飯に價すべきもの、武裝二人三脚の如きは其佳なるもの、二丁競爭は奔馬の飛ぶに似、四丁競走は猛虎の威あるが如し、一周又一周長蛇の趨くが如きは夫れ一哩競走ゥ、喊聲とゞろき拍手雷の鳴るに似紅白の紙旗の飛ぶ樣は源平の合戰の如く一瞬又一瞬滿場の健兒をして覺えず手に汗を握らしむるものは責任山の如く千鈞の重さ其双肩に落つる各部撰手競走なりき、而してマルスの神の寵厚は一部二部に厚かりしかはた又三部にアポロの神の保護なかりしか、名譽ある撰手競爭の月桂冠は一部の頂頭におち二部の胸間に輝きぬ風馳雷逝ライン内に突入する武者振何んぞそれ勇ましき、揚々たる其風姿颯爽たる其雄孝三部の戰將果して如何の感ありしか。

かくて順を追ひ次を重ねて茲に四十有幾回の競

技全く終る、時に日は全く西山に落ちて金城頭上晩鴉ねぐらを求むるに忙はしく四顧漸く蒼然たり、月は冲天になしと雖勇士の胸間賞牌星の如く輝き、柵内數十の篝火晝を欺くばかりなり、此時隙曉たる一聲の喇叭は暮靄を破りてひゞき渡り六百の健兒一大圓陣を造りて盛大なる天長節祝賀會を開きぬ、「君が代」「國の光」の合唱は北陸の天地を震動せしめて勇壯凛烈譬へんに物なし、天を焦せる篝火の下一小折詰を手にしたる時の嘻さ忘れんと欲して能はざるなり、忽ち見る平和歡樂の神は徐に降臨し一掃以て殺伐紛亂の禍害を斷つを、折しも篝火漸く消えんとして尾山城裏夜陰寂々秋冷肌に迫れば勇士は三々伍々相携へて散ドぬ、時既に十時。茲に驍將勇士の芳名を載せ當時の光榮を新にせんと欲すれ共悲い哉記錄は何れにか紛れて再び得るに由なし乞ふ之を諒せよ。（南海子）

學窓漫言

一、新らしき年は來れか、望多き年は開けたり、滅したる過去に對しては追想懺悔し、新らしき未來に向ひては前進す、是れ正しき理なるか、人は年の初めに目出度しとよぶ、唯無意味に之をいふか、否然らず、此際たる過去幾千の罪惡を悔ゐ、來るべき未來に於ては野に芳香を放つローズの花の如く、天に輝々たる輪月の如く、清く潔く其身を保たんことを思うて目出度といふに非ずや、果して然らはニュー、エアの使命また重んずべきかな、基督曰く悔ゐ改めよと、是れ新年の大覺悟に非ずして何ぞ、

一、嗚呼今や日露干戈を交へ、劍光閃く、吾人日本青年果して如何なる覺悟をか要す、日露問題は明に政治上の問題なり、而して此戰たるや一時的のものに非ずして永久的のもの、兩國の伸縮消長は是に依て決せらる可きものなり、實に世界の大戰爭なり、此勝は果して何によりて決せらるゝか、劍の力に依るか、否、艦數なるか、否、全く氣の優劣に由る、一氣の成す所金石亦透る、いかに銳刃あるも堅艦あるも之を用うる士にして氣に乏しからんか、勝何ぞ望むを得ん、戰の勝は心靈の深底に横はる、故に徒に刃に據るべからず、艦を恃むべからず、日露戰爭の勝は遠きにあらず、此心靈の中にあるなり、心なる哉、靈なる哉、

一、我邦古來特有の一大精神あり、名けて大和魂といふ、此ものたるや、秀でては相模太郎の壯舉となり、集りては德川三百年の泰平を生み、發しては赤穗四十七士の義となり、凝つては正成の忠となれり、其他仲麿の斷、源淮后の孤忠一として此光明の餘焰ならざるはなし、近くは日清の役、日清事件に於て能く我威光をして赤髯奴輩に感受せしめしは全く此力のありしに由る、昔は花は櫻人は武士として歌はれし武士の芳名もまた此魂の胸中に溢れかりしが爲めなり、實に此魂は我邦男子の花なり、然るに明治の御世となり、古制の一變とともにまれ此魂薄らぎ行かんとするの感あり歎かざるを得ず、洋風固より摸すべし、されど我國粹は棄つべからず、善取惡捨は是れ喋々を要せざる所なり、何等の愚ぞ、此貴ふべき國寶をすてゝ徒に西洋の虚光に欺かるゝとは、今にして大覺悟をなすに非ずんは遂に臍を嚙むも及はざる悔に達せん、

一、學問の目的は人材をつくるにあり、徒に書中の文字のみを覺るは死せる學問なり、死せる學問なふは毫も貴ふの要なし、かゝるものは一も國家に益なく、社會に利なし、遠に犀川に行きて投死して可なり、嗚呼人生五十蟲爾として蛆蟲の如し、蚯蚓の如く、遂に北邙山下一片の白骨に化す、憐むべきかな、殊に今日の世界

は人物の世界なり、活用の世界なり、もし徒に本箱と相撲を取り、字引と組打せんとするものあらは是れ數世紀前の動物なるを以て、早く墓中に入りて古老と相語るべし、何ぞ吾人二十世紀の活人と相晤するを得ん、我校の現狀果して如何、此死學に汲々たるものなきか、此數世紀前の動物なきか、吾人最後の斷案を下さんか、曰く我校生の殆んど全くは死學に志しつゝあり、數世紀前の人と化せんとしつゝありと、若し吾人の言にして非理と思ひ浮ばゝ、三更人なき處に於て沈思熟考せよ、必ず其結果大なるものあらん、嗚呼我校六百の健兒、否凡兒よ、吾子は何の爲めに學ぶか、其理を知らざる何たる愚ぞや、宜しく夢中より出で、犀河の清流に眼を洗ひて吾人の警むる所をきけ、あゝ活學問なるかな活學問なる哉、

一、我校は由來乾燥無味何の興もなしとは全校の健兒の嘆ずる處、其局に當るの士之を輕々に見るべきことならんや、是れ實に教育の大問題なるを奈何せん、或は一人の議論は時に理に戻ることあるも六百の口より出づる言豈非理といふを得んや、是事たる當局者固より一考すべきの問題なり、されど想へ是くの如き中に生活する生徒諸子はまた何故に自ら之を正すの勇を產出せざるか、元來興とか不興とかいふ言は心的作用より發するもの、諸子にして興を得んと欲せは到る處興あるなり、諸子等は未だメンタルの快を求むる法を知らざるか、固より我校には外部より之をせしめらるゝことあるなし、果して然らは自ら奮起一番之を求むべし、我校には宗教的會合には福音會あり道友會あり、此等のものは諸子のメンタルの平安を求むるを得る機關なり、苟くも自ら嘆ずるの士は此等のものを利用して以て教育の不完全を償ふべきあり、若し此二會を好まずとせは更に他に會合を設けて可あり、聞說頃日メンタル修養の目的を以て會を設けし有志ありと、吾人は此等の會の益盛に起らんことを希望して止まざるなり、

一、抑演說の要は吾人今更喋々喃々するを要せず、何となれは諸子に之を說くは釋迦に說法の感あれはなり、苟くも吾人にして將來世界の活舞臺に立ちて已が所見を實行せんには吾をかからざるべからざるなり、此器にして不十分なゝんか、遂に衝天動地の名論卓說も十分に其功を得ずして了らんゝ、而して其事たるや必ずしも法學文學に限らず工理醫農業總ての學科に於て其必要を見るなり、吾人往々二部三部生諸子が、演說如きは我輩のやるべきことならずといふを聞く、何たる誤言ぞや、口は豈に一部生のみ用ふべきものならんや、固より一部生には殊に缺くべからず、されど他部生も決して之に劣るべきに非ざるなり、近時我校の演說部は日に月に衰へ、先頃の會には聽衆僅に二十名の奇觀を呈せり、之を以て見るも如何に我校生諸子の之を輕視するかを証するに足るなり、是れを以て堂々たる第四高の演說會といふを得べきか、あゝ吾人と同志のものは深く之を考へ、之が隆盛を期せざるべからず、

一、我校演說部と同じく雜誌部の不振もまた甚しいかな、既に各期に發刊せらるゝものを見るに何れも見るに足るべきもの少なく、加ふるに其投稿者は一定せるの觀あり、既に吾人は此部もまた生徒間に輕視せらるゝを感ず、殊に二部三部の諸子の筆を染めゝれざるは如何なる理ぞや、若し其理にしてさきに演說部にてなしたる理と同じとせは益其愚を笑はざるを得ざるなり、嗚呼苟も將來大事を成さんとするの士、起つて北辰誌上に健筆を振へよ、諸子は果して自

ら恥ずるの感なきや否や、

一、吾人は時〻圖書室に行き、以て諸書を參考せんとす、然るに常に吾人をして慨せしむるものあり、何ぞや、吾人今某書を閲せんことを係員に乞ふ、係員答へて曰く、該書は某先生のもとにありと、かゝる答をきくこと決して少しとせず、何たる事ぞや、既に圖書室の書は教師たる人も、生徒たる人も同じく閲覧權を有するに非すや、而して長らく教師たる人の手に留め置くことは實に生徒の不利を顧ざるもののみならず、また教師たるべき人のなすべきことに非るなり、固より或特別の特遇は可なり、されど數日間否數十日間も己れの手に置くは吾人の大に慨く所なり、是の聲は吾人一人の聲にあらず滿校の聲なり、吾人は之が爲め如何に不利なるや知るべからず、吾人貧學生、また此圖書室の惠にあつからずんは諸書を參考するを得ざるなり、教師たる人幸に吾人の衷情を容れられ、吾人の便益を計られんことを切に希ふ所なり、六百の健兒果して如何と考ふるか、噫、（白眼子）

猛省を促す

雜誌新人は新春第一號の劈頭に於て、「現代教育の方針」を論ず、教育の目的を說きて曰く、

今國民教育について單純に之をいへば、國民教育の目的は、國家の生活力を增し、其生活の狀態を高むるの能力を國民子弟に啓發せしむるにあり、換言すれば、國家をして其現狀に於て出來うる限り進歩せしめ、之をして世界に於ける任務を一層完全に盡さしむるをうるの國民を養成するにあり。更らに平易に之をいへば、國民をして皆完全なる國士とならしむるにあり。しかも、予の所謂國士とは、必ずしも政治家軍人を指すにあらず、學者論客をいふにあらず、農は農として、商は商として、勞働者は勞働者として、其執る所の職業の如何を問はず、よく人間の品位を具へ、國家の一員たる自覺を有し、各自の地位に殉じて國家生活の上進に資するものをいふ。而して予が稱して國家の生活といふ時は、固より單に經濟的政治的生活に限らずして、宗教、文學、藝術、學術等にあらゆる精神的方面をも含むもの也。

と、更に名覽地よりして、現代教育の狀態を論ずて痛切を極む。

今の教育は恰も教育の機關あるが爲めに教師なるものあり、教育の機關あるが爲めに子弟は學問をさせらるゝの觀あり。教師とは定められたることを其機關の中に教へ、依つて以て安樂なる衣食の途をゐんとするものに過ぎず、如何にして自己の達したる所、ゐたる所を以て、後進を啓發育成せんかを苦慮するものにあらざる也、學生とは、唯一種の義務によるが如く、命令によるが如く、流行によるが如くして、學問の機關に自らを束縛するものに過ぎず、其何を學び、如何に學んで、己れを長ずべきかを問ふものにあらざる也。今の教育なるものは、比較的安樂にして、上品なる位置を最も容易に、少數子弟に與ふるを目的とするもの也、父兄の子弟を學校に送り、又た子弟が學校に求むる所のもの、多くは之れに過ぎざる也、此故に所謂世間の賣れ口、これ教育の効果如何を判斷するの標準にして、之を男子についていへば俸給賣買の盛に行はるゝ所、之を女子について言へば嫁入の早く都合よく行はるゝ所、これ社會需用の存する所なりとは、彼等の見解なるが如し。しからずんば、教育とは名譽のみ、裝飾のみ、看板のみ、父兄と子弟との虛榮心を滿足せしむるの道具に過ぎざる也。如何にして人間たるの品位を發揮すべきか、如何にして各自性賦の天職をする所を十分に完うするの能力を養ふべきか、如何にして之れに要するの智識を最もよく蓄ふべきかは、父兄固より問はず、學に就ける當人亦た問はず、教導の職にあるものまた深く問はざる也。父兄はたゞ子弟をより高級なる學校に送り、そが一日も早く卒業して、高位顯職につき、もしくは富樂の地をゐんことを願ふのみ、其稍可なるものに在つても、世間の前に於て衆人に超越せるものとならんと志し、其劣等なるものに在つては、たゞ早く安樂なる糊口の途をえんことを求むるのみ、教師たるものは、たゞ一定の學課程を授け、其生徒がよく學校を卒業し、高級の學校に進み、更らに世間に於て名譽ある地位をゐんことを心掛くるのみ、彼等が教育の効果を見るは試驗の成績に過ぎず、子弟將來の世間的成功に過ぎず、其子弟に如何ばかり國士たる品格と能力とが發輝せられつゝあるかは敢て多く問はざる也、かくの如くにして、學問の皮相、淺薄、空疎、上すべく、形式に流れ、個人と國家との政治的、經濟的、精神的生

活を高むるに効果乏しきを責むるは、之れに仙臺に往けと命じたきて、その大阪に在らざるを責むると同じく、到底無理なる注文たるを免れざる也。

これ記者が力を盡して論せる所也。あゝ果して然る乎。果して然る乎。教師とは如何にして自己の達したる所、得たる所を以て、後進を啓發育成せむかを苦慮する者にあらざる也とや。學生とは其何を學び、如何に學んで、已れを長ずべきかを問ふ者にあらざる也とや。あゝ果して然る乎。果して然る乎。如何にして人間たるの品位を發輝すべきか、如何にして各自性賦の天職とする所を十分に完うするの能力を養ふべきか、如何にして之れに要するの知識を最もよく蓄ふべきかは、父兄固より問はず、學に就ける當人亦た問はず、教導の職にあるものまた深く問はざる也とや。あゝ果して然る乎。果して然る乎。

記者の說く所論ずる所、果して正鵠を得たるや否やは、予輩之を知らざる也。然り、然りと雖、予輩亦現代學生の末班に列する者、豈に記者の言をして、馬耳を吹く東風のごとからしめて可ならむや。

所謂文明とはこれ人を賊するものゝ謂乎。歲は來り歲は去り、世の有爲の士を待つ久しからずや。白嶽の雪に思を高め北海の涙に心を洗へる、北辰校裡半千の健兒、內に省みて疚しからずむば幸也。（朔風）

吐月峯

○吐月峯と題したが、此吐月峯は果して龍が出るか、蛇が出るか、乃至は瓢簞と間違へて駒が跳り出すか、夫れとも相馬の古御所の如く、凄いれ仔が出るか、御本人にも頓と分らず、兎に角、吐月峯に立ち上る唯の淡き煙と見るなれせ。

○昨秋、幸德秋水の社會主義神髓を讀んだ、流石は本家本元だけに、所論極めて痛切である氣の早い幽的は疾つくに出て終う二更の頃、犬の遠吠を聞きながら徐ろに社會の未來を想像すると、ヒシ〳〵と腦にこたゝるとがある。諸君！試に想へ、洋の東西を問はず、貧富の差は年々、デェオメトリカル、プログレッションをなして居るではないか、地球上十四億の同胞の子孫が、平等に生活して行けば今後十万年生存するを得るとして、今日の有樣で進んだならば万分の一、億分の一の大長者は數百万年相傳へる代りに一然り、その代りに一千万億の良民の子孫一この中には吾々の子孫もあるであらう一が僅か一万年か五千年か百年か二十年かで、餓莩となつて野に横はらねばならぬのである、帝國主義、地主制度を喜ぶ人は、子孫は何でも構はぬと思ふて居るのか、又は此大長者に當撰させやうとの煩惱心か、前者ならば人情なしの獸と云ふべしで、後者ならば、三百圓を當にして一舛の玄米を算するウツケ者と云ふべしゞ、寒心々々。

○射倖的の廣告、新聞や雜誌に頻繁たり、青年子女に取りては、色情に次いでの誘惑物と云ふべし、と云ふて落撰した怨と思はれてい迷惑千万。

○大町桂月、こんにゃく、新田義貞、紫の風呂敷、教師の頭の高き、金澤市、新體詩、此等は唯何となしに、イケ好かぬものなり。

○太陽は未だしも、中學世界や少年世界等の廣告に、新刊の書籍の夫れと肩を幷べて如何はしい廣告があるのは、今の書肆の單に射利的なとを現はして居る、番頭曰く、雜誌を高く賣るよりも、廣告料をウンとせしめて廉く捌いた方が利方でごわす。

○柳涙の松原饅頭を一日に三遍讀むだ、魔風戀風は二冊三時間で、併し前のは一字殘らず、後のは一枚置位に。成程これでは海老茶式部や眼鏡の兄さん達に持囃されるのも無理はない。

○仇名好の日本人と罵る人があるが、文字太夫の山科を聞くよりは越路の夫れが、より能く感ぜらる、學生が髯を延ばし、髪を分けるも、こゝですて。

○地上數十間の樓上、未明より打出す櫓太鼓の音、我には次の如く響く、サー〳〵入らっしやい不具者の舞踏は此處で御座い、飲拔けの大飯食いの天下の利喜死はこれで御座い、ドコドン〳〵。

○百人一首を取るに巧なる者多し、能く歌意を識れるもの寡し矣。

○三味線を下品の器として排するものあり、使用者の上品ならざるを以てなり、誤れりと云ふべし、石橋思案外史は都々逸を立派な韻文なりと主張して盛に都々くる、皆誦すべし、彼れ新年の御題に和して曰く、「嚴に根生の松さへ今朝は鶯も笑顔の初日影」と、豈好からずや。

○露國キン子フに猶太人虐殺事件あり、之を聞きて快と叫ぶ者ありや、而かも憐むべき新平民を嫌はざるもの幾人ぞ、異人種は爾のく增きか。

○最も憐むべき官吏は巡査と執達吏となり、俸給少なく激職なればあり。最も癪にさはる者は巡査にして、最も憎らしき者は執達吏なり、人造の法律を楯とし官吏を武器として貴人富者の先陣となり、平民貧者を苦むればなり。

○分らぬものは裸体畫なり、眼で視て美といひ、醜と論ふ、鮭の皮を口で味ひ甘味しといひ、不甘味と斥くると一般、蔓語まりで、下らぬ論といふべし。我は兩方共嫌なり。（好子）

一筆啓上

餘寒猶忍び難く候處皆々樣方御機嫌よろしくゐらせられ候趣奉賀候妾の敬愛すべき御方々樣達は何處の御方にて今如何なる處に御住ひ遊ばさるゝや一向に存じ不申賤しく云ふ甲斐なき身にしあれば未だ皆々樣に拜眉の榮をうる機會も無之多人數の事故一々妾の胸を御話し申し且つは御高說をも承りかぬ候まゝ拙き筆に物云はせてあら〳〵可申述候

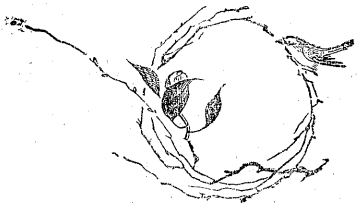
妾は門地もなく家財もなく從ひて此明らけき難有御代にあひながら人並々に學びの庭に通ふ事も叶はで今はたゝ女の纖弱き細腕をたよりに辛くも朝夕の煙を立つゝ世にも淺ましき賤の身に候かゝる身にしあれば皆々樣の樣に御立派なる學校に入らせられ天晴家をも身をも親の名をもあげ世の爲國の爲大君の爲且つは眞理とやら人道とやらの爲に一心不亂に御勉强遊ばさるゝ御方〻を見るに付けては我身の程を打忘れて飛立つばかり嬉しくあはれ立派なる御殿達かな我身の限り心を盡しやがて立派なる男として世の中に濶步させまほしき心地なんせられ候かゝる事を申上候へば淺墓なる女性かなと指彈せらるゝ御方も候はんされど一寸の虫にも五分の魂とやら御殿達が妾を女に似た男なりと申さるれば妾は御殿達を男の皮着さる女と可申上候

妾の親しき人の內にも御殿達の御友達下宿被遊候がそれは〳〵女の樣なやさしき御方にて男の表章とも申すべき鬚は少しも候はず性急癇癖强き妾にはいかであれにても御男子かと思はるゝ程に御座候妾の內とも もとは少々の資產もありけるが御維新れ折家道も衰へそめ妾がまだ幼き折

父なる人はみまかり獨り母の手に養はれ妾が十四才の時母もまた亡き父上の後を逐はれ妾はせん方なく〳〵緣者の内に引きとられしも妾に遺産もなく些の養育料とてもあければ人の内に厄介物となるも面白からぬ心地のみせらるゝまゝ强ゐて其内を出で三十路を超ゆる今日までも衣食のみには不自由なく素より見得も形もあき妾の身なれば夫もなく子もなく孤燈を守るのみに候妾に雄々しき心根なくば遺産なくばとて慈悲ある緣者を辭し面白からぬべとて一厘半錢人樣の御惠をうけでかゝる侘び住居はすまゝ赤裸々とも申すべき身一つにて立ち働けるまに〳〵かせぐに逐ひ付く貧乏なく今もかくは獨立の生活を營むなれされば妾は御隣の書生樣がひたすら衣食を御憂慮被遊を見るに付けては更ら〳〵御無理こは思ひ待らねど主家を放逐されし犬猫でさへまたそれ〳〵に食を得て飢え死ぬ事はなきものを何故にかくは衣食を御心配遊ばさるゝやと不審の念に不堪候渡る世に鬼はなしとやら細腕ながら朝夕怠らずありわいにいそしめば衣食を憂ひたる事は一度も候はず人樣よりも未だ見下げ賤まれし事もこれ無く候聞けば先達て御校にて御演說會ありし由賤の身の親しく方々の御高說を承る事も不叶遺憾やる瀨あく存候ひしに幸御隣の書生樣より承り及び申候野田樣とか申す御方は成功の眞義岡田樣は速に目的を定めよとか云ふ事を御話被遊候趣とかく今の人達は目的もなければ成功の眞義をも辨へ不申赤門を潛り出で角帽を拋つやこゝかしこと漁りまわりひたすら需要供給とやら云ふ事を金科玉條と被遊候て一厘にても給料の高き處を〳〵と飛移る有樣にて天職や目的やは一向に頓着あく從つてやつと或職務に蟻附かるゝも一向に事に忠實なく熱誠なく些の愉快も滿足もなくて不快に日を送る內に妻あり子あり年も四十の坂に差しかゝるや赤門を出でし當座は幾分か心に存せし天職に蟻附かんとの念も何時しか失せて今は拜金宗の今道心となり下素根性となり俗吏根性となり屬官根性となり哀れ墓あき無意義の生涯を送る事との相成と存候是れ畢竟成功の眞義と目的の確乎不拔たるものとなきに職由するものと存せられ候已に今道心と相成候上は黃金の前に物なく後に物なく山吹色とし見れは爲さゞるなく犯さゞるあく學校の先生までが恐ろしき送物に眩まされ珠數つなぎとなりて囚屋の內に送らるゝに至り候若し成功の眞義と自已の天職目的とを御心得あらばもめ〳〵かゝる失態は有之間敷と存候且つ早くより一定の目的を定められ居らば學問をなすにも意氣込み鋭くて龍山さんの御說の如く活學問も出來うべくと存候日は終日夜は終夜苦吟しつゝ字引と首引しつゝも何の爲にかと問はれて一向に御返事あき御方々は實に不憫に存せられ候ひたすら御膳の種を得んとて無意義の苦學を被遊山吹色の夢を見つゝ一生を送らるゝ人のお身の上思ひやるかふに何とも申樣無之候かゝる人々のみの寄合へる學校に校風の揚らぬは勿論の義にて栗林樣の御慨き被遊候も實に御尤千万にて妾も同情の一滴を垂れ申候沈香もたかず屁もひらず靑葉色して日々御勉强ろ御方々を見るにつけては異國のはてしなき沙漠の邊に彷徨へる亡國の民に思ひ及び何となく御國の末まで心に掛り申候かく目的もなく成功の眞義をも辨へず從つて活學問の出來ん筈もなければ校風の揚る筈もなく雲耶霧耶の裡にたゞうか〳〵と日を送る人々れ寄合にて其間に一の規律や節制や氣風や制裁や同情や情義やと云ふものは藥にしたくも見當らず只富闘の樣に偶然同級同組になれりとの考か一通りの御付合ひ御世辭

ゝだら〳〵は申すものゝさらば同窓の身に何事か起れりとても一向に知らぬ顔の半兵衛にて其水臭さ今更申上ぐる程野暮の骨頂に御座候妾は賤の女性且つは井戸端會議にも余りに遲れをとらぬ饒舌に候へど決して〳〵無根の事を誣もまゝく候一例を申上候へば昨日まで同組にて相樂める人々も一度落第などの不幸に遭へば人の同情をうくべき斯不幸なる人々はもとの同組生より一種の下げしめた眼を以て見られ路上に會ひても相識らざる如き有樣に候はずやたまに二三の人々が外所の見る目も睦まゝく被成居らるゝを見受け申候も是れ亦同穴の虫とも申すべき堅くろしく申候へば蜂房蟻衒同臭の方々が小さき城廓を搆へて互ゝ睥み合ふものにて却々に不面目大体より申せば皆々樣御互の間柄は反射的とか打算的とか申すべきものにて彼一度來れば吾も一度束き彼我れを愛する一なれば吾も亦彼に一の愛を還へさんとの考にて管飽の如き世に申す知己てふ事は六ヶ敷栗本さんの悲壯なる御演說は實に今日の有樣の反射鏡かと存ぜられ候かく五六人の方々が熱心に忠實に二十の數にも滿たぬ人を御相手として御演說被遊候御勇氣の程察し奉るうらに難有候硬骨の臣あれゞ國亡びずとかやかゝる氣丈の人々を持てる學校は未だ容易に廢滅の深谷に陷る事も可無之やがて立派なる校風も揚るべく立派なる人々も輩出せらるゝ事ならん廢滅なぞゝ不祥の言を申すもいとし子の末を思ふ女氣に候へば女はかゝるものゞと餘りに御怒りあき樣くれ〳〵も願上候猶一事申上度きは其節一時の開會が二時半と相成申候趣こは實に東洋流の大弊風に候へゞ以後の屹度當事者に於ても御勵行成被下度く又當事者ならぬ人々も是非勵行せしむる樣力められ度候特に堂々と演題を掲げをきながら出席せず公衆を欺き同窓を賣るとは不埒千萬に候はずや是れ果して男子の行爲に候や妾が御殿達を男の皮着たる女性と申すも全くこれが爲に御座候かしく

（賤女）



寮報

第二回鉄脚隊遠足記事

既に菊花地に落ち野橋霜を帶ぶるの時、我が鉄脚隊は第二回の遠足を擧行せり。寂寞たる仲冬の田園再び吾人に親まんとす。

十一月二十一日、放課後直に寮に歸れば、各自修室騷然たる談笑の聲あり。或は外套貸借の談判をなす者、脚胖の泥土を掃ふ者、皆意氣揚りて愉快の情面に溢る。余も飯森塞郊に外套を借る。午后二時停車場より滝車にて發す。此行や既に議決す晴雨に關せず行かんと欲するなり。小松驛にて下車、雨霏々たる中を泥を踏んで進む。松並木列る街道行けども行けども盡きず、校歌寮歌の聲幾度か繰り返へさるゝうち、日や入りけん、暗雲空を蔽ひ、黃昏の色我が脚を襲ひ來り、四顧唯松並木の黑影空を摩するを見るのみ。

孤村を過ぐ、木片落ちたるは大工の家か竹屑散れるは桶屋が家か、皆戸を閉して眠れる丘陵の如く時に我等が歌に驚かされて小窓を開き見る小兒老婦、思ふに靜かなる夢や破れし。嗟々なる爐邊に語らふ彼等が樂しさも畫き出さる。

余は多田露波と行く行く宗教を語る。闇中彼の聲を聞き外套の頭巾を見るのみ。白壁暗にもすかされ樹影疎なるは寺院にや、鐘撞くとて時雨るゝ鐘樓に佇める雛僧のありやなしや。微に星の如き灯を認む。一點又一點忽にして消ゆ、灯を見出でゝは胸中に希望の光あるが如く覺え消もるや凄然として行手に迷ふ心地あり。唯友あり共に語らひ行く。我を樂しく導くは彼なり、彼を淋しからせずして導きしもの或は余なりし、ある可し。人世是に似たるもの無きか。

灯再び見えぬ俄に多く見ゆて、町に出でしを覺ゆ。蓋し動橋なり。此處を過ぎて片山津に向ふ、顧れば停車場の灯花やかに、眠げなる驛夫の姿も見ゆ。村に出でゝ道を問ひ、獨木橋を相戒め行く。漸くにして丘に沿ひ道盡きんとするを覺ゆる頃片山津に入る。

各室を占領し荒き宿屋の浴衣着て浴場に行く。番傘さして出で迎にをなす湯女の樣、誠に春の名所圖繪見る心地す。

此夜一室に會し茶話會を開く、食ふもの芋と柿とあり。秋の名殘腸にしむ。席上吉崎先生得意の日清戰爭實歷談あり、說く處戰爭中に實驗せられし幽靈談なり、宇宙に神秘多きを思ふの我れそゞろに興の湧くを覺ゆつ。床に入りても話止まず、然かも一枚の蒲團に脚を包み得ず、且柿の冷たさ腹にしみ露波と二人遂に熟睡せずして曉に至る。五時半床を離れしが寒さに耐ゆず直に浴場に赴く。至れば寮生既に廣き槽中を游泳するあり、家鴨の如く水中にもぐるあり。蒸氣と水沫と四方を襲ひて快云ふ可からず。名殘と稱して數回入浴するあれば、湯女が歌ふ一曲の富山節に耳傾くる多恨の友もあるべき。宿屋の五階に登りて三湖を望む。

曉色晴れて磨き出だされたる三個の湖、たとへは姉妹の如く睦び合ふてゞ集りたる、雪の紗に包まれたる加賀の群峯淡く清澄に映し、渺漫たる北の空に低れたるは何處ともなく朝日の色を受けて薔薇の花の咲き亂れさらんが如き雲なり。

靜かなる波を切りていそがしけに來る舟、其に乘れる若き男の無心に空を仰げる、思ふに滄浪の曲も云ひ出でさる可し。

此處を發す。小丘の雜木林既に黃褐色を帶べる處小河に沿ひて田を廻る處、此あたりの景色何となう東京の目黑に似たりと思ふ。

やがて那谷寺に着く、兩側の老杉山氣を帶びて冷かに、境内の楓樹、既に時過ぎ、紅扇紛々として地に散り敷き、僅かなる錦堆雨を帶びて枝に殘れるも哀れなり。巖石に人工を加へたるは俗臭厭ふ可しと雖、苔徑疎林のしめやかなる趣無きにあらず。村の子が石段に立ちて楓葉の美しきを集め居れる、梵唄の聲も無き古禪宮唯蕭索たる風の繡佛を吹ける、消魂の思無きにしもあらず。

此處にて散じ美川に再び集合す可き事となる。雨漸く晴る、昨日通りし街道に出づ。小き町にて尺八吹く男の機織り場の前に佇み居るを見、戀に身を誤れるにか、はた此世の憂ひに耐へずして何處ともなく徘徊へるにかなど空想にふけりつゝ小松に着きぬ。

漸く日傾く、我より先きに急ぎし若武者、今や落武者とあり、街道の彼方此方より道づれとなる。日本海の濤聲我が耳をうち我が足は漸く重し。美川の長橋に暫時休んで漁夫の網を張れるを眺む。二人にて交る交る上げて一つの魚も得る處なし、然かも平然烟草をふかして、火鉢かの〻船中にうづくまる。我等先づ耐え得ずして去る。

美川停車場に入る。場内の灯昏く夜風寒く、寮生の意氣や猶出發前と殊ならず、校歌寮歌の聲『プラットホーム』に轟くと雖、余や帽子にさせし凋みたる紅葉を手にしたるまゝ悄然として聲なかりき（ふもと）

（因に記す此擧や實に我校北辰會遠足部と連合して行ひしものなり）。

自修餘錄

（其一）

既に八時近くなりぬ。自修室より机に倚りつゝ窓外を眺むれば夜色水の如く澄みぬ。老杉の幹を縫ふて來る寮生、朗々たる大聲を發し薩摩琵琶歌を吟するもの、校歌を歌ふもの、漢詩を吟するもの、英詩を歌ふもの、皆三々五々相率ゐて寮に近づく。遠く古郷を距てゝ百里の異境に在りては、此寮は第二の家庭の如き思ひある可く、げに鬼神をもひしがん荒男が門限に遲れん事を恐れて寮に急ぎ來る、其狀何ぞ可憐なる。あゝ此處に慰籍あり、休息あり。此處に光あり眠りあり。又もや微に響く唱歌の一節、そゞろに我も涙ぐまれぬ。

（其二）

可憐なる君、三歳より盲いたる妹の爲めに友より喇けらるゝをも厭はで琴の稽古に行き給へりとや。優しき君の心根なるかな。父君母君の他にすぐれて君を愛し給ふとか、こは無理ならぬ事なり。優しき乙女の身に盲いては何を此世の慰めとし給はん。男の身なれば琴の稽古ゑ行かれては他の喇りも少からざる可きに唯いとしき妹君の爲めに行かれしとや。優しき君の心かるかな。

寮の茶話會にて聞く君の罪なき琴唄。あゝ我は思ひぬ。君の此唄を歌はるゝ時、覺束なき樣して白き細き指に爪をさぐり給ふ妹君の可憐なる姿の君が眼にうつらずやと。

（其三）

同じ寢室に枕を列べし友、一夜淋しげに語りけるは病の爲め明後日一先づ歸國する事に定めたり、今逢ふは何時なる可き、さらば君もさきくおはせと。同じ信仰の道をたどりては雨の夜も倦かず語り合ふて更かしけん。友云ひけるは又九月には逢はんかと、あゝさなり君と我との中つきぬ運命ならば又逢はれやせむ、さらば君壯健に又來ん秋を待たんと云ひぬ。

友の、切角親しき友の出來たるに此度は我自ら

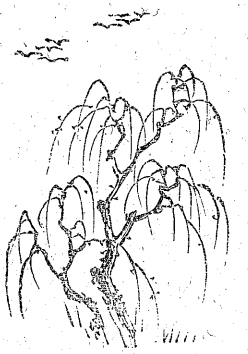
去らざる可らざる運命となりぬとかこつ。げにな〜あらぬ世や。

（其四）

同じ信仰をたゞる友の聖書抱えて日曜毎に小使の子を教えに行くあり。友の病氣を看護せむとて學校を休みたる友あり。願くば我が時習寮の暗面（ダークサイド）をのみ窺はず美しき友情ろ溢るゝを見ずや。清き學生の意氣存せるを見ずや。（ふもと）

前號所載時習寮歌の誤植

時習寮歌の下に「（其二）」脱す。「光明退なく」は「光明隈なき」の誤



投書心得

一投書は本會原稿用紙に限り御認めありたし

一長文と雖も全文を寄贈せざれは掲載せず

一雑誌上には雅號のみを記載するとを許せども姓名は必ず編輯委員まで御報道あるべし

一學理上の論説諸小會の記事雅文詩歌等續々寄投ありたし勿論言の或は政治を論し或は德義に背くものは一切掲載致さゞるべし

明治三十七年四月七日印刷
明治三十七年四月十日發行

編輯兼發行者　吉村政行　石川縣金澤市早道町五十六番地
印刷者　生沼倍男　同縣同市穴水町二番丁二十九番地
印刷所　明治印刷株式會社　同縣同市高岡町九十番地
發行所　第四高等學校北辰會